

不遇な少女達の魔王道

那由多 ユラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

散々嬲られ、殴られ、虐げられた二人の少女。
彼女達は何をして何を為して何となるのか。

∴それはまあタイトル通りでさあ

※『吸血鬼系転生者の異世界生活』の番外編の主人公、〈喜多 希依〉
〈喜多 琴音〉がメインのifストーリーです。

が、別に吸血鬼系転生者を読まなくても一切問題ありません。

※なろうにも同タイトルで投稿しています。

目次

リアルタイム更新キャラプロフィール	7/30更新	1
雑談回 クリスマスイブ編	2018	11
雑談回 クリスマス編	2018	16
雑談回 お正月編	2018↓2019	22
雑談回 ユラさん小説投稿一周年記念という名のただ雑談やりた かっただけ		30
雑談回 令和になってもやることは変わらなかった		35
本編		
第1話		45
第2話		48
第3話		57
第4話		62
第5話		71
第6話		77
第7話		85
第8話		88
第9話		95
第10話		104
第11話		108
第12話		114
第13話		122
第14話		128
第15話		133

第 2 3 話	第 2 2 話	第 2 1 話	第 2 0 話	第 1 9 話	第 1 8 話	第 1 7 話	第 1 6 話
187	178	171	163	154	145	140	138

リアルタイム更新キャラプロフィール 7 / 30 更新

ヘルムートside

喜多 希依

カスタムキャストで作ってみたもの。イメージが壊れる可能性があるるのでそれが嫌という方はご注意を。

元の世界では極度のいじめられっ子

両親は居らず、幼い頃から正体不明のナニカから過剰な援助を受けながら暮らしていた。

中学生辺りからはやられたらやり返すようにしていたが結果悪化した。

常日頃様々な叩かれ方をしたことから人を傷つけることに一切躊躇がない。

服装や化粧には一切こだわらず、外見よりも着心地を優先する。が、類まれなルックスのおかげなのか大抵の服は着こなせてしまう。さらにそれを自覚している辺りタチが悪い。

それなりにオタク趣味でキャラが可愛ければ内容がダメダメでも好きになれる。

二次、リアルともにガチ百合。ただし、ギャグとしてならBLも楽しめる。

それ以外の趣味は読書や料理、ゲームなどなど…

最近なにか趣味が見つからないかと右往左往している。

ゲームのキャラメイクに半日かけるタイプ。

本格的にいじめられたりした小学三年生以降はほとんど授業に出ていないため高校受験はかなり苦労した。

琴音のことは後輩、妹、親友、恋人、全てをひっくるめて家族と認識している。

戦闘スタイルはステータスMAX・MIN、失われた数値MAX・MINを活用した超広範囲、超高速、超高火力の近接戦闘を好む。格闘技を覚えるより速さ、火力を上げて殴る方が強い（確信）

喜多 琴音

元の世界では幼い頃から両親からの虐待を受けていた。

小学一年生の頃に体にできた無数の傷跡や生傷をクラスメイトに見られて以来人間扱いされず、ゾンビやサンドバックとして扱われていた。

物心着いた頃から殴られていたことから日本語以外に肉体言語が母国語となり、よくやり返しては家に連絡がよこされた。

服装は希依の影響をかなり受けていて着心地重視。傷跡を見られないために肌の露出は少なめ。

前の世界の趣味は基本インドアで特撮オタク。

最近の趣味は『理解者』の力を使った歴史のお勉強とリンちゃんに魔法等を教えること。

戦闘スタイルは超古代に使われていた魔法を使った殲滅が得意。

リンちゃんからの教師としての評価は「凄いわかりやすいけど雑談が長いかな。たまに破壊力を魔王様と比べるのはマイナス。勝てるわけないじゃん…」

クラーク

日本出身の妖怪、覚。

かなりの親バカ。

動物が娘、マーフィーの次に好き。

希依、琴音のことはとても気に入っており、よくマーフィーと一緒に居るリリアは2人とたまに希依とで可愛がっている。

十一代目魔王の愛子とは日本では同期だったが今の世界に来たタイミングがかなりずれ今では年齢差がかなりひらいている。

天然の厨二病。伝染しやすい。

戦闘スタイルは読心を活用した相手の攻撃を完全回避しながら殴る蹴るの近接戦闘。だいたい希依と同じ。

リンちゃんからの教師としての評価は「教えるの上手いけどおちよくるのがウザイ！」

「種族としての性分だから勘弁してくれ！」byクラーク

マーフィー

鬼神と人間のハーフ。

両親は周囲の目に耐えられずマーフィーを捨て、鬼神である母親は姿をくらし、父親は国に捕まり、魔族と交わった罪で処刑された。

その後、迫害を受けていた当時3歳のマフィをクラークが保護し、娘となった。

理解者となったのはその数ヶ月後のこと。

表情があまり出ないが意外とアクティブで危険の少ない魔物を捕まえて動物園を発展させている。

クラークの親バカが凄すぎて反抗期が訪れなかった。

戦闘スタイルは鬼神の力を使った希依やクラークと同じ近接戦闘の他、スノーウルフなどの戦闘が得意な魔物をけしかける戦い方が出来る。

リンちゃんからの教師としての評価は「特訓相手の魔物の選択は完璧！………たまに人間混じってない？」

リリア

猫の獣人。

アルビノのために村の獣人達から虐められていた。

両親も身体が弱く、リリアを産む時に母親が死亡、父親もその後まもなく死亡した。

最近では安全な魔物やマフィと孤児院によく遊びに行っている。

希依や琴音と違い虐めてきた奴らを恨んではいないが二度と会いたくない。

戦闘は苦手だが戦えないわけではない。ヘルムートの住民が強すぎるだけ。

最終人形 ラスト

初代魔王が当時の人間の国から連れてきた。

加減速という能力で普段は2倍速で暮らしているがそれでようやく人並み。

最高速度は不明。

普段は魔王城で、メイドとして働いている。

趣味は仕事の節がある。ボードゲームが得意。

戦闘スタイルは加減速機能を使った高速移動と変形を使った多様な能力を使った戦い方。長いこと生きているので大抵の戦い方は出来る。

リンちゃんからの教師としての評価は「私の種族のことを私よりも分かっててちよつと怖い…」

リン

妖狐の幼女。

勇者、織田 光亮に両親と弟を殺されている。

今は魔王城で住み込みで勉強や訓練をしている。

ヘルムート王国魔王直属騎士団団長（団員一名）

魔法は琴音のような殲滅力のあるものではなく効果範囲が狭く小回りの効く魔法と回復魔法、妖狐としての魅了や炎攻撃を得意とする。

クツク

種族はキメラ。胴と頭部はライオン、尻尾は蛇、大型の翼がついている。かなり大型で生息地不明。

希依のペット。

琴音からおはようのキスをされてテンションが上がりまくった希依が世界中を全力疾走した時にうっかり轢きそうになり、そのまま連れてきた。

普段は孤児院の前に番犬の如く居座っている。子供たちからはまるで遊具のように扱われることもあるがクツク本人（本獅子？）も満足でもない様子。

宿屋のサキユバスちゃん

人間、魔族問わず人気だが特定の誰かと付き合ったりはしていない。仕事一筋。

たまに客をからかうが大抵仕返しされる。

…可愛い（確信）

愛子

十一代目の魔王。

ちなみにクラークが十三、希依が十四代目。
種族は首無しのでろくろ首。

ヘルムートの食文化を急激に発展させた。

特に卵料理が得意だが和食なら大抵作れる。

今はヘルムートの魔王城近くで卵料理専門店、『卵王』の料理長を務めている。

ありとあらゆる物質を卵料理に変化させるといふ超レシピを編み出した。

魔法は苦手だがやることなすことなんでも魔法じみている。

ドヌーヴ

九代目魔王

種族は吸血鬼。

魔法や呪術を扱う。

かなり色白でファツションセンスが崩壊的。

無駄にキツチリと言葉を区切る話し方をする。ラスト曰くただのキャラ作り。

日傘をよく持ち歩いている。

エリーとは魔王時代からの付き合い。

エリー

呪いの館の集合体。

金髪ワンピースで身長は30センチほど。

とある館の悪霊を他へ移すためにドヌーヴが作った人形に憑依させてたまたま出来上がった少女。

ジュリエット・アリエル

異世界から来た勇者。

元は教会のシスターだったが何故か肉弾戦が得意。

現在は希依の作った孤児院に住み込みで嫌々ながら嬉々として働いている。

ヘルムート国民達

種族は多様で妖狐、悪魔、狼男、サキュバス、インキュバス、グール、スケルトン、キョンシー、その他一人一種族の者が多数いるほか、少ないながらも人間も暮らしている。

大人はほぼ全員勇者並に強い。：属性的相性はあるが。

代々魔王達の我儘に振り回されるが国にとってマイナスにしかない場合は魔王城に攻め込んでくるくらいには勇敢。

N y a r l a t h o t e p

ニヤルラトホテプ、ナイアーラトテップ、ニヤルラトホテップ e t

c :

呼び名は様々。

クトウルフ神話の神格の石柱。

希依の父親で、その時の名は『喜多 煌鬼』

詳細は省くが、希依の不遇な部分を自身の性質を利用して方向性を変え、死から遠ざけていた。

現在は思春期について勉強中。

歴代魔王

代々〈最強〉の職業を持つ者が数百年から数万年務めている。

引退した魔王は各々趣味に走ったり行方をくらましていたりする。

異世界からの来訪者が魔王になることが多いが必ずしもそうという訳では無い。

特徴はステータスの数値がMAXになっている点。
希依は特別で土と表記されているが違いは力加減の幅くらいである。

歴代理解者

代々〈最強〉の職業を持つ者と共に居る。

基本的に〈最強〉と〈理解者〉はセットだがクラークのように一人でいた場合は近い者が後天的に理解者となる。

〈理解者〉は実質全知の存在となり、知りたいことは大抵分かる。

本来の役割は他者と異なる存在である〈最強〉の良き理解者となることであるが、レベルがほとんど上がらない〈最強〉の経験を次の魔王、また次の魔王と経験を受け継がせる事も役割である。

人間 side

織田 光亮

現代の世界の日本から召喚された勇者。

正義感が強く、魔王を倒して欲しいという頼みを理由も聞かずに了承した。

学校では生徒会長と学級委員を兼任しており、希依や琴音というサボり魔に正義の鉄槌を下していた。

九尾の妖狐となったリンにより死亡。

勇者一行

生徒会役員や学級委員を務めていた所謂エリート達三名＋勇者で結成されている。

勇者以外はリンちゃんが攫われるのを防ごうとした両親に殺された。

ウイルスン

希依達が異世界に召喚されて、城を飛び出して最初に出会った人間

の一人。

希依曰く声が騎士団長風。

クラークと友人だったりとまだまだ謎が多い人物。

ディアス

ウイルソンとパーティを組んでいること位しか分かっていない優男。

自動人形 二号機 三号機

人間の感情を再現するために作られた自動人形。

二号機の右手、三号機の左手が肘の辺りで繋がっている。

二号機は少年、三号機は少女の見た目をしている。

首に大きな歯車の一部が露出しており、首を横に倒すことで体内のゼンマイを巻くことが出来る。

皆からはそれぞれ『二』『三』と呼ばれている。

元々は二号機だけだったのだが、感情の起伏が激しすぎたためにストッパーとして3号機が作られた。

同じ自動人形のラストとはモーゼスで初めて出会う。

戦闘向きに作られてはいないがそれでも実力は魔族並み、知能は理解者に一歩及ばずと言ったところ。

モーゼスの住民の子供達を主人とし、大人達から守っている。

琴音の超古代魔法により死亡したかに思われたが、後々生存が確認された。

モーゼス

ユラさんが嫌いなものを詰め込んだ街。

…といっても伝わらないと思うのももう少し詳しくすると、暮らしているのは人身売買を生業とするクズやそのクズから買い取るクソ、喧嘩屋やタチの悪い冒険者、一時的に拠点として活用する者など。

人間が住まう比較的真っ当な国と魔国ヘルムートの間辺りにある
ので勇者はここを拠点にしていた。

第15話で琴音の超古代魔法により破壊され、魔物のなりそこない
やゴーレムが暮らす魔境となっている。

後に魔境は希依によって砂漠化した。

雑談回 クリスマスイブ編 2018

希依「さてさて始まってしまいました雑談回クリスマススイブ編です！

今回語らっていくのは『不遇な少女達の魔王道』の主人公こと私、希依と」

琴音「メインヒロインの私、琴音がやっていくよー」

希依「つてまあ、まだ登場人物が少ないからイブ編、クリスマス編、お正月編の3つとも私達二人が基本は喋っていく感じだけどね」

琴音「ラストさんとかリリアちゃんとかは？」

希依「ユラさんの中でまだキャラが定まってないから今回は来れないってさ」

琴音「…ユラさんって誰？」

希依「本作の作者」

琴音「え!?!私たちって小説のキャラだったの!?!」

希依「…琴音、わざとらしい演技はやめなさい」

琴音「はーい」

希依「こんな感じでここはメタありネタバレあり世界崩壊ありの面白空間なので難しい事は一切考えずに楽しんでいってくれたら嬉しいです」

琴音『吸血鬼系転生者の異世界生活』を読んでくださった方にはおなじみだよね」

希依「読んでない方はぜひ呼んでやってください。ただし、駄文注意です」

琴音「おねーちゃん容赦ないね」

希依「ほらほら、そんなこと言っていないで早速本題にはいるよ」

琴音「そんな改まって話すことあるの?」

希依「…ない。」

じゃああれ、イブの思い出。琴音、なんかある?」

琴音「おねーちゃん、私達にまともなクリスマスが過ごせてたと思っ?」

希依「…だよね。なんかごめん。

ちなみに何してた？もしくは何されてた？」

琴音「…頭に生クリームと火のついた蠟燭をトッピングされてた」
希依「怖い怖い怖い！え!?大丈夫？冷えピタ要る？」

琴音「もう遅いよ。おねーちゃんは何してたの？」

希依「私？」

私はあれだね。パイ投げされた仕返しに冬の学校特有の緑色したプールで溺れさせてた」

琴音「ものっそい臭そうだねそれ。

あれ、その日って大体の学校はもう冬休みじゃないの？」

希依「クラスで強制参加のクリスマス会を開きやがってくれやがってね」

琴音「開きやがってくれやがるってすごい言葉生み出したね」

希依「貸してあげよつか？」

琴音「ううん、要らない」

希依「そつか」

琴音「それよりもっと聞かせてよ」

希依「…何を？」

琴音「おねーちゃんがやった仕返しエピソード」

希依「いいけど、琴音も喋ってね？」

琴音「もちろん！」

希依「じゃあ、小学四年生の頃」

琴音「うんうん」

希依「トイレの個室で男子にバケツで水をかけられたから仕返しにプールの授業中に男子全員の服と下着、体育着を墨汁で真っ黒にした後に美術室にあったドライヤーでカッピカピにした」

琴音「何その続きが超気になるエピソード」

希依「ちなみに私はこの後早退して一週間くらい学校サボったから彼らはどうなったかは知らない」

琴音「上手く逃げただね」

希依「じゃ、次は琴音の番だよ」

琴音「うーん…」

希依「えと、もしかして言いにくい？無理に言わないでもいいけど」
琴音「ううん、そうじゃないの。」

私の場合シンプルに殴る蹴るの暴力が多かったからひたすら殴られたら相手の骨を折るくらいしかしてない」

希依「まあ小学生の頃だからね。私の方が特殊か」

琴音「いや、おねーちゃんのはそれは中学生でも高校生でも大人でも特殊だから」

希依「結構酷いこと言われてるな、私」

琴音「結構酷いことされてるからね、おねーちゃん」

希依「上手いこと言われた気がする。座布団一枚」

琴音「わーい」

希依「まあないけど」

琴音「だよね、知ってた。」

でもさ、読者さん達は私達がどんな姿勢で話してると思ってるんだろうね」

希依「普通は椅子に座って話してると思うよね」

琴音「いや、わかんないよ？裸で抱き合いながら話してるかもしれないし」

希依「それ私にとっては天国だけど限りなく雑談に向いてない状態だよね」

琴音「もしかしたらガラス越しに話してるかも」

希依「それほんとにどういう状況？」

琴音「電話で話してるかも！」

希依「うん、せめて対面はしよっか」

琴音「リングの上かな？」

希依「対戦しようとは言ってるじゃない」

琴音「もう二人とも座布団でいいんじゃないかな」

希依「断念はしないで。意外と一文字しか被ってないし」

琴音「おねーちゃんが欲しいところに欲しいツツコミを入れてくれるからいい」

希依「もう何年の付き合いだと思ってるのさ」

琴音「小六からだから：七年くらい？」

希依「：意外と短かったね」

琴音「：うん。もう10年くらい経ってると思ってた」

希依「まあよくあることだよ。：多分」

琴音「多分なんだね」

希依「だってほら、私って元の世界で友達とか居たことないし」

琴音「私は!？」

希依「琴音は妹みたいなものじゃん」

琴音「みたいなものじゃなくて、妹そのものだよ！あと恋人！」

希依「あーはいはい。ほら、話逸れてきてるよ」

琴音「：：ゴメ、なんの話してたっけ」

希依「イブの日してたか、だね。」

琴音は虐待されてて、私はイジメの仕返し」

琴音「一度でいいから普通に幸せなクリスマスをお過ごししてみたい」

希依「：何それ悲しい」

琴音「おねーちゃんと同棲し始めてからも出来なかったからね。」

：：あれ、なんでだっけ」

希依「：：ソシヤゲのクリスマスイベント周回してて忘れてた。：

ほんとゴメン」

琴音「あ、そうだった。」

いや、私も一緒にやってたからいいよ。今年はできるかな」

希依「いや、異世界にクリスマスはないでしょ」

琴音「そうなの？」

希依「だってほら：：えー：：クリスマスってあれでしょ？：：きり

すと？：：ざびえる？：：とか言う人の誕生日でしょ？

：：違ったっけ？」

琴音「だいたいそんな感じだったと思う。」

あ、じゃあさじゃあさ、クリスマスじゃなくてもいいからパー
ティーやろうよ。お城にファイさんとかリリアちゃんとかリンちゃ
んとか、あとついでにクラークも呼んで」

希依「あ、それなら全然いいかも。むしろなぜ今までやらなかったし。

：：琴音もケーキとか作るの手伝ってね？」

琴音「あ、ははは。：：私は飾り付けでも買いに行こっかな」

希依「ま、それならいつか。

ではでは本日はここまで！」

琴音「雑談回は明日（12月25日）の午前零時にも投稿されますのでそちらもどうぞ！」

雑談回 クリスマス編2018

琴音「さ、イブの続きだよー」

希依「クリスマス編ではゲストとしてこの人が！」

琴音「本作、『不遇な少女達の魔王道』と処女作、『吸血鬼系転生者の異世界生活』の作者、

性別不明年齢学生準ロリコン兼準シヨタコン中二大好きなイタイ

ユラ「ちよつとまってストップバックシヤラップ！」

いきなりユラさんの極秘情報をぶち撒き散らかしちやつてくれやがってんのさ！

ステラちゃんでもそんなことしないよ！…多分」

希依「多分なんだね。あとはじめまして」

ユラ「ん、はじめましてだね希依ちゃん、琴音ちゃん」

琴音「…はじめまして。帰っていいよ」

ユラ「琴音ちゃん、もしかしてユラさんのこと嫌い？」

琴音「だって、…私の殺し方雑なんだもん」

希依「そこ!？」

琴音「私もおねーちゃんみたかつこよくてなさけない死に方したかった」

ユラ「いや、…マジゴメンなさい」

希依「……なさけないって……いやそうだけどさ…」

琴音「ここまでの話が分からない方は『吸血鬼系転生者の異世界生

活 #2』をご覧ください！」

ユラ「#1は黒歴史すぎるので見なくておつけーです！むしろ見ないで！」

希依「ならまず非公開にきなさい」

ユラ「いや、なんかそれは負けた気がするからやだ」

希依「…そう」

琴音「おねーちゃんは自分の死に方に文句ないの？」

希依「いや、そもそも死んだ私と今の私は別ルートなわけだし…

あ、でも琴音を殺したあれはちゃんと殺してから死にたかったか

な」

琴音「おねーちゃん…」

ユラ「イチヤつくのは大歓迎だけど雑談回だから会話はしてね」

希依「…ユラさん、帰っていいよ」

ユラ「希依ちゃんにまで言われちゃった！ステラちゃんとは気が合ったのに！」

希依「それはあくまで私の来世。今の私は違う」

琴音「…割と聞いたかつたんだけどさ、死んだ方の私ってどうなったの？」

希依「理解者のそれで分からないの？」

琴音「おねーちゃん、自分の来世がGoogle先生に聞いたところでわかると思う？」

希依「あ、はい」

ユラ「メタいこと言ってしまうと琴音ちゃんの来世は現状未定なんだよねえ。」

ハイスクールDxDの二次創作を書きたいからもしかしたらそこで使うかもしれないけどまだなんも決まってるじゃないし」

希依「おいちよつと待てユラさんや、吸血鬼系転生者の方はどうした？」

ユラ「あはははは…」

琴音「笑って誤魔化しても無駄だよ？」

希依「今年中に更新再開するって言ってなかったっけ？」

ユラ「言ったような気がするけどちよつと厳しいかもですはい」

希依「というと？」

ユラ「吸血鬼系転生者の#1の方が黒歴史すぎるってさつき言ったよね？」

「うんうん」

ユラ「だからリメイクすることに決めました!!」

「はあ!？」

琴音「ユラさんいま何言ってるのか分かってんの!？」

希依「#2が終わってないのに#1をリメイクするつつた!？」

ユラ「つつたつた。まじつた。

いや、実際はそこまでの労力じゃないんだよ？

全文コピーした後ステラちゃんの口調を調整して地の文を加えたりちよつと変えたりするだけだから」

琴音「…それでもそこそこ時間かかるよね？」

ユラ「琴音ちゃん、…冬休みって知ってる？」

琴音「あ、うん。…ユラさんって部活とかで忙しいんじゃないかなかったっけ？」

ユラ「大丈夫。会計の仕事は全部顧問の先生に投げたしユラさんはその部活の遊び心担当だから」

希依「いや、ちよつと意味わかんない。そもそも何部なの？文芸部？」

ユラ「えと写真部でね、部長さんが真面目&説教担当、副部長の1人が写真の技術担当、もう1人の副部長がその他PC等の機材担当って感じ。」

琴音「ユラさんだけ浮いてるね」

ユラ「実際写真展に出した写真も異彩を放ってて浮いてる」

希依「ちなみに入賞はした事あるの？」

ユラ「写真展ではなく芸術展で入賞したことがあるね」

琴音「らしいっちゃらしいよね」

希依「…話が脱線してきたね。結局どこら辺が大丈夫なの？」

ユラ「ユラさんは基本スマホから投稿してるから部活中でも執筆、投稿出来るってわけだわさ」

「真面目に仕事しなさい」

ユラ「帰宅部二人に言われたくないね」プイツ

希依「…ユラさん…殴るよ？」

ユラ「ちゃんと死なせてね？」

希依「は？」

琴音「おねーちゃん、ユラさんも私達レベルでイジメにあってたからそれなりに狂ってるよ？」

希依「ああ、そういえば私のイジメエピソードはだいたいユラさん

ユラ「いや、小学生の頃の反省を生かして成績が空白にならないように書いたよ?」

「違うそうじゃない」

ユラ「あ、そもそも普通の人は反省文書かないか」

希依「うんうん」

琴音「あ、おねーちゃん、ユラさん知ってる? 最近のいじめられっ子って自殺しちゃう子が多いらしいよ?」

「そうなの?」

琴音「おねーちゃんはそうだけどユラさんもニュース見ないの?」

ユラ「うん。だってあれ食欲失せるじゃん」

希依「朝ごはんと夜ごはんの時間に放送してるからね。」

：へえ、自殺しちゃうんだ」

ユラ「なんか、言い方悪いかもだけどなさけないよね。いじめる方は当然として自殺しちゃう子も」

琴音「誰もがみんなユラさんみたいに死ねって言われたら『お願いします』なんて言える精神してないよ」

希依「イジメ関連のニュースの嫌いなところもう1つあった。」

いじめっ子が逮捕されることがないのか嫌なんだよね」

琴音「ああ、ほんとそう。一回小学生だろうと逮捕しちゃうえば私達みたいな度の過ぎたイジメってかなり減ると思うんだよね」

ユラ「でも実際問題さ、学校にとってマイナスイメージにしかかならない事すると思う?」

希依「結局イジメを無くすためには早いうちにいじめっ子達を速攻で殺すことが一番だよな。生中継とかしてさ」

琴音「ねえおねーちゃん達、今回クリスマス編なの分かってる?」

「あつ…」

ユラ「さっ、クリスマスらしい話しよっか」

希依「クリスマスらしい話って?」

「「……………」」

ユラ「じゃ、じゃあじゃあさ、二人にとってクリスマスってどんなものだった？」

「ソシヤゲのイベントで過ぎていたもの」

ユラ「あ、そういえばそう言ってたね。じゃあ二人が出会う前は？」

希依「私達にそれを聞くの？」

ユラ「あ、ごめん。そうだったね」

琴音「私は普通にイブの続きだったよ？」

ユラ「ちよ、琴音ちゃん!?無理に言わなくていいんだよ!？」

琴音「ううん、クリスマスはイブよりは平気だったからさ。」

縛られて蝋燭とかでトッピングされてる私はクソ両親のおせっせを見せつけられてた」

希依「ちよ、おせっせして…」

大丈夫?犯されなかった？」

琴音「…うん。平気。おねーちゃんは？」

希依「私は前日の学校のクリスマス会でボロボロになった髪を美容院で整えたりしてたかな」

ユラ「あくあれだね、私達にクリスマスらしい会話なんて無理があったね」

琴音「ほんとだよ。ユラさんのばーか」

希依「私達に明るい雑談は難しいということが分かった辺りで今回はここまで」

「「お正月編に続くー!」」

雑談回 お正月編 2018↓2019

希依「さてさて皆様、あけましておめでとうございます！」

琴音「あけおめことよろ〜」

希依「さ、ノルマクリアということですねそろそろ締めに入ろつか琴音」

琴音「いやいやいやいやいやいやいや、おねーちゃんタイトル見てタイトル！雑談回だよ！今回もゲストが来てるんだよ！」

希依「う、うん。それは私も聞いているけどさあ、あれマジ？」

琴音「超マジ。ユラさんからの手紙もほら」

希依ちゃん、琴音ちゃんへ

ある意味ユラさんの娘と言っても過言ではないような子が行くから仲良くしてあげてね！

p. s 手紙って書くと絶対にp. s って書きたくなるよね！
ユラさんより。

希依「あ、そう。いや、娘てアンタまだ学生でしょうが」

琴音「というわけで今回のゲストさんどうぞ！」

「吸血鬼系転生者の読者の方は久しぶり！そうでない方ははじめまして！」

ステラは絶対にして究極にして完璧の吸血鬼、ステラ・スカーレット！」

琴音「というわけでお正月編のゲストはifおねーちゃんの来世、ステラさんでしたー」

希依「いや、大丈夫なの？」

ステラ「だいじよぶだいじよぶ。ほら、雑談コーナーだから」

琴音「なんか手慣れてますねえ」

ステラ「そりゃ、一応君たちの先輩だからね」

希依「歳は下だけどね」

ステラ「それにほら、年下先輩ロリ美少女つてめちゃんこ可愛くない?」

琴音「自分で言うんだね。…いや、おねーちゃんもたまに言っただけど」

「いや〜可愛いって罪だね〜」

琴音「ほらそこハモらない」

「まあまあ琴音ちゃんや」

琴音「うつわめんど。この……この2人の関係性どう言えばいいのかわかんないまじめんど」

ステラ「まあ確かにね」

希依「私と琴音の関係も分かりにくいけど字にしてみたなら恋人で義妹で先輩後輩つて感じでなんとなく分かるけど、

ステラ「…ちゃん?さん?」あ、ステラちゃんつて呼んで。琴音ちゃんもね」…あ、うん。ステラちゃんと私は複雑というかなんというか…」

琴音「おねーちゃんからしたらステラちゃんは来世の人でステラちゃんからしたら自分の前世。本来同一人物なんだよね」

ステラ「まあ私達二人とも同じ人をベースに作られてるからね」

希依「あれ?そうだったけ?」

ステラ「ステラはユラさんの性格と口調、希依ちゃんはユラさんの小学生時代の経験をベースにしてるからね」

琴音「なんか私だけ違うのってヤダ」

ステラ「いやいや、そんなことないよ?琴音ちゃんにはユラさんと同じ特撮オタという属性を受け継いでるからね」

希依「いやそれただのキャラ設定じゃん」

琴音「(*・ω・*)グスン」

ステラ「あくほら、泣かないでよ琴音ちゃん」

琴音「ウウ…」

ステラ「あんまり嘘泣き続けると『けらけら女』憑依させちゃうぞ〜」

琴音「なんでバレてるの!?クソ両親でも騙せたのに！」

そして昭和・平成以降の妖怪関連の文献では、人通りのない道を歩いている者に笑いかけて脅かす者で、笑い声によって人の不安をかきたてるもの、また笑い声はその一人だけにしか聞こえず、気が弱い人は笑い声を聞いただけで気を失ってしまうという妖怪を無理やり憑依させないで！」

ステラ「お、さすが理解者。セリフの内容がWikipediaそっくりだね」

希依「あ、言っちゃった」

ステラ「にやはは、あとがき雑談コーナーだからだいじょーぶ」

琴音「…ここ、あとがきじゃないよ」

ステラ「おっと。」

さてさてではでは怪異解説コーナー！」

琴音「あ、誤魔化した」

希依「琴音つつこむところ違う！いきなり不遇少女の方でやったことないコーナー始めないで！」

琴音「あ、そっちな」

ステラ「今回紹介するのはこの子！」

ノストラダムスの大予言

希依「だから始めないでってば！」

ステラ「いやいや、でもだよ？希依ちゃん、この子はこの日この時間で紹介するのが一番面白いんだって」

琴音「そうなの？」

ステラ「まあ詳しくは後でね。まずは概要を話そっちな。」

『ノストラダムスの大予言』予言にまつわる怪異。主にフランスの占星術師ノストラダムスが十六世紀に記した詩集『予言集』に記した予言のこと。特に有名なのは1997年7月に恐怖の大王が現れ人類が滅亡するっていう予言かな」

希依「私達はまだギリギリ生まれてない頃だね」

ステラ「そだね。」

でも、結局この予言は20年近くたった現在でも人類が滅亡する兆候は一切なくてこれは当時の終末ブームに便乗した五島氏による創作ではないかと言われているよ」

琴音「なーんだ。…いつそ本当に滅べばよかったのに」

希依「ほんとにね。」

それでき、なんで今日紹介するのが一番面白いの？」

ステラ「それはね、今回ここで2019年の予言を紹介したいと思ってるね。」

既に他のサイト等で見ちゃった人はつまらなかつたり微妙に違ったりするかもだからその人にはゴメンね」

琴音「ユラさんに文句を言っても更新速度が上がるだけだからやめてね？」

ステラ「さ、9個もあるからどんどん行くよ！」

1つ目、ノアの洪水レベルの大洪水が日本にも発生！」

「まじで!?!」

ステラ「いや、2人はもう居ないから別にいいでしょ」

希依「あ、そうだった。にもってことは他の国でも起こるんだよね？」

ステラ「最も被害を被る国は、ハンガリー、イタリア、チェコ共和国、そしてイギリスであるとされているよ」

さあさ2つ目！日本に大量移民が押し寄せて滅亡！

欧州諸国とアメリカは、移民管理のジレンマだけでなくテロ攻撃の増加に関する問題に対処する」

琴音「なんかよくわかんないし次言っちゃって」

ステラ「理解者ちゃん頑張ってよ…」

3つ目！トランプ大統領の『エルサレムが首都』発言により、宗教過激派激増、日本もテロの標的に！

中東をはじめとする各国・地域で宗教過激派が増え、多くの人々が国を離れてヨーロッパに避難しようとして混乱や戦争が起きる」

希依「なんか政治的なのはあんまり面白くないね」

ステラ「国の政治に関わる魔王様が何言ってるのさ」

琴音「おねーちゃん政治なんて一切してないよ？問題が起こったら即解決するようにしてるからね」

ステラ「さすがモン娘の国、パワープレイが捗るね。」

4つ目！気温100度以上に。温暖化が劇的進行

気候変動が地球環境に影響を及ぼし、政治指導者は大気汚染物質排出量の削減に合意する」

希依「お風呂のお湯が冷めにくくなるね」

「そこ!？」

琴音「いやいやおねーちゃん、これがほんとだったらあれだよ？
カップラーメンを水で作っても暖かいんだよ？」

ステラ「希依ちゃんも琴音ちゃんもなんか違うくない!?これあれだよ？
冷たいケーキが食べられないんだよ!?暖かいシヨートケーキなんて外道じゃん!」

「(。D。)ハッ!」

「…にやはは、5つ目！異常気象が紛争を引き起こし、中国がリーダーになる

地球温暖化は多くの武力紛争を引き起こす。戦略的な動きを通じて、中国は新しい世界のリーダーになる」

希依「もういつそ滅べばいいんじゃないかな」

ステラ「自分関係ないからって投げやりになるのはどうかと思うよ?」

琴音「じゃあステラちゃんなら温暖化で戦争が起きたらどうする?」

ステラ「いや、そもそもステラだったら『氷の造形魔法 時代』で氷河期にできるから温暖化がまず起こらないよ」

希依「このチートめ…」

ステラ「宇宙を瓦割りできる娘にだけは言われたくないかな」

琴音「宇宙を瓦割りってすごいパワーワードだね」

希依「さすがに出来ないと…できるかな」

ステラ「ステラが昔言った気がする世界を滅ぼしてでも女の子を救

う、を希依ちゃんならほんとにやりかねないね」

琴音「…おねーちゃん、やめてね？」

希依「…大丈夫。宇宙は壊すかもだけど空間までは壊さないから」
琴音「どこら辺が!？」

ステラ「にやはははは!♪」

6つ目!第三次世界大戦の勃発とローマ法王の暗殺。

第三次世界大戦は、2つの超大国が関与し、27年続く。それは最後のローマ法王がキリスト教徒によって暗殺された後に始まる」

琴音「もういつそソードアート・オンラインのGGOみたいなVRゲームを作ってそこで戦争したらいいんじゃないかな」

ステラ「ゲーム内で死んだら現実でも死亡?」

琴音「さすがに可愛そうだから一ヶ月断食とか?」

希依「いや死ぬからそれ」

ステラ「ステラなら大丈夫」

希依「まああなたはね」

ステラ「ううう…希依ちゃんの目が冷たい。」

7つ目!アメリカが史上最大の地震に見舞われ、日本も被害に遭う」

琴音「日本じゃないなら別に、ねえ?」

希依「うん。アメリカに知り合いがいる訳でもないし」

ステラ「にやはは、そっか。」

8つ目!豚人間が誕生する!

動物が人間に近づき、動物と話ができるようになる。それと同時に、人間が動物を傷つけることもやめるようになるだろう」

琴音「なんか豚人間とか今更って感じ」

希依「だね」

ステラ「…?…あつそっか、君らの世界はオークとか普通にいる世界だったか」

琴音「そそ。だからほんとに今更って感じだよね」

希依「それに人間が動物を傷つけることをやめるだろうって言われてもさ、人間が人間を傷つけてるうちは実現不可だと思っただよね」

ステラ「さすが元被害者は言うことがキツイね。

最後9つ目！200歳まで生きられるようになって、世界中の人々から言語の壁が取り払われる！

医学が飛躍的に進歩することにより、人々の生活が豊かになり、200歳まで生きられるようになる。そして、新たな機器の登場により、世界はバベルの塔が破壊される以前の世界になる」

「へー」

ステラ「なんかりアクション薄くない？1つ目の洪水みたく驚いてよ」

希依「いやだって200歳まで生きようになるなんてのは予言されなくてもわかる事だし言語の壁が無くなるなんて言われても世界共通語が日本語になる訳じゃないんでしょ？」

ステラ「いやまあそうだけどさあ…」

琴音「そもそもその頃現場に居ない私たちじゃそんなに怖いとも思えないからね」

ステラ「うう…紹介する相手ミスったなあ…」

希依「いきなり不遇少女でやったことないコーナー始めるからだよ」

ステラ「ウグツ」

琴音「そもそもどれもこれもいつ起きてもおかしくないことばっかだったし」

ステラ「ウニヤウイツ」

希依「今後の地球のことをネタバレされてもねえ」

ステラ「ううう…」

もうやっ！お家帰る！希依ちゃんのばーか！」スキマオープン

ステラ は にげだした

琴音「あ、帰っちゃった」

希依「キリもいいしそろそろ締めよつか」

琴音「だね。ではでは皆様、」

「良いお年を！」

雑談回 ユラさん小説投稿一周年記念という名のただ雑談やりたかつただけ

希依「今は昔、首狩りの翁というものありけり」

琴音「…いきなりどーしたのおねーちゃん？」

希依「今ちよつと昔話を全力でホラーに改変することにハマって」

琴音「いきなり変な暇つぶし始めないでよ」

希依「あはは、ごめんごめん」

琴音「…？」

希依「…？どした？」

琴音「いやほら、早く続き聞かせてよ」

希依「ああ、そういう事ね。」

村に混じりて影で狩りつつ、よろずの民をしとめけり。名をば三途の送り人もなむいいける。

…こつから続きなんだっけ？」

琴音「あ、覚えてないんだ『竹取物語』」

てかかぐや姫をどつから誕生させるつもりだったの？」

希依「そりやまあ、首の断面から？」

琴音「怖っ」

希依「弱竹のかぐや姫ならぬ柔首の首離姫かな？」

琴音「…月からの使者を背後から暗殺しそうな姫だね」

希依「次は琴音の番ね。桃太郎とかでやってみてよ」

琴音「えっ、私も!？」

えー、

むかしむかしある所に、おじいさんとおばあさんがいました。

おじいさんは鬼ヶ島へ鬼狩りに、おばあさんは川で包丁を研ぎに行きました」

希依「ちよつとまって、それ速攻で完結しない？」

琴音「う〜ん、とりあえず行ける所まで行ってみよっかな」

おばあさんがシャリ、シャリ、と研いでいると川にどんぶらこっこ、どんぶらこっこ、と犬、猿、騎士が流れて来ました。

おばあさんは今日の夕飯にしようと思ひ、河岸に引きずりあげ、食べる部位の少ない頭を切り落とし、血抜きを始めました。

犬、猿を肉塊に変貌させ、騎士の解体を始めると、驚くことに騎士のお腹には立派な赤ん坊がいるではないか。」

希依「その子名前どうするの？『騎士太郎』？」

琴音「まあ聞いてよ。」

おばあさんはしつかりと太らせてから食べようと肉塊にはせずに持ち帰りました。

家に帰るとすぐにおじいさんも帰って来ました。

おばあさんはおじいさんに話すと、おじいさんは赤ん坊に『メシ太郎左衛門』と名付け、首輪と手錠、足枷にアイマスクをメシ太郎左衛門に着せました。

それから三年の月日が経ち、メシ太郎左衛門はすくすくと実り、鞠も驚愕のまん丸ボデエになりましたとき。

これが、後のミートボールとなったのです。

ごちそうさまでした。

…どうよ！」

希依「うつく、くく、あははははははっ！」

いやごめん、途中まで怖かったのに最後のがツボに入った！あはははははははっ、ヒヤヒヤッヒヤッ、」

琴音「落ち着いておねーちゃん！女の子がだしちやイケない感じの笑い声出てる！」

希依「ヒィーっ、お腹痛いっ！」

琴音「…ごちそうさまでした」

希依「アヒヤヒヤヒヤヒヤっ!!ちよっ、それ反則っ」

琴音「むう…」

希依「あー、ごめんね琴音、ちゃんと怖かったからさ、ね？」

琴音「…ミートボール」

希依「ウツ、クク」

琴音「もう！」

希依「…そういえば私、ミートボールって食べたことないかも」

琴音「急に話が変わった。…え、マジで？学校の給食とかは？」

希依「私、給食は食べない派だったから」

琴音「そんな朝は食べない派みたいに言わないでよ。え、じゃあ何食べてたの？」

希依「普通に菓子パンだけど。メロンパンとか」

琴音「飽きなかったの？」

希依「毎日違うもの持っていったからね。カステラとかロールケーキとか」

琴音「それパンじゃないし」

希依「いやいや、だって小麦使ってるでしょ？多分。四捨五入すればあの辺はパンでしょ」

琴音「シヨートケーキは？」

希依「パン。あんまり好きじゃないけど」

琴音「そうだったねそういえば。チーズケーキは？」

希依「大好き。パンかと聞かれたら微妙だけど」

琴音「焼きそばパンは？」

希依「…？焼きそばパンはパンのついた焼きそばでしょ？」

琴音「おねーちゃんのことがよくわかんなくなってきたよ。ホットドッグは？」

希依「チンしたワンコ」

琴音「なにその新手下ネタみたいなワード。じゃなくて！まさかホットドッグ知らないの!?ソーセイジ挟んだパンだよ？」

希依「…ああ、あれ？I K O Aでコーヒーとセットで買うやつ」

琴音「うん、まあそうだけど」

希依「あそこのコーヒーめちやくちや熱いから猫舌の人の天敵だよ
ね」

琴音「いまはどうなの？最強になってからは猫舌治ったの？」

希依「いや？全然。むしろ感覚が強くなって余計にダメになった」

琴音「うわあ、辛い」

希依「コーヒーと言えば最近ユラさんの味覚が幼児退行したって話
はしたっけ？」

琴音「ううん、してないよ?…え、マジ?」

希依「らしいよ。」

学校のレポートで三日間徹夜した時にコーヒーとかエナジードリ
ンクでカフェイン中毒になりかけてからしばらく控えてたら」

琴音「なつちやったの?」

希依「うん。」

久しぶりにブラックコーヒー飲んだら苦くてあんまり飲めなかつ
たって言った。

まあ元々マツカンとブラックコーヒー交互に飲んだりする人だつ
たからそこからブラックコーヒーが無くなるだけなんだけどね」

琴音「マツカン、あの甘ったるいやつね。太らないの?」

希依「ユラさんって太りにくい体質だから平気なんだってさ」

琴音「全国の女の子の天敵だね」

希依「ユラさんの母親と弟も太りやすい人だからたまに八つ当たり
されるって言った」

琴音「まあユラさんもメシ太郎左衛門みたいにならない事だね」

希依「琴音ってどうだったっけ?太りやすい方?それでも無い方
?」

琴音「ここは女の子として言わないでおくよ」

希依「ちなみに私はそもそも少食だから太るほど食べれないよ」

琴音「まあそうじゃないとお昼ご飯が菓子パン一個じゃ足りないも
んね」

希依「おじいさんとおばあさんは果たしてどれくらいお肉食べたん
だろうね」

琴音「メシ太郎左衛門がミートボールサイズだとして…:大人12
〜3人くらい食べるんじゃない?」

希依「まさかのジジババ巨人説」

琴音「…いや、そこまで深く考えて作ってないから」

希依「まあそうだよね。

そろそろいい頃合いだし最後に二人でオリジナルの昔話を作って終わりにしようか」

琴音「おねーちゃん、もしかしなくてもハマったね？」

希依「…うん。じゃあはじまりはじまりね。」

むかしむかしある所に、二人の姉妹がいました。

次は琴音の番ね」

琴音「姉妹ね。」

お姉さんは村へ侵略に、妹ちゃんは村で殺戮を楽しんでいました」

希依「ちよっ!？」

お姉さんは村の中心に村人を集め、妹ちゃんは一人一人殺していくと、それはそれは可愛らしい幼女が姉妹を止めにやって来ました。

『おねがいだからもうやめて！あたしたちなんにもしてないじゃん！』

ほら琴音、頑張ってるね」

琴音「オチが見えないよ…」

幼女の言葉を聞き、二人は悩みました。

私達には暮らす地が無いし、でもこの幼女は可愛いからなるべく聞いてあげたいし…

二人は悩んだ末に答えを出しました

おねーちゃん、頑張ってるね」

希依「そこで投げる!？」

悩んだ末に二人は両者そろって幼女が欲しくなり、最終的に半分こをすることに決めました。

二人は幼女を縦に左右で半分こすると、幼女は何も言わなくなり、二人の侵略を止めることは出来ずに村は亡くなりましたとき」

「めでたしめでたし!」

雑談回 令和になってもやることは変わらなかった

ユラ「雑談回まで読んでくださってる皆さん、ありがとうございます！そして、…令和になったことを祝う時ってなんて言えばいいのかな？あけおめ？令よろ？あれ〜？」

琴音「そこで思考の海に溺れそうになってるユラさんは置いといて、今回は私、喜多琴音と」

希依「不遇少女の主人公で琴音の姉、希依と」

らら「きつとほとんどの皆さんは初めまして、ユラさんの新作、『楽羅來ららちゃん』の主人公、楽羅來ららと申します。今回はよろしくお願いしますね」

琴音「以上、私達四人で今回の雑談回やっていきます。ほらっ、令和とかどうでもいいからユラさん帰ってこーい」

ユラ「……はっ！メリーハッピーニューイヤークルシメマス！」

琴音「なにそれ!？」

まあ、いつか。初めましてららさん。歳下だしららちゃんの方がいいのかな？」

らら「ご自由にくれて構いませんよ。『お前』『らら』『ららちゃん』『らーらちゃん』など、色々な呼び方をされますから」

琴音「じゃあららちゃんって呼ばせてもらうね。そういえばおねーちゃんとユラさんはららちゃんと『お久しぶりです。設定』で行くのか？それとも『初めまして。設定』で？」

希依「琴音、それ言ってる時点で初めましてが出来るわけないのわかってて言ってるよね？」

らら「分からない方が多数でしょうから私から説明させて頂きますね。いえ、語らせて頂きますね。」

実は私、ららとユラさん、希依お姉様は以前お会いしているのです。しかしいまその回はこの『不遇少女』にも『楽羅來ららちゃんは語りたい』にも存在していません。その理由を語るには今とは違う、ららちゃんは語りたいたいについて軽く話さないといけません

元々『楽羅來ららちゃんは語りたいたい』という作品は私がおすすすめす

る作品についてや、それ以外にも世の中についてなど色々なことを語らせて頂くという作品だったのですが、『小説じゃない』というお叱りを受け、現在当時のものは一切現存しておりません。

その時に後付けで小説化しようとユラさんと私が決意し、どのような小説にするのかを作者のユラさん、『吸血鬼系転生者』の主人公、ステラお姉様、『不遇少女』の主人公、希依お姉様の四人で緊急会議が開かれました。

それがお姉様方との初対面ですね」

琴音「なんでおねーちゃんのことをお姉様って呼ぶの？」

ユラ「そういうキャラ設定になんとなーくしちやっただからね。

だからもし新たな新作が出来たらその作品の主人公はららちゃんにとつては弟か妹になる訳だよ」

琴音「おねーちゃんの妹の座を奪いに来たわけじゃないんだね？」

らら「はい。今後のお二人のイチヤラブを期待しておりますね」

ユラ「不遇少女はそういう作品じゃないんだけど…」

希依「ユラさん、私と琴音のイチヤラブシーン、お願いね」

ユラ「しまったこの人シスコンだった」

琴音「おねーちゃん、そのお願いは私とイチヤつきたくてのお願い？それともららちゃんのお願いを叶えたくてのお願い？」

希依「え？もちろん琴音が大好きだからだよ？というか現状ららちゃんを妹としては見れない。友達とかの方が近いのかな？あんまりいたことないからわかんないけど」

らら「悲しいことを言いますね」

ユラ「ららちゃんの人生も人のこと言えないからね？両親の金稼ぎの道具にされたりとか。…あれ、ユラさんとこの子達って人生ハード過ぎない？」

琴音「まさか今更気づいた？私達以外にも大変な子達いっぱいだよ？リンちゃんとかマフィさんとかリリアちゃんとか」

ユラ「まじじゃん。ほんとごめん」

希依「ユラさん、次の作品は過去も未来も幸せな主人公にしてね？」
らら「平成から令和に変わることですし、新たにやってみてはいか

がですか？」

ユラ「無理むりムリ！それをやるには一作品休止か完結させなきゃキツいつて！」

らら「私のところは休止してもいいんですよ？まだ読んでくれる方も少ないですし」

ユラ「それはダメ。ららちゃんところは書いててすごい楽しいからね。あーいや、希依ちゃんところもステラちゃんところも楽しいけどさ、ららちゃんのは別格に楽しいよ」

希依「…なにそれ告白？」

ユラ「それはないから」

琴音「否定するあたり怪しいかな？」

ユラ「琴音ちゃん、いいことを教えてあげる。」

ユラさんにとっては希依ちゃん達主人公に琴音ちゃんなんかは大事で可愛い我が子ではあっても決してヨメではないんだよ」

希依「…ユラさん」

ユラ「な、なに？」

希依「もし結婚して子供が出来ても絶対ッ対に虐待とかしないように気をつけてね？」

ユラ「あつたりまえでしょうが！そんな意味わかんないことするわけないでしょ！」

らら「ユラさん、ガチすぎて気持ち悪いです。ネーミングセンスとかと一緒に創り変えましょうか？」

ユラ「敬語で話す子を罵られると興奮するよね」

希依「分かる」

琴音「おねーちゃん分かっちゃうの!？」

希依「密かにリンちゃんをそういう子に育て上げようと計画を企てたりして」

らら「そういう子、語りたいに居ましたね」

ユラ「浄花町ののちゃん、初めてのヤンデレキャラだね」

希依「マジでどんなネーミングセンスしてんの？私の名前もちよつと変だなとか思ったけどそれ以上じゃん」

らら「他にも『塵 殺欲』という方がいましたね」

琴音「忘れがちだけど一番おかしのはららちゃんだからね？」

ららい「らら』って」

ユラ「初期案として『楽羅良蘭 』っていうなまえもあったんだけどね」

希依「なんで『ら』ばつかなの？」

ユラ「ユラさんは小説をスマホで書いてるんだよ」

希依「……だから？」

琴音「ああ、なるほど」

らら「そういうことですね」

希依「えっ、二人は分かったの？」

琴音「おねーちゃん、スマホのテンキーボードを見てみ？」

希依「それが？」

ユラ「それなりにデカイスマホ使っているとキーボードが使いにくいんだよ。右手で持っていると右列の『さ行』『は行』そして『ら行』は打ちやすいんだよ」

希依「まさかその為だけにあの名前になったの？」

ユラ「いや、まあ他にも奇抜な名前にしようと思ったりもしたけど」

琴音「まだ出てないキャラにはどんな名前の子がいるの？」

ユラ「…はい？」

琴音「だから、他の子の名前をネタバレしてって言うてるの」

らら「それ、私が聞いていいんですか？」

希依「ららちゃん、あなたの脳なら分かるでしょ」

らら「いえ、確かに知ろうと思えば分かりますが知っている人がいるのなら出来ればその人の口から聞きたいのです」

希依「ネットだと g r k s とか言われるから気をつけてね？」

えと、ここはどの小説本編とも別時空の別世界の、ステラちゃん風に言うと『おもしろ空間』なの。ネタバレしようとして、世界崩壊しようとして、どんなことをしようと本編には一切の影響がない不思議空間なの」

らら「なるほど。ではユラさん、ネタバレをどうぞ」

ユラ「いや、ないよ?」

希依&琴音「は?」

らら「それは、ネタバレできる内容がない。という訳ではなくバラすネタがない。今後の展開を一切考えていない。ということですか?」

ユラ「その通り。ららちゃん頭いいねえ」

琴音「ふーん。あ、じゃあ次話以降に登場するキャラを私達で考えようよ」

ユラ「えっ?」

希依「いいんじゃない?面白そうだし」

ユラ「ええっ!」

らら「いいんじゃないですか?登場するかはともかくとして、自分たちで登場するキャラクターを考えるというのは楽しそうです」

ユラ「ららちゃんまで!」

琴音「じゃあこれからの定番コーナーにしようか。うん、それがいいよ」

希依「じゃあシンキングタイム3分!ユラさん、どんなキャラがいとかある?」

ユラ「えつとじゃあ、ららちゃんのライバルキャラが一人欲しいかな?他にも可愛い子とか」

琴音「よーい、スタート!」

〈3分後〉

希依「みんな出来た?」

琴音「なかなか可愛い子が出来たんじゃないかな?」

らら「私が主人公の小説のキャラを自分で考えるというのはなかなか新鮮ですね」

ユラ「なかなか、しんどいよ」

琴音「じゃあ言い出しつぺの私からね。」

『楽羅來 蘭未』♀ 15歳

主人公、ららが逃走した後にはららの両親から生まれた実の妹。
姉のことは一切聞かされておらず、隔離高等学校入学式で初めて出会う。

万物透過能力を持っており、自身の肉体や触れているものを通り抜けさせることが出来る。

極度の男性恐怖症で顔を見るだけでも青ざめ、声をかけられると悲鳴をあげ、触れられると気を失う」

ユラ「待って、最後の一文のせいで絶対まともな過去してないよね？」

琴音「自分たちの娘を貸し出して金にするような親だよ？まともに育てられるわけないじゃん」

ユラ「た、確かに。希依ちゃんたららちゃんはと思う？」

希依「琴音らしくていいんじゃないかな？でもこれ、確実に百合要素が入るよね？」

らら「そうですね。既にののちゃんという怪しい方がいらっしやいます、この子を落とせる男性はまず居ないでしょう」

ユラ「とりあえず保留で、希依ちゃんいける？」

希依「おっけー」

『午後十時 ごごじとうじ 大体』♂ だいたい 18歳

午後十時には眠れる異常な超能力を超えた神能力と言っても過言ではない能力を持つ超生物。

50メートルは8秒、握力は左右共に40という好記録。

恋人がいたが入学を機に別れた。というか、別れさせられた。

同性愛にかなり差別的、嫌悪的で気持ち悪くて仕方がない」

琴音「おねーちゃん、その人名前以外は普通の人じゃん」

らら「お姉様、午後十時に寝られないのですね」

ユラ「とりあえず名前は気に入ったからモブ程度に出すかもね。

ららちゃんいける？」

らら「はい。なんとというか、緊張しますね」

希依「まあ自分とこのだからね」

らら「はい。あまり悪い子にはできません。」

『三途川 白兔』♀ 14歳

白髪赤眼の美少女。

落ち着いた性格で歳下の小鳥、ののを妹のように可愛がっており、加奈を姉のように慕っている。

ららとどう接していいのかわからないうちにららの口車に乗せられるも、ららの想定外のアクシデントを起こしてしまう。

兎に変化することができ、大きさは自由自在。やろうと思えば地球よりも大きくなることくらい容易い」

希依「悪い子には出来ないってよりもららちゃんが悪い子になってるじゃん」

ユラ「いや、でもこれは楽しそうだよ。今のところ一番だね」

琴音「既に可愛いのが目に浮かぶよね」

希依「最後はユラさんだけど大丈夫？」

ユラ「じゃ、さつとやってしまおうか。」

『絶対的百獣王 子猫』♀ 8歳

常に眠たげで未知系の誰かにおぶられている。

加奈の背中がお気に入り。

上の名前がかなり厳ついが外見には厳つさのかけらもなく、服装もだらしない。

どんな能力を持っているのかは誰も知らないが彼女に勝てたものはいない」

希依「おい。名前おい」

らら「名前の温度差が凄まじいですね」

琴音「こんな名前の子に喧嘩で勝てる子なんていないよ」

希依「いやいや、私の午後十時も負けてないよ?」

琴音「名前だけでしょ?」

希依「いやいや、他にもあれだよ?漢字テストで満点を取れるんだよ」

琴音「それ普通の人だから」

希依「他にもえーと、あつ、ベーゴマ回せるんだよ!」

らら「それは凄いですけど、できる方は沢山いらつしやいますよね」

？」

ユラ「希依ちゃん、実はこの午後十時くん、嫌いでしょ」

希依「だってららちゃんのライバルキャラが欲しいって言うから。絶対に仲良くできなさそうな人を作ってみたの」

ユラ「あ、ちゃんも考えてくれてたのね」

らら「それでユラさん、この中の誰を出すんですか？」

ユラ「んー、とりあえずららちゃんの妹と白兔ちゃん、絶対的百獣王ちゃんは出したいなって思ったよ」

希依「午後十時は？」

ユラ「そのうち出すかもだけど、モブだよな？これ」

希依「モブだよ？ダメだった？」

ユラ「ダメじゃないけど、モブが目立ちすぎるかな。…あ」

希依「不遇少女に出したらシンプルに殴るからね？」

琴音「おねーちゃん、それ普通に死ぬから」

希依「大丈夫、大丈夫。ちゃんと死ぬほど痛いけど死なない程度には加減するから」

ユラ「出さない出さない！絶対に出さないから！」

らら「ユラさん、必死ですね」

ユラ「だって希依ちゃん目がマジだもん！右眼に『殺』、左眼に『戮』って書いてるもん！」

希依「あ、それカラコン」

ユラ「いつの間につけたの!?!てか売ってるの!?!」

琴音「ヘルムートの雑貨屋さん、『中二屋』で絶賛発売中だよ」

らら「カラコンって雑貨屋さんで買えましたっけ？」

ユラ「ららちゃん、二人がいるのは剣と魔法のファンタジー世界だから」

らら「ファンタジー世界にカラコンはないと思うんですけど」

ユラ「希依ちゃんの先代が中二病だったからね」

らら「魔王が中二病って…」

希依「ららちゃんにはこの『性』と『欲』のカラコンをあげよう
らら「あ、ありがとうございます?。」

琴音「うわっ、ららちゃん、すごい顔してるよ」

希依「えっ、ダメだった？」

らら「…いえ、せつかなので奥底にしつかりと保管しておきますね」

ユラ「ららちゃん、要らないって正直に言った方がマシだったと思うよ？」

らら「ですが、お姉様からの頂きものですし」

希依「やだ、この子すごい良い子」

琴音「おねーちゃん、今度はちゃんとしたものあげようね」

希依「え、カラコンだめ？」

琴音「おねーちゃん、聞いたことある？プレゼントにカラコンあげる人」

希依「なにその超絶非モテ野郎」

琴音「おねーちゃんがそうなんだってば」

希依「自分で言うのはなんかあれだけど私って結構モテるよね？モテすぎていじめにあったわけだし」

らら「ちなみにお姉様、その頃にプレゼントをしたことは？」

希依「琴音になら何回かあるかな。あれ、その時も変なものあげた？」

琴音「そーでもないよ？てか、あの頃ってお互いに常に一緒にいたいの最盛期だからプレゼント||デートしてついでに買うって感じだったよ」

希依「あゝ、そうだったそうだった」

らら「是非ともその頃の話をお聞きしたいですね」

ユラ「それは今度不遇少女のどっかだね。」

そろそろ締めに入りたいんだけどいい？」

琴音「んゝ、あ、ユラさんの今後の予定は？T w i t t e rでBL書きたいとか言ってたよね？」

ユラ「あ、それはまあ、そのうちやるよ。令和が終わるまでに。」

他に言っておきたいこととかある？」

らら「では私から。」

お姉様方、是非私の方の小説にも遊びに来てくださいよね」
希依「もつちろん。ちやんと琴音も連れていくよ」
ユラ「仲良くなってくれたみたいで何よりだよ。
ではでは皆さん！」

「「令和になってからもよろしくお願いしますー」「」

本編

第1話

私は喜多 希依、普通の女子高生である。

昨今のライトノベルではこのように始まる主人公は総じて普通ではなく、異常であり、非常に愉快である。

だからといって私が異常かといえばむしろ特殊であり、愉快かと思われるれば私の現状は不愉快である。

私はいじめにあっている。詳しくはここでは語らないが原因は自他ともに認める私の容姿の可愛さからだ。

そんな私は授業に出ることなく、妹のような恋人である後輩で家族、琴音と朝から放課後まで学校の図書館で読書をするのが学校で不遇な私達の学校に通う唯一の理由であった。

：なのだが、今の私達は読書どころではなかった。

本来一時間目の授業が始まる時刻であるはずなのに、私と琴音のそれぞれのクラスのスクールカーストのトップ計4名が図書館に居座る私たちの元に来て一人の男子が代表して喋り始めた。

「君たちはいつまでそうしているつもりなんだい？ボク達は君たちとも一緒に過ごしたいんだ。」

ほら、一緒に戻ろう？」

優しいな笑顔を向けて話してくるのは学業優秀、容姿端麗、文武両道なイケメン、織田 光亮だ。一応、クラスメイト。

私はいいつが嫌い。誰に対しても笑顔なのが気持ち悪くて、仲がいい訳でもない私達に馴れ馴れしくて、別に欲しいとは思わないが私達の持たない家族に友人、仲間という言葉を簡単に使うこいつが嫌い。

「嫌。教室に行ったところで私も琴音もいじめられるだけだし」

「あんなとこ、もう行かない」

私達が彼の言葉にNOを返すと他の四人のうちの二人の女子がキレだす。

「ちよつとーあんななに光亮の言ってること拒否ってる訳!?!それがどういうことだか分かってんの!?!」

「そうよーあんだ達がそんなだから私達も厳しくしなきゃいけないんじゃない!」

一人目は一応私のクラスメイト、小河^{こがわ} 香澄^{かすみ}。どっからどう見ても織田 光亮に惚れているように見えるが本人が否定している。崇拜していると言っても間違いではないかもしれない。

二人目は琴音のクラスメイト、五十川^{いそがわ} 瀬奈^{せな}。性格がかなりキツイ。私は彼女から被害を受けたことはほとんどないが琴音曰く体育の授業中などの逃げられない時に色々とされたらしい。マジブツコロ

「な、なあ琴音ちゃん?そんなゴミと一緒に居ないで俺と一緒に行く?」

最後の四人目は琴音のクラスメイト、牛島^{うしじま} 亮太^{りょうた}。身長約185cmほどとかなりの体格で柔道部に所属している筋肉の塊だ。どうやら琴音に惚れているらしい。

「はっ・きーおねーちゃんをゴミとか言うやつのところに行くわけないじゃん」

今回図書館に来たのは私と琴音のそれぞれのクラスの所謂学級委員というエリート集団で、私たちというサンドバックをクラスに呼び戻しに来たらしい。

まあ、どうでもいいけど。

エリート共の言い分を聞き流していると隣に座っていた琴音が何かに気がついた。

「ちよっおねーちゃんおねーちゃん！床見て床！」

「へ？」

琴音に言われて床を見るとそこには白く輝く円が私達と他四人を囲っていた。

「ちよっ、なにこれ!？」

私は彼らの仕業かと思いつちに目を向けると彼らも慌てていることからこれは彼らの仕業ではないことはすぐに分かった。

「な、なんだこれは!？」

「い、いや！光亮助けて!？」

「なんなのよこれ！あんた達の仕業!？」

「んだよおい!？」

数秒後、さらに光は強くなり目を閉ざさざるを得なくなり、再び目を開くとそこは………

第2話

目が覚めると、そこは異世界だった。

：なんてことは現状分からず、私達の目の前には周囲を囲むローブ姿の人間達とやや離れたところからこちらを眺める王様のような格好をした老人だった。

まあ、どうせ異世界なんだろうね。ありがちな…

なんてことを考えていると王様がこちらに近づいて来て、ローブ姿の人達は左右に別れるようにして道を作る。

「よくぞ来てくれた！我らの救世主達よ！」

「「「は？」「」」」

王様はこちらの言葉を一切聞かず、勝手に説明を始めた。

長かったのでまとめると、

「私達はやはり異世界に来てしまったようで、最強の具現、魔王を倒さなければ帰ることは出来ないらしい。」

「どうやら魔王は魔物や魔族を従えて人々を襲おうとしているらしい。」

現状、動きは一切ないとも言っていたので本当か怪しい。

「私達はこの世界よりも高次元の世界からきたようで、それぞれの来世の力までもある程度使えるらしい。」

「なぜ王様が知っているかと言うと、『神 オージ』という者から聞いたそうさだ。」

「私達を選ばれた理由は織田 光亮の来世が勇者であることが最大の理由で、織田以外はたまたま近くに居たから連れてこられただけらしい。」

「織田が勇者であることはこの世界の仕様、ステータスを確認することで職業として一応確信出来た。」

それぞれの職業は…

織田 光亮——勇者

小河 香澄——魔法使い

五十川 瀬奈——騎士

牛島 亮太——武闘家

喜多 希依——最強

喜多 琴音——理解者

来世の私なにやってんの!?!そして琴音のは意味不明すぎる!

当然私と琴音のそれは特殊なものであることは何となく分かるので私は剣士、琴音は僧侶と誤魔化した。

「俺、やります!俺が魔王を倒し、人々を、世界を救ってみせます!」

織田がなんか言ってるやがる。余計なことを…

「そうね、あんたはそういう奴よね。私もやるわ!」

「先輩達がやるのに私だけサボる訳にはいきませんね!」

「俺もだ!皆で協力して世界を救って一緒に帰ろう!」

織田に感化されて四人が団結し、続いてこっちに視線を向けてくる。

「喜多さん達もいつしよに戦ってくれるよね?」ニコッ

やっぱり、あの笑みが私は嫌いだ。

「嫌」

「な、何故だい?この世界の人達を救うんだよ?その何が不満なんだい?」

織田が、訳の分からんことを言い出した。

この世界の人達は王様曰くまだ、苦しめられたりはしていない。それなのにこのバカは…

「私は別に人を救いたいとは思わないし帰りたいたとも思わない。私は琴音と一緒に居られればそれでいいから」

「私も。私もきーおねーちゃんと一緒にならどこでもいい。そしてあな

た達とは一緒に居たくない」

おつ、琴音が嬉しいことを言ってくれ。

でもやはり、当然のようにこのバカ共は納得するわけもなく…

「はあ!? あんた達何言ってるの!? あんたらみたいなのは黙って私達に着いてくればいいのよ!」

「先輩の言う通りよ! あなた達はこれくらいでしか役に立たないんだから!」

「その通りだ! 琴音ちゃん俺達と一緒に来よう!」

ああもう、ほんとにまったく…

「うるっつさい!! あんたはいちいち語尾に『!』を付けなきや喋れないの!」

私も琴音もあんたらと居たくないって言ってんじゃん!」

私が怒鳴ると、壁や床に無数のヒビが出来、窓が割れる。

…最強ってこういうことなの?

私は床に手を置き、床の破片を一つ握る。

最初は砕けず、しかしだんだん力を入れていくと砕けて粉々になり砂のようになる。まだまだ力を込められそうだ。

…なるほど、力の使い方はだいたい分かった。

「お、おねーちゃん?」

「琴音、私と一緒に来てくれる?」

「え?…うん! きーおねーちゃんの居るところ私ありだよ!」

「OK!」

私は琴音をお姫様抱っこし、割れた窓から外へ飛び出す。

目に映るのは賑やかな城下町の上空からの景色。いかにも冒険者な見た目の人もいたので定番の『冒険者ギルド』のようなものもきつとあるのだろう。

「ちよっおねーちゃん!？」

「ねえ琴音!わたし!この世界に来て良かったかも!」

「…!うん!私も!」

そのあと私達は人通りのない路地に着地し、さつきは確認できなかったステータスの詳細を確認することにした。

ステータスは頭の中で『ステータス』と眩くと目の前に半透明の長方形が現れ、色々書いてある。なお、他の人には見せたい人だけに見えるようにすることが可能なようだ。

喜多 希依 16歳 Lv1

職業〈最強〉

筋力 士

体力 士

耐久 士

耐性 士

敏捷 士

魔力 士

称号

来訪者

愛飢者

同性愛者

最も強き者

技能・加護

星神のなりそこない

究極の加減

喜多 琴音 (北谷 琴音) 16歳 Lv1

職業〈理解者〉

筋力	12
体力	7
耐久	8
耐性	10
敏捷	9
魔力	18
称号	
来訪者	
愛飢者	
同性愛者	
血縁からの逃亡者	
理解者	
技能・加護	
完璧な理解	

「とりあえず色々つつこみたいんだけどさ、琴音、理解者のそれでなんかわかんない？」

「んと、…あ、大丈夫そう。これ、見たものの必要な情報が入ってくる感じがする」

「私はそれないから多分理解者の能力的なものなんだろうね。」

「で、私のこの土の意味はわかる？」
「うん。」

「おねーちゃんのそれはいくらでも増えるしいくらでも減らせるってことみたい。最強っていうのは『いちばん強い』ってことじゃなくて『常に何よりも強い』ってことだね」

「なるほど。でもあの大声を出した時は制御してる感覚はなかったから多分暴発の危険あり…かな？」

「じゃあこの『星神のなりそこない』っていうのは？琴音にはないみたいだし私は心当たりがないんだけど」

「えーと、よくわかんないからそのまま読み上げるね。」

『星神のなりそこない』

あらゆる世界を管理する神、ステラになりそこなつた者に与えられる称号。

精神的、肉体的な老化が止まり、死後改めて神となる』

…え、マジ?」

「うわくなんかすごい面倒くさそう」

「だね」

「琴音の『完璧な理解』は今のがそうなの?」

「うん。でもこれ以外にも視た者のあらゆる情報、心や体質、感情なんかを理解できたり、あとは私が触れた人に私が理解した情報を渡すことが出来るみたい」

「ふーん。琴音も割とチートなのね」

「うん。でもこれは俺TUEEEEする感じじゃないね。逆におねーちゃんは俺TUEEEEする感じのステータス」

「しないよ…多分」

「そこで自信なくさないですよ。」

それで、これからどうするの?」

「とりあえず魔王のところに行こうと思うんだけど琴音はどう思う?」

「おねーちゃんがそうしたいならいいと思うよ?」

ちなみに魔王のいる方向はあっち。魔国ヘルムートだよ」

琴音はどこかを指差す。その方向には壁しかない。

「それも理解者の力?」

「うん。そうみたい」

チートや。そんなチートやないか。それがあれば迷子にならない…

なんてくだらないことを考えていたが忘れてはいけない。

ここは路地裏、今やありふれてしまったファンタジー世界ならあれがそろそろ来る頃である。

ステータスを確認している二人の少女達の背後から二人の男が声をかけようと近づく。

「なあお嬢ちゃんたち、よかつたら「あ、ナンパなら間に合ってます」俺達と……ああん？」

「お、おい落ち着けて……」

私達をナンパしようと話しかけて来た男のセリフを琴音が遮るとその男はキレだし、もう一人の優男風が宥めようとする。

「…おじさん達なんの用？私達これから忙しいんだけど」

「あ、ああいや、よかつたら俺らと一緒に冒険しないかと誘おうと思っただよ」

「ふうーん。怪しいけど琴音、どう？」

「んー、ほんとにただのナンパみたいだよ？別に人売りとかじゃないみたい」

「そうなの？」

「たりめえだ！そもそもこの国には人売りなんてほとんどいねえよ！」

「へえ。あ、じゃあついでに聞いていい？『この国には』ってことは人身売買がある国もあるの？私達そういうの知らないから教えて欲しいんだけど」

「あ？まあかまわねえよ。

この国から東にある『モーゼス』っちゅーところじゃ毎日獣人やら人魚やら自動人形やらがオークションにかけられてる。

逆にこの国は人身売買とか奴隷とかは全面的に禁止されてんだ」

「ねえ聞いた？おねーちゃん。獸耳っ娘がいるんだって！」

「じゃあ魔王のとの前にそっちに行こっか」

「なんだ？嬢ちゃんたち魔王に用事でもあんのか？それなら俺達が連れてってやるよ」

「おじさん達魔王の知り合いかなんかなの？」

「おうよ！一夜をともしたダチだ！」

…あとおじさんって呼ぶんじゃねえよ。俺達これでも23だ」

「うっそ?!」

「なにい!？」

「アツハハハハ…」

「喋り方があれだったからてつきり…」

と琴音

「喋り方が熟練の騎士団長みたいだからつい…」

と私

「なるほど確かに」

と優男

「二人目やけに具体的だなオイ!?そしてお前も納得してんじゃねえよ!」

「いやでも割とその通りだと思うよ?クラークもお前の喋り方おっさんくさいって言ってたし」

「クラーク?」

「ああ、魔王の名前だよ。ちなみに俺はディアス、このおっさんはウイルソンだ」

「おっさん言うんじゃねえよ!おじさんよりダメージでかいわ!」

さて、流石にあんまり長話が過ぎると日が暮れちゃうかな。

私は最後に聞いておきたい事を聞いて出発することにする。

「ねえウイルソンさん、獸人の国ってどこにあるの?」

「んや、今はもう国はねえよ。人間が乱獲しまくっちゃまったせいで国は滅んでちっこい村が残ってるだけだ。」

その村も遠くてこっから西に馬車で3日はかかる」

「そつか。ありがとウィルソンさん、ディアスさん。私達行きたいところが出来たからいくね」

「おじさん達またねー」ノシ

「ふたりとも気をつけて」

「最後に一つ言っとくぞ！獣人のとこに行くんなら剣やら杖なんかは持ってかないでやってくれ！すげー怯えっから！」

「はーい！」

こうして私達は獣耳っ娘の居るであろう村へ飛び立つのであった。

「やべっ、結局女の子の助っ人見つかってねえじゃねえか!？」

「アハハ、素直に諦めない？この依頼」

くケーキの材料集め、制作の手伝いく

第3話

獣人の村目掛けてル〇ラ（物理）で移動中の私と琴音は今後について話し合っていた。

「おねーちゃん、村に着いたらどうする?」

「んー、とりあえず獣耳っ娘を思いつきりモフリたい」

「あーうん。」

…忘れてたけど私達学校の制服だからスカートだよ。パンツがつつり見えてると思うけど」

「あーそうだった。とりあえず服を買おっか」

「お金、どうするの?」

「あつ……」

「まあなんだかんだお金に困ることは無かったからね」

「と、とりあえずそれはモフった後で考えよっか」

「予定は未定つとく」

つあ、おねーちゃん!もう着くよー!

「え!?早くない!?!どうやって止まんの!?!」

「ええ!?!」

おねーちゃんのばかー!!」

その後私達は何とか村から2キロほど離れたところに着地し、村の入り口と思われる門のようなものの前に着いた。

村は柵に囲まれていて、住宅は10人ほど住めそうな木造の大きめの家が四つ、少々年季の入った小さな家が一つある。

他に畑があり、犬や猫、兎の耳を生やした中年男性がくわで耕している。

「ほんとに小さい村みたいだね。子供はどこにいるのかな」

確かに、子供が見当たらない。私達の世界では、日本ではあまりなかったけども、海外の貧しい人達は子供も働いているらしいけど……あつ

「琴音！あつちに何人かいた！」

「えっ？あ、ほんとだ」

遠く、私達いる場所の向かい側、村の端の所に家の影で隠れながらも子供が数名いるのがわかった。

私達はとりあえず目的を果たすためにそっちへ向かうことにした。

「気持ち悪いんだよ！」

「死ね死ね！死んじやえ！」

「真っ白お化け！」

「消えろ親無し！」

私達が子供達の近くに来ると私達も言われ慣れた、聞き慣れてしまったような台詞が聞こえてきた。

人間には優しくないが同類には優しい私達は彼らの元へ駆けつけた。

「こら！何してるの！」

「いじめはだめ！」

彼らは四人で一人の女の子を蹴ったり殴ったり、石を投げつけたりと私達もされたことのある攻撃をしていた。

「あ？うっせ……あ、ああ、人間だ！逃げろ！！」

私達に気づいた一人は人間である私達に怯えるように逃げ、もう三人も一人を追いかけるように逃げていった。

私はいじめにあっていたと思われる白髪で猫耳の生えた少女に声をかける。

「あの、大丈夫？」

「うう……ヒヤっ!?に、ににに人間さん!?こ、ここ殺してください！」

「い、いやそんなこと……あれ？」

殺さないで、を間違えちゃったのかな？

「ねえおねーちゃん、この子、いま殺してくださいって言ってなかった？」

「ねえ、言い間違えたとかじゃないよね？」

私は極力彼女を威圧しないように聞く。

「…もう、いやなの。…叩かれたくない。…嫌われたくない。…パパとママの所に行きたい。…寂しいよお」

なるほど。きっと、私も琴音と会わなかったらこうなっていたかもしれない。それは琴音もきっとそうだし、この子は…

「ね、もしよかったらだけどき、私とおねーちゃんと一緒に来ない？」

琴音がうずくまる彼女を抱きしめ、頭を撫でながらそう聞く。

「ふえ？」

「私達も、君と一緒にだからさ。おねーちゃんは両親が居ないし、私の両親は、その、とても怖い人達で私は逃げちゃったから」

琴音は、とても辛そうな表情で話す。きっと理解者の力と琴音自身の感受性で、彼女のことをどの程度かは分からないが理解したのだろう。

「…おねーさん達、も？」

彼女は顔をこっちに向けて尋ね、私は答える。

「うん。私は両親がいなかったしずっといじめられてた。琴音は両親にいじめられて、学校でもいじめられてたの」

「…おねーさんたちは、その、死にたくならなかったの？」

「もちろんなかったよ。死ぬ気で耐えて死ぬ気で逃げて、おねーちゃんに会ってからはそんなことは無くなったけど…」

「私も。琴音と会ってからは死にたいと思ったことはないかな」

ただし、隠していた本棚を琴音に見られたときを除くのを忘れな
い。

「…いいなあ。…ねえ、私もそんなふうになれるかな」

私達の関係性を羨む少女に、夢見る少女に、私は現実をつきつける。
「それは君次第だよ。」

もし今ここで死んじゃったらそうは絶対になれないし、私達と来たとしても、そうなれるかは君次第だし。…これは私の好きな小説の受け売りなんだけど、

人は一人勝手に助かるだけだよ。

私達はもちろん全力で応援するし協力もするけど。ね、琴音」

「もちろん！」

彼女は涙で濡れた目を服の袖で拭い、私に尋ねる。

「おねーさん達は、どうしてそこまでしてくれるの？」

「君が私に、私達に似てるから、かな？」

「そう、かな。…フッフ」

私はここで初めて笑みを見せた彼女の目を見て気づく。彼女の目の色は赤味のある水色に見える。これは色素欠乏症、アルビノの猫の特徴だ。彼らの言っていた『真っ白白お化け』とはアルビノの事だったのか。

「ねえ、君ってアルビノなの？」

琴音も気づいたようだ。というか猫のアルビノの情報は先月くらいに琴音が猫を飼いたいと言い出したときに琴音から聞いた情報だった。

「そうだけど、なんで知ってるの？」

「目、見れば分かるよ。」

…日傘とかはいいの？」

「…うん。どうせすぐ壊されちゃったし。それに私、職業へ光術士だから光を操れる。日傘がなくても平気」

なんともまあアルビノの人にもってこいのものだった。

あ、割と大事なことを聞いてなかった。

「そういうえば名前、なんて言うの？」

私は希依、こっちは琴音ね」

「…私はリリア。16歳。」

きー、ことね、これからよろしく」

なんと、同じ歳だったか…
面白そうだから黙っとこ♪

ちなみに身長は私が148cm、琴音が146cm、リリアが約140cmくらい、かな

旅の仲間を一人増やした私達三人は改めて魔王のいる国、ヘルムトへと飛び立つ

…あ、忘れてた。

ここで私はこの村に来た本来の目的、可愛い子をモフるのを思い出し、リリアに抱きつき撫で回す。

「ヒヤツ、ちよっ、きー?…ヒウ、ンア…」

…モフモフ…スリスリ

〜数分後〜

「さ、行こっか」

「はあ、はあ」

「リリアちゃん、大丈夫?」

「…大丈夫。…きー、てくにしゃん」

「あはは〜おねーちゃんのだデナデは天下第一品だからね」

「そんなになの!?!…琴音、後で私にもやって」

「え?まあいいけど」

「…私も殺る」

「リリアちゃん、文字が違うんじゃない?」

「……気の所為」

…気の所為であることを願おう。

第4話

く魔国ヘルムート前く

希依と琴音、リリアの三人は獸人の国から琴音のナビゲート、希依の二人を抱き抱えての大ジャンプにより魔国ヘルムートの門の前に着地した。

「お、今度はちゃんと着地出来たね」

「…前に失敗したの?」

「リリアちゃんのいた村に行く時にちよつとね」

本当にちよつとである。うん

本来数日はかかるであろうルートを数分で済ませたとはいえ流石に日が暮れてきている。宿をどうするか考えていたところ冒険者なら無料で泊まれる安宿が大抵の国にはあるという情報をリリアから聞き、まずは冒険者ギルドで冒険者になることにした。

門をくぐるとそこにはサキュバスに悪魔、ミイラのような人型に妖狐その他諸々の所謂魔族と呼ばれる者達が人間と同じように、より賑やかで活気に溢れる生活を送っていた。

「うわー驚いた。てつきり殺伐としたところだと思ってた」

「…それは偏見。人間さん達は皆魔族の人達を誤解してる」

「おねーちゃん、リリアちゃん、冒険者ギルドはあっちだよ!」

「あ、ちよつ」

入国して立ち止まる私とリリアの手を琴音が握り、進み始める。

勧誘や集客にあいつつも何とかギルドらしき所に到着し、入って奥の受付けに向かう。

ギルドの内装は入って真っ直ぐ奥に受付け、右に小規模の酒場、左には様々な依頼書が張り出されている。

「すいませーん、冒険者登録したいんですけどー」

「はーい」

誰も居ない受け付けで私は人を呼ぶと奥から背中と頭からコウモリの翼のようなものを生やしたサキユバスのお姉さんが出てくる。

「いや〜すいません、実はさっきちよつとした騒動がありました」「騒動、なんだろう？勇者が攻めてきたとか？」

「なにかあったんですか？」

「いや、大したことはないですよ？魔王様が『我、もうじき隠居するか』とかいきなり言いやがりました」

結構なことじゃないのそれ!？」

「…この国、大丈夫？」

リリアちゃんよく聞いてくれた！

「アツハハ、魔王様がいきなり何か言い出すなんてのはこの国ではよくあるんです。それでも何とかするのが私達国民なのですよ！

あつと〜、冒険者登録でしたね。一通り説明は必要ですか？」

「お願いしまーす」

「では、

冒険者とは基本的にステータスの称号という欄に〈冒険者〉と書かれている方を指します。冒険者にはランクというものがございまして、それがA〜Eまであります。これは依頼を受ける時に目安になったりしまして、レベルや技能に比例して上昇します。なので兵隊や騎士などをしていて強い方は初めからランクがC等になることもあります。

…ほかに何か聞きたいことはございますか？」

「私は大丈夫。琴音とリリアは？」

「…大丈夫」

「大丈夫だよー」

「…特に無いようですね。何かあったら遠慮せずに聞きに来て下さいね。」

ではこちらにの表に名前と指印をお願いします」

喜多希依…と。…あ、このインク指に残らない。スゲー

3人が記入を終え、冒険者に登録された所で向こうから持ってきて

いたスマートフォン時刻は5時半過ぎ。ついでに圏外。そりやそ
うか。

ちなみにそれぞれの冒険者の初期ランクは私がB、琴音はE、リリ
アはDだった。

「私、一番下かあ〜」

「まあLv1だしね。ちなみにリリアちゃんはレベルいくつ？」

「…6。たまに村の近くまで来た魔物を倒してた」

「リリアちゃんに負けた!？」

「まあとりあえず適当に依頼受けて夜ご飯の分くらいは稼ごうよ」

「そだねー」

「…頑張る」

そして受けた依頼は…

〜スノーウルフの討伐、及び牙の回収〜

「これ、初心者が受けるものじゃない?」

「いやだってこれが一番近かったし」

「でもめっちゃ寒いよ!?!おねーちゃんとリリアちゃんは平気なの!？」

「平気」

「う、うん。…まあおねーちゃんは炬燵がなくても平気な人なのは
知ってたけどさあ」

「ほら、文句言っていないでいくよ! 琴音のレベル上げも目的なんだか
ら」

「うあーい」

ヘルムート近くの森を歩くこと数分、足元は軽く雪が積もっている
が大して問題は無い。

問題なのは…

「「いや、でかくね?」」

スノーウルフの牙が大きいのだ。というかスノーウルフもでかかった。具体的には12mくらい。琴音はスノーウルフの足に触れたあとそこらじゅうに生えている木の一本に触れ、その木のあらゆる情報を問答無用に流し込んで脳を物理的に破裂させた。まあ、グロかったよ。

牙も持てないことは無いが涎などで汚れていてあまり触りたくない。

「おねーちゃん、ギルドの所まで投げてよ」

「ええ、いいよ」

せーの！

着地を極めた私に死角はない。でかい牙を正しい場所まで投げ飛ばすくらい夕飯前よ！

「はいおねーちゃん、ハンカチ」

「ありがとう」フキフキ

「きー、ことね、早く帰ろ。お腹空いた」

「そだねー。おねーちゃん、報酬ってどのくらいなの？」

「さあ。近くでA級の依頼を選んできたから結構あると思うよ？」

「いやなにサラツととんでもなくとんでもないことしちやってんの？
こういう時はC級くらいからじゃないの？」

なんやかんやと会話しつつギルドに戻り、恐らく結構な額であろう報酬、金貨20枚、銀貨5枚を受け取り、宿を探すために街を散策すると直ぐに宿が見つかった。

…ピンク色の看板で派手な装飾がされた宿が。

受付けの人はまたサキュバスだった。サキュバスは皆接客業をしてるのかな？

「三人、ベッドは2つで大丈夫です」

「あらあら、銅貨4枚でいいですよー」

銅貨の価値って以外とあるのかな？

「銀貨一枚からで」

「はい。お釣りの銅貨6枚ですよ」

「どーもー」

「御夕飯のサービスもあるのでありますが必要ですか？」

「あ、お願いします」

「はい。部屋は二階奥です。鍵は中にありますからお楽しみの際は掛けておくことをおすすめしまーす」

「お気遣いどーもー」

その夜、当然のように百合の花が咲き乱れるのだった。

翌日

部屋から出ると受付けにいたサキユバスさんがいた。

「夜はお楽しみでしたね♪」

「…あ、あう」

定番の台詞を得意げに言い放つサキユバスさんの言葉を聞いて琴音とリリアは顔を赤く染める。

「今夜はあなたも混ざりますか？」

「おおっと、反撃してくるお客様は初めてですね。朝食はここで食べて行きますか？サービスしちゃいますよっ」

「いえ、ありがたいですけど私達行くところがあるのでこれで」

「あや、そうですか。」

「またのご利用お待ちしております♪」

結構いい人だった。また来よう

ヘルムートに来て2日目、私達は遂に魔王の居る城に行くことにした。
けどまあ普通に徒歩で行くのは面白くないので今まで通り跳んでいくことにする。

突撃！隣の魔王城！

「おはよーございまーす！」

ドガシヤーン！

魔王が居るであろうてっぺんの窓から飛び込む。

「どわー!?なんだよなんだよなんだよ!?こんな朝っぱらから！」

飛び込んだ先にいたのは玉座に座る黒髪色黒美形で細マッチョの男性だった。

「初めまして魔王様、遊びにきたよ」

私は魔王に軽く挨拶すると魔王は私の顔を数秒凝視した後どこかを納得したような顔をする。

「ああなるほど。…初めましてだな、我の後継者よ。我が名はクラーク、これからはただの一国民となるのかな？」

「はい？」

「いや、お主なのであろう？〈最強〉を受け継いだ新たな魔王は」

「え？いや、確かに私の職業は最強だけど…」

ええ、いやまあ確かに魔王は最強の具現とか言ってたけど

…めんどくさっ

「お主がこの国に来たのは初めてだな？」

「そうだよー」

「…うん」

「うっし、せっかくだから我がこの国を案内してやる！」

「…いつ、ほんとに魔王か？実は魔王の息子とかってオチじゃないよ

な？

それから、魔王直々の国案内が始まった。

城から出て最初にこの国の簡単な構造を語る。

「この国、ヘルムートは大きくわけて三つに別れておる。一つはお主からも通ったであろう魔族地区、簡単に言ってしまうえば人型の魔物が人間と同じような暮らしを送っておる。少数ではあるが人間も住んでおるな。」

そして二つ目は魔物地区。スライムみたいな小型からスノーウルフのような大型まで様々な魔物が檻の中に巣を作って暮らしおる。お主ら二人の元いた世界の動物園、を我なりに再現してみたのだ」

「!？」

なんで私達が別世界から来たのを知ってるんだろ？

「それは我もお主らのいた世界と同じところから来たからだ。…と言っても、もう何百年も前の話だな。」

動物園は以前我のところに来た勇者から聞いた」

心を読んだ？

「うむ。我は元いた世界では妖怪 覚 と呼ばれていた。心を読む妖怪とな。」

つと、話がそれたな。その動物園を再現した魔物地区なんだが、そこは我の娘が管理しておる。次の魔王となるお主は挨拶くらいした方がよいと思うが、どうだ？」

「せっかくだからお願い」

魔王の娘、ウゝス異本では定番のジャンル。どんなロリっ子が楽しみだ…

しかし！

ロリじゃない、だと？

「初めまして、私はマーフィー。マフィと呼んでください」

そう私達に挨拶するのは私よりもちよつとだけ背が高い色白で銀髪
の女性。胸は……私の同類ツルベタだな。

てかこの二人ほんとに親子か？どつちも美形だけど肌も髪も色が全然違うし……

「見ての通り血は繋がっておらん。マフィは鬼神オーガと人間のハーフなのだ
が、人間の国の国民たちに虐待されている所を我が保護して娘にしたのだ」

こんな所まで同類かよまったく。いじめは全異世界共有の文化なの
かな？

「ま、まあ否定はせぬがこの国にはそんなものない。我が全力をもつて
禁止にしたからな」

この魔王、全力を出す方向がマジカッケー

「クハハっ、そう褒めるでないわ。父親は娘のためならなんでも出来る
というものよ」

「その娘さん、今あんなだけけど」

琴音が指差す方を見るとそこにはリリアを抱きしめ撫で回すマー
フィーと、満更でもない顔をしたリリアの姿がそこにはあった。

「なあ、あの猫の子なのだが……」

「そう。リリアに琴音、私もあなたの娘の同類いじめられっ子だよ。」

「そうか。お主らにちよつとした相談なのだが……よいか？」

「なに？」

「よかつたらなのだが、マフィの友人になつては貰えぬか？」

「魔王様、それはあなたじゃなくてマフィさんが言うべきことだよ？
父親として心配なのは分かるけどさ」

「琴音の言う通り。まあ心配しなくていいよ。マフィさんが望むのなら、私達は受け入れる」

「だが、マフィは口下手で人見知りで…」

「好きだと言わなきゃ好きでないということにはならないし、望みを言わなきゃ望んでないなんてことにはならない。それは『覚』である貴方が一番分かっているんじゃないの？」

「なるほど確かに。」

…我にそこまで言えるのだ。お主になら我のあとを任せられる」

やべつ、墓穴掘ったか。…まあ、この人のあとを継ぐなら、それも悪くない

…かもしれない。

第5話

ヘルムート、魔物地区で私達やマフィさんの話を魔王としながら魔物地区を巡り、次に向かうことにした。

マフィさんは魔物地区に住んでいるので残り、マフィさんに懐いたリリアは残ることにしたそうだ。

「さて、次に向かうのはヘルムートの地下、魔力地区だ。ここからはちと遠いからお主らの今後についてとかを話しながら向かおうか」

「私達の今後？」

「うむ。ときに希依、お主へ理解者へはもう見つけているのか？」

「え？それなら琴音がそうだけど。…魔王と何か関係あるの？」

「ある。それも結構重大なものだ」

「それって？」

「魔王は職業が〈最強〉の者になるといっなのは話したな？」

「まあなんとなくは」

「理解者の役割は我等歴代の魔王の経験の付与だ」

「経験の付与？」

「この国での魔王の役割は我儘を言うことと国を守ることだ。発展だのなんだのは魔王が何もせずとも国民がやってしまうからな。

そこで魔王が弱くては他の国の軍や勇者一行にこの国は簡単に滅ぼされてしまう。これが最強が魔王となる理由だな」

「それで？経験の付与にはどんな意味があるの？」

「ステータスにレベルというのがあるだろ？あれは戦闘経験を積み重ねるほど上がるのだが〈最強〉の者は自らが強すぎるが故にまともな経験が出来ん。そこで理解者の出番という訳だ。

我等歴代の魔王は新たな魔王に理解者の協力のもと全ての戦闘経験を受け継がせるのだ。別に私のレベルが下がるわけではないがな」

つまり、戦闘経験をコピーするという事かな？

「コピー？というのはよく分からんが多分それで大丈夫だろう。ちなみに理解者もその経験を理解する必要があるからレベルが上がるぞ」

「お、琴音やったじゃん」

「レベル上げはめんどうだからねー」

「クハハッ。」

ちなみに我の時の理解者はマファイだ。後天的だがの」

「どういうこと?」

「そもそも〈最強〉と〈理解者〉は本来セットなのだ。親子だったり兄弟だったり、恋仲だったりな。

だが我は一人でこの世界に来てしまった。結果、一人だったためこの世界の誰かが理解者になるのだが、それがマファイということだ」

「それってたまたまなの? てか私と琴音がこの世界に来たのもたまたまなんだけど」

「お主らのそれは知らんが、マファイは我と家族になって数ヶ月が経つて我に心を開くようになってからだったな」

つまり、偶然ではないということか。何かの間違いであの勇者一行の誰かじゃなくてよかった。

あれ? でもこの職業的なやつって来世のなんかが絡んで来るんじゃないかったつけ?

「それは例外ということですよと思うぞ。あまり難しく考えるでないわ」

このパパさん、娘のことなのにテキトーだな

「ふんっ、来世だの前世だのは神とかその辺のやつが考えることだ。我らにはどうしようもなからう」

まあ確かに

「…おい希依、お主、我が覚だからといって口に出さなくていいわけではないからな?」

「あ、今更つつこむんだ」

うわーん、まおーがいじめるよことねー

「あーはいはいおねーちゃん、よしよし」

「…おい琴音、お主心がよめるのか?」

「え? うん。なんか理解者のそれで」

「なんだと!?!…つまり、我の考えもマファイには筒抜けだったというこ

とか……」

なんかいじけ出す魔王とおねーちゃん。これどうしょ。

…てかおねーちゃん弱すぎるでしょ

「さて、ここがヘルムート地下、魔力地区だ」

私達が来たのは国の中心に位置する城の地下。そこには広大な空間があり、壁や床から様々な色の水晶のような結晶が生えている。

また、ここに魔族や魔物は一体もおらず、肉体のない幽霊のようなものが数体フラフラと浮いているだけで神秘的でありながらもどこか不気味であった。

「ここはどういう所なの？」

なんのためにあるのか分からない私は魔王に尋ねる。

「ここは世界の中心にしてこの世界の魔力の源だ。ここがあるおかげでこの国に住む魔族や魔物は食人をする必要がないから一番重要な場所でもある」

なるほど。これが魔族と人間がこの国では共存出来てる理由でもあるのか。

「しかし、これが人間達の王が魔王や魔族をどうにか倒そうとする理由でもあるのだから魔族もそれなりに強くなければならないのに変わりはないがな」

「それ以外にこの国が狙われる理由はないの？」

「いや、稀にだが英雄気取りの人間が野良の魔物達はこの国のしわざだと勘違いして攻めてくることはある」

「やつかいな話だねー。どうにかならなかったの？」

次は琴音が尋ねる。

「いや、歴代の魔王達も何度も話をしようとしたのだが耳を傾ける者はごくわずかでほとんどが話を聞こうとせん。そのごくわずかな者のさらに一部がこの国に住む人間とその子孫だ」

「その人達から人間の王に話してもらうのは？」

「それもだめだ。そんなことをしては裏切り者として死刑になりかねん」

「…そっか。」

「どの世界でも、人間のトップは屑ばっかだね」

「…琴音、魔王がそのような王になるのを防ぐのも理解者の役割なのだ。忘れないでくれ」

「うん。おねーちゃんも、無いとは思うけど、気をつけてね」

「うん。」

「…そういえばずっと疑問だったんだけど」

「ん？なんだ？」

「魔王の役割はこの国を守ることと、我儘を言うことだって言ってるけどどういうことなの？」

「そのまま言葉通りだが？」

「魔物地区の動物園化は我とマフィの我儘だし魔族地区の街並みは先代の魔王の我儘だ」

「人間とはまったく違った発展の仕方だ。人間の王がこんなことをしても民は疲弊しきってしまうだけだ。」

「うむ。これが魔族の国と人間の国の最大の違いかもしれんな」

「魔族の人達は何も文句言わないの？」

「いや。我儘の内容によっては文句や疑問を王の前で堂々と言うし物によっては全国民が全力で止めに来ることもある」

「なんともたくましいとかなんというか……」

「魔王として強いだけの一国民。魔王を矢面に一つの矢となって発展させていくのだ。」

「これぞ王道ならぬ魔王道！」

「希依、お主はどのような王になるつもりだ？どのような我儘を突き」

通すつもりだ？」

私が、王。これまで考えたこと無かった。いや、普通考えないけど。私は…

ま、これまで通り、今まで通りを貫こう。

「私は、王道にも魔王道にも縛られず、外道と邪道にそまっても、強き正義を殺してでも、善悪問わず弱者を救う。」

私はそんな王になりたい」

「ク、クハハっ、面白い。そんな王ならこの国の民はお主について行くだろうな。それに、それは我らのような〈最強〉でなければただの理想論。言うだけならありきたりだが、これからの時代実現出来るのは魔王となるお主だけだ」

「おねーちゃん、私も頑張るから、諦めないでね」

「何言ってるの？これは向こうでは実現不可能だっただけで琴音と会ってから思い抱いた理想だよ？」

〈最強〉となった私が、向こうで諦めなかった私が諦めるわけないじゃん」

「ふーん。ありがと、おねーちゃん♪」

はてさて、なんのことやら

「素直でないなあ」

魔王がおじいちゃんみたいな事言ってる。

「誰がジジイだ！俺はまだ800とちよいだ！」

「俺？」

魔王の一人称って『我』だったような…

「我だとなんか偉い奴っぽいだろう？」

「うわっ、しょーもな」

「そっ、そそそんなことより腹は減っておらぬか？お主ら朝食をとっておらんדר？」

「いや、私もおねーちゃんも朝は食べないし」

「うおい!?朝はちゃんと食べ！最強でもたまたまに体調崩すんだからな!?」

第6話

ヘルムートを軽くまわった私達は魔族地区の服屋でスカートやズボン、シャツにパーカー、下着等をそろえ、早めの昼食をとり城に戻ってきた。

：魔王の財布が薄くなったのは言うまでもない。

場所は今朝私達が窓から飛び込んだ魔王の部屋。飛び散ったガラスは既になく、窓は全ての物が新品に変わっていた。

いや、早くない？

私達の疑問を覚の能力で読んだ魔王はそれに答えた。

「これはラストの仕業だな」

「らすと？」

人の名前か？

「うむ。この城唯一のメイド。最新にして最後にして最高傑作のオートマタ自動人形だ」

ここで私は疑問を浮かべる。

「自動人形って誰かが作ってるの？」

「自動人形ははるか昔、初代魔王が生まれる更に昔に何者かによって造られたとされている。

確認されている全24体の内20体はゼンマイ式、3体は電気を用いるモーター式なのに対し、ラストは未知の永久機関にナノマシン、その他様々な技術が使われていて見た目はほぼ人間と変わらぬ個体だ」

なにそれ凄い

「人間に紛れて暮らしていたが見た目が変わらないことで人間に怪しまれたところを二代目が拾った。ちなみに我は十三代目だ」

もうほんと、こんなんばっかか人間共。

「ここ数百年、そのような子らが増大しているのだ。：嘆かわしいことにな」

魔王の話の話を聞いていると、背後から視線を感じ振り向くと開きっぱ

なしだった扉から顔を半分覗かせてこちらを見る長身で金髪ボブカット、歯車やネジを組み合わせた独特な髪飾りをつけた女性がいた。

「もしかして、あなたがラストさん？」

琴音も彼女に気がつき尋ねる。

彼女は私達に姿を現す。

メイド服に整った顔、服越してもわかる無駄な脂肪のない細身の体。身長は170cm程。

「お初にお目にかかります、次期魔王様に理解者様。私はこの城のメイド、最終人形^{ラストドール}。ラストとお呼びください」

「ラストはこの城唯一のメイド。加減速というラストだけがもつ固有機能を使って常に二倍速で動いている」

「にしては喋り方は普通だね。早口言葉みたいになるんじゃないの？」

私もそう思う。

琴音の疑問にラストは残念な答えを告げる。

「あ、それはただ私の喋り方がゆっくりすぎるだけです」

「残念すぎるー！」

嘘でもそういう機能があるとか言って欲しかった。

「うう、なんで国民の方と同じこと言うんですかあ」

「え、えとラストさん、その髪飾りは？」

私は最後の希望である歯車とネジで出来た髪飾りについて尋ねる。

あれにはきつとすごい機能が……

しかし、現実は無情である。

「これですか？これを付けるとなんとなく見た目が自動人形っぽくありません？」

もうほんと、こんなばつかかよ魔王城。

一人称を中二臭くして魔王っぽさをアピールする魔王、クラークに機械っぽい髪飾りで自動人形っぽさをアピールする自動人形オートマダラストドール、最終人形。

あの主人あってこんな従者あり。

「ねえねえおねーちゃん！でっかい本を開いて持ったら理解者っぽくなるかな！」

「琴音!?!: 琴音、それは某半分こ怪人の緑の方の人だけだからやめて」
「それは2009年に放送されて2017年からコミック化した仮面ライダーW、風都探偵のもう1人の主人公、フィリップさんのこと？」
やべつ、琴音の特撮オタのスイッチを踏み抜いてしまった。

「おねーちゃんはどんな格好するの？時計？それともちよつとはずしてカメラ？」

「伝わらない！それは私達が居た所でギリ通じるかどうかだけどこっちじゃ伝わらないから！」

ちなみに時計は仮面ライダージオウ、カメラはディケイド。

「ならマントとナイフはどうだ？」

魔王が丁寧に畳まれた黒いマントに大型のナイフを乗せて持ってくる。

「アンタが乗るなよ！え？何エターナル知ってんの!？」

「エターナル？なんの事だ？これは我が魔王となったときにこれ付けたら魔王っぽくなると思ってマフィの初めてのおつかいのおときに買ってきてもらったマントと護身用に渡したらいらないと返されたナイフだ。商人曰く胸に刺せば死ぬナイフだそうだ」

「いや娘大好きかアンタ！「当たり前だ!!」うわうっさい『!』2つも付けるな！あとそれは普通のナイフだよ魔王で覚が詐欺られんな！」
「なにい!?!じゃああの箱の側面を擦ると火のつく細い棒は！」

「それはただのマッチ！」

「じゃああのいくらでも書ける金属製のペンは！」

「それただのメタルペン！マニアックだなおい！つてえ!?この世界にあるの!?!」

ハア、ハア、なんだコイツ、疲れるぞこの魔王…

息を切らせた私に琴音とラストが肩に手を添える。

「おねーちゃん！頭にねじれた角のカチューシャ、どう！」

「次期魔王様！私とお揃いの髪飾りどうですか！」

さらなる追い打ちをかけられた私は肩を震わせる。

「希依？」「次期魔王様？」「おねーちゃん？」

「u u u n y a n y a a a a a a A A A A A i i i i i !!」

その日昼頃、ヘルムート中に独特な叫び声が響いたとか…

あーもーほんと、

…楽しいなコノヤロー！

「希依、楽しんでいる所悪いが「んっ、んな事ねっし！」っそ、そうか。

…お主が新たな魔王となること、今日中には発表するぞ」

えっ、マジ？

「超マジだ」

拒否権は？

「最強になってしまった己を恨め」

延期は？

「我が待てん」

私の意思は!?!

「意志を主張するならまず言葉を発せ」

「私の意思は！」

「スピーチの内容でも考えとれ！」

「めんどい！魔王がやれ！」

「だからお主が魔王だと言っておろーが！これからは我をクラークと呼べー！」

「アンタを大魔王に昇格させてやろーか！」

「やめい！いい加減我に隠居させる動物達を愛でさせるマフィと親子デートさせろー！」

「アンタそれしか言えんのか！」

「自分の娘ほど可愛いものなどそうそういるものか！」

「なにおう！琴音だって負けてないもん！見よこのツルペタストンのスリムボディ！顔も可愛いし抱き心地も最高だぞー！」

希依は琴音の脇の下に手を入れ掲げるように持ち上げる。

「ちよっおねーちゃん恥ずかしいからやめて！そして私が気にしてるところを褒めないで！」

「ウググ…」

この場にマフィが居ればマフィの可愛さを箇条書きにまずは五万ほど述べるところを…

シンプルにめんどうなのでやめた頂きたい（by作者）

「だったらこっちは六万！」

「ちよっおねーちゃん!?!」

「七万！」

「八万！」

もはやヤケである。

「二十万！」

「おねーちゃんやめて！」

ームググウ

「パパやめて。恥ずかしい」

ドゴスツ

ーウゴツ

羞恥心に限界が来た琴音と魔族地区から走ってきたマーフィーがそれぞれ姉、父の口を封じる。

琴音は希依の口を両手で塞ぎ、マーフィーはクラークの頭部を床に

めり込ませる。

「あつ、お嬢様」

「ん。こんにちわラスト。」

「ちよつとおねがいあるんだけどいい?」

「なんなりと」

「牛乳拭いた雑巾とギャグボール買ってきてくれる?」

「…何に使うおつもりで?」

「パパの口に詰めて口封じ」

「ツ!!——ウグツ」

ドスツガスツ

マーフィーの言葉を聞いたクラークは必死に手足を動かすがさすが鬼の子。両手を使って床にめり込ませている。

「ムググググン?」

「ええ。私、鬼神と人の子ですから」

「そういえばそうだったっけ」

「おねーちゃんは何を詰められたい?」

「ンンン!」

「手?足?」

「裂けちゃうからやめて!んむんむんむんむん!マジごめんなさい!」

「…反省してる?」

ペロツ

「ヒアツ!」

口を両手で抑えられたままの希依は口を少々強引に開き、琴音の手のひらを舐めた。

琴音が手を離し希依から離れると希依は琴音に飛びつき抱きしめ

…

…:チュツ…:レロツ…:ンチュツ…:アンウ…:ンンンツ!

唇を重ね、琴音の息が切れるまで離さずに舌を絡める。

「ハア、ハア、…おねーちゃん?」

「琴音、おねーちゃんはいつも負けてあげてるの」

「うあーい…」

希依のセリフに琴音は蕩けた顔、声で返す。

二人だけの空気を出しているところにラストがどこからかペンとメモを取り出して興奮した様子で希依と琴音に詰め寄る。

「お二人はお付き合いなさっているんですか!? 行為はどこまで!? 馴れ初めなどをぜひ教えてください!」

「ラ、ラストさん?」

「さあすみやかに白状して私執筆の小説のネタになってください! 初体験はどんなでしたか!」

「琴音が激しかった」

「ちよっおねーちゃん!? まさか仕返しのもり!」

フフっ。琴音よ、私は結構根に持つタイプなのを忘れたかな?

「馴れ初めはどんなだったのでしょうか!」

「重すぎて一言じゃ言えないけど、」

「言えないけど?」

「簡単に言えば橋の下で拾った」

「まさかの捨て猫感覚!? …いや間違いじゃないけど言い方があるでしょう」

「なるほど。琴音様は希依様のペットと」メモメモ

「ほらこうなるじゃん! おねーちゃんどう責任とってくれんのさ!」

「ラストさん、この世界って同性でも結婚出来る?」

「一応は可能ですよ。忌避されがちですが」

「よし琴音、結婚しよう」

「え? あ、うん。…え?」

「…ペットと飼い主の禁断の恋」メモメモ

「ちよっとそのポンコツロボはメモを寄越しなさい! そしておねーちゃんは私の事どんな風に見てたの!」

「?…後輩で妹で恋人だけどそれが?」

「それが? ってなんで平然と言えるの! ちよっとは照れてよ! もしくはちゃんとペットって言ってボケてよ!」

「いやだって、普通に答えただけだし」

「あーもー! なんでおねーちゃんは変なところで天然なのさ!」

「…そんなことないと思うけど」

結局、希依のスピーチは翌日に延期になりましたとき

第7話

「聞け！ヘルムートの国民達よ！」

クラークがマーフィーに猿轡された翌日。時刻はだいたい10時頃。

クラークとマーフィー、琴音と希依は城の出入口の前で横に並び、その前には多くの国民が窓から身を乗り出したり、持ち物から記者だと分かる魔族が前に陣取ったりしている。

「再度言う。聞け！国民達よ！」

今日この日この時をもって！我、クラークは魔王を引退する！」

クラークの言葉に民衆はざわめきだす。

「そして、我の、…俺の跡を継ぐ新たな魔王を紹介する！」

十四代目魔王ヘルムートの王、喜多希依だ！」

クラークが私の名を発表し、私は一歩前が出る。

—おいおい、あの子で大丈夫か？

—隣の子は理解者様なのかしら

—あつ、あの子達スノーウルフの頭吹っ飛ばした子だ

「希依、お主の意気込みやら何やらを言え」
「ん。」

えと、ほとんどの人ははじめまして！先代魔王クラークの跡を継ぐ
〈最強〉希依です！

…あーだめだ。私にはこんな爽やか系無理。

という訳でこつからはいつもどおりで行くから。

私は皆と違って人間。か弱い人間の中でも更にか弱い弱者の中の弱者。そんな私が〈最強〉として王となるからには、私は弱者の為に正義でありたい。弱者の為に悪でありたい。弱者の為に王になりたい。

それはこの国だけの事ではなく、他の国であっても。虐げられている子を助けたい。虐げる者を殺したい。

その為なら！私は白にもなるし黒にもなる。

以上。…記者の人達、これ確実に私の黒歴史になるから記事にしな
いでね」

「おねーちゃん、カツコイイままで終わらせよーよ。」

あ、私は今代の理解者、次期魔王の妹で恋人の琴音。よろしくねー」
「うむ。では最後に経験継承の儀に移る。理解者の二人は打ち合わせ
どうりに」

クラークの台詞を聞き、マーフィーは私とクラークの後ろから両手
を二人の右肩にのせ、琴音は前から私達の左肩に両手をのせる。

「では、いきます」

「じゃあいくよー」

「ウツ、ググツ……」

「ウウ……いったあ……」

私の頭の中に様々な情報、経験が滝のように流れ込んでくる。

戦い方、闘い方、魔法の使い方、魔法の作り方、各魔王の知る戦闘
スタイル、自動人形の作り方、武器の作り方、コマの回し方、けん玉
のコツ、不死身の殺し方、魔物の調理法、リア充の爆破方法、時計の
針の合わせ方、すっぴんでも可愛く見える骨格整形術、神話生物の召
喚方法、国語、算数、理科、社会、人間をやめる方法100選、卵焼
きの極め方、目玉焼きの極め方、ゆで卵の極め方、オムレツの極め方、
オムライスの極め方、親子丼の極め方、構ってくれない娘との会話術、
娘へのプレゼントの選び方、娘の可愛いところの見つけ方、娘の喜ぶ
料理100選 e t c …

…いや誰だよ卵料理極めた魔王は

クラークから私へ送る情報を閲覧したマーフィーは無表情ながら
も顔を赤く染め、琴音は笑いを堪えている。

マーフィー心を読んだのかクラークは顔を青くする。

「…希依、もう終わりだ。締めに入れ」

「ん。」

じゃあ皆、これから私と希依、あと獣人のリリアちゃんのことも一
緒よろしく。

「じゃあ解散！」

「ああ、もう俺は終わりだ……」

「パパ、あと3日は私の家に来ないで」

「なにい!？」

「^覚パパなら分かるでしょ？」

「あ、あれは不可抗力」

「：ハア、もういいよ。パパが私の事イタいくらい大好きなのは痛いほど分かったから」

「マ、マファイ！」

「黙れこの童貞中二ニート」

「（；；；。口。）…グハツ!!」

第8話

私と琴音がこの世界に来て、私が魔王に就任して約三年が経過した。民は私のやり方に慣れ、私は魔王という立場、呼ばれ方に慣れてきた。

さて、三年も経てば私だってこの国の王。この国恒例の『魔王の我儘』を私も執行した。

それは魔族地区と魔物地区の境に建てられた孤児院。親のいない子に衣食住を提供するだけだなく、人攫いに襲われた子を保護し、親がいなければ孤児院へ、親がいるならばその子の意思で親元に帰るか孤児院に来るかを決める。

それと、国や村全体から虐げられる子も半強制的に保護している。その大体がハーフであったり、魔物に犯されたり、やむを得ず人を殺した子であったり様々だ。

孤児院の管理は私と琴音を中心に国全体で行われており、子供好きな人なんかはよく子供たちに食事やお菓子をあげたり、孤児院の近くに子供たちが遊べる公園を土地の有り余った魔族地区に大きな公園を作ってくれたりもした。

また、魔族地区を管理しているマフィさんの協力のもとスライム等の安全な魔物を孤児院に連れてきてもらって子供達が可愛がったりしている。

他には……あ、リリアちゃんなんだけどあの子はマフィさんの助手としてマフィさんの家で暮らしている。つまりあのクラークは美人さんと美少女と一緒に暮らしているという訳だ。うらやまけしからん！

タタタタタタタタタタッ

およ？ 一歩一歩か凄く早い足音が聞こえる。これはこの城のメイド、ラストさんだ。何かあったのかな？

なんて考えていたら玉座が有るだけのこの部屋の扉が勢いよく開かれた。

「魔王様！緊急事態です！妖狐の少女が冒険者と思わしきものに攫われました！」

「はあ!?その子の家族は!」

「両親と弟くんがいましたが……」

「あーもー!とりあえず行ってくる!方向はどっち!」

「人身売買が盛んな街、モーゼスです!」

「やっぱあそこかよ!絶対あの街はそのうち滅ぼすんだから。」

ラストさんの報告を聞いた私は城から飛び出し、ヘルムートの門の前まで街に被害が出ない程度のスピードで走り抜ける。

妖狐の子と家族はヘルムート近くの平原で遊んでいたそうだ。ヘルムート近くは一年の大半は冬のような寒さで雪が降るが、夏だけは雪が降らないので国の外に遊びに行く人は割とよくいる。その際大人と一緒に行くように言ってるんだけど、まさか親まで殺されるなんて…

平原に着くとそこには狐の耳と尻尾を生やした金髪の男女とその子供と思われる少年の遺体が転がっていた。彼等は皆心臓あたりを切り裂かれていて、魔族に聖水をかけたときに生じる爛れた跡がある。

少し離れた位置に剣と杖、槍が突き刺さった土の膨らみがあった。

「ステータスMAX、敏捷」

私は音を超えるスピードで野を駆け山を駆け…という程ではないが3kmほど進んだ所に鎧と剣を血で汚し、不自然に揺れる子供一人入りそうな麻袋を肩にかけた男がいた。

アイツだ。ぜったいアイツだ

私は奴の背後に着地し、即座に袋を奪い取り破き開けると中からは予想通り妖狐の少女が手足に口をを縛られた状態で出てくる。

「ソウツー!!んっ!?!んん!?!」

私は少女を潰さないように、決して離さないように抱きしめ、人攫いから距離をとる。

「誰だっ！……喜多……さん？」

人攫いは希依のことを知っているようだがその声は希依に届かない。

私は少女を地面に腰を下ろした形で地面に下ろし、手足を縛るロープと口を縛る布を少女を傷つけないように引きちぎると少女の幼いながらも整った顔と金に輝く綺麗な瞳が頭になる。

「あつ、ま、まおーのおねー」「ごめんなさい！……さん？」

「ごめんなさい！あなたの家族、守れなかった……本当に、ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。」

希依は少女を再度抱きしめ、涙を流しながら少女の両親と弟を守るはずの立場であるのにも関わらず守れなかったことを、謝る。

少女もまた涙を流し、自らを抱く魔王、希依の言葉を否定し、自身の愚かな発言を悔いる。

「……おねーさんのせいじゃない。リングがパパとママに外に行きたいって言わなきゃ……」

そうじゃない。悪いのは守れなかった私であり、人間。この世界であり、モーゼスとかいう腐った国。

何が最強だ。

何が魔王だ。

なにが星神のなりそこないだ。

私は少女とその子の家族を守れないくらいに、弱い。

妖狐の少女と希依がお互いに自らの行いを悔いてるところに人攫いが希依に声をかける。

「あ、あの、喜多さん？一体何を？それは魔族だよ？」

「……誰？なんで私の名前を知ってるの？」

「は、はは。冗談きついなあ。俺だよ。君と一緒に召喚された勇者の織田光亮だよ」

勇者……ああ、そういえば私と琴音はこいつの巻き添えだったんだっけか。

…あと2, 3人いなかったっけ？

「…そう。…この子の両親を殺したのって、あんた？」

「両親？何を言ってるんだ？それは魔族だろう？」

なんだこいつ。話が通じない。

「あ、あいつだよ。パパとママとリヨウを、殺したの」

リヨウって言うのはきつとこの子の弟のことだろう。

「そう。ねえ、リンちゃんって言ったかな？リンちゃんはいいつ、殺したい？」

「えっ？」

希依の言葉を聞きリンという妖狐の少女は考える。考え、数秒で答えを出した。

「ううん。だって、殺したら、私だってパパとママを殺したアレと一緒になっちゃう。」

パパが言ってた。

『やられたらやり返せ。じやなきや嘗められる。』

殺られても殺り返すな。そしたらリンも同類だ。』って。

ママが言ってた。

『ママもパパも、いつかはリンより先に死んじゃう。それは普通のことだから。』

病気で死んだのなら病人を、

寿命で死んだのなら老人を、

誰かに殺されたのなら、弱い子を、

リンが守れる強い子になってくれれば、

パパもママも、それがいっちな嬉しき』って」

羨ましい。それがリンちゃんの、リンちゃんの両親の言葉を聞いて最初に思った、思ってしまった私の思いだった。私も、そんなカッコイイお父さんとお母さんがいたら、何か変わったのかな。

まあ、そんなこと考えたって無駄なだけだ。

「ねえ、勇者のお前、なんで殺したの？あともう2, 3人いなかったっけ？」

「…されたからだよ」

「あ？」

「殺されたからだよ！香澄に瀬名に亮太も！3人ともそいつの仲間
に殺されたからだよ！」

「…誰？それ」

いや、ホントに誰だっけ？私に石投げた奴？それとも椅子？机？も
しかして琴音をいじめた奴？

「まさか、忘れたのかい！？仲間だったじゃないか！僕達6人とも魔王
を倒す為の！」

「知らないし。いちいち敵モブの固有名まで覚えるほど私の頭は良
くない。」

それと、私に仲間なんていない。いるのは琴音という家族とマフイ
さんとリリアちゃんみたいな親友、クラークっていう悪友、あと私を
慕ってくれる国民たち。それだけ」

「――魔王様、私とクックちゃんの事をお忘れでは？」

勇者の反対側、希依とリンの後ろに体長3mのライオンの体、頭部。
蛇の体と頭部の尻尾、広げると幅5mという大型の翼の生えたキメラ
と魔王城唯一のメイド、ラストがそこにいた。

クックとはキメラの名前でクックちゃんは私のペットだ。

「…ごめん。素で忘れてた」

「んもう、酷いです！」

ラストは頬を膨らませ、プンプンという効果音が聞こえそうな様子
で怒りを表していた。

…いやあんた幾つだよ。初代魔王より前じゃなかった？生まれた
の。

「ガウッ！／シャー！」

クックちゃんは尻尾の蛇とライオンの顔を私の顔に近づけて何か
を伝えて来るが理解者の琴音やマフイさん、覚のクラークと違って具
体的には分からない。

「ゴメンゴメン」

とりあえず私は両手でそれぞれの頭を撫でながら謝ることにした。

「き、喜多さん、君は一体…、それに魔王つて…」

「希依様は魔国ヘルムートの国王でございます。頭が高いのではなくて？歴代最悪の勇者よ」

勇者の問いにラストが代わりに答える。

私はクツクちゃんのご機嫌とりに忙しい。

「き、君の方が失礼だろう！何様のつもりだ！」

「聞けばなんでも教えて貰えるとも？」

「いいや、聞くまでもない！君は間違いなく俺の敵だ！」

勇者は聖剣を構え、ラストに斬り掛かる。

「…魔王様、戦闘許可を」

「リンちゃんの前だから、殺しはなしね」

「承知」

「うおおおお!!」

「種族というどうしようもない差、見せつけて差し上げます。

『ライトアームトランス オーガ
右腕変形 鬼神』

勇者の振り下ろす聖剣をラストの浅黒く一回り大型化した右手で握り砕く。

「嘘だろ!？」

「リンちゃんの家族が殺されて怒っているのは魔王様だけではござい
ません。『レフトアームトランス ジャイアント
左腕変形 巨人』『レッグトランス ベガサス
脚変形 天馬』」

ラストの左腕が大木のように大きな腕となり、下半身は翼の生えた馬となる。その見た目はさながら異色のキメラと言っても差し支えない。

異形となったラストは翼を羽ばたかせて天高く舞い、勇者から1m程離れたところに巨人の拳を振り下ろす。

離れていたので直接のダメージはなかったもののクレーターが勇者の足元まで広がった。

「今すぐこの場を去りなさい。これ以上続けるのならば、リンちゃんを気絶させてあなたを殺します」

「う、うわああああああ!!」

勇者は直ぐに駆け足で悲鳴をあげながらその場を去る。

…あいつ、名前なんだっけ

「お怪我はごさいませんか？リンちゃん」

「ん。ありがとうラスト様。ちよつとスカツとしちやつた。リン、悪い子？」

「いえいえ。むしろ家族を殺されたのなら当然でございます。でしよ
う？魔王様」

「うん。むしろもつと怒っていいと思う。私が琴音を殺されたら…」
「殺されたら？」

「この世界を空間ごと破壊して私も死ぬ」

「…魔王様、そんなタチの悪い自殺をなさらないでください。リン
ちゃんは真似してはいけませんよ？」

「う、うん。というかできないと思うの」

「いいえ、リンちゃんは強い子です！いつかきつと出来るようになり
ますよ！」

「わっちよつ、ラスト様あ！」

ラストはリンちゃんを肩車してクツクちゃんの背中に飛び乗る。

「クツクちゃん！魔王城まで全速力です！」

「ガウツ！」

二人を乗せたクツクちゃんは魔王城目掛けて飛び去っていった。

…私を置いて。

「待てコラー！」

その日、魔王城の屋根に突き刺さった美少女魔王が目撃されたとか

第9話

リンちゃんの家は救えなかったけれど、リンちゃんを救うことは出来ただろうか。

初めから親がいなかった私と違い、初めから親が敵だった琴音と違い、産んですぐに死んでしまったリリアちゃんと違い、リンちゃんは愛し愛された家族を目の前で殺された。

そんな悲劇を味わった少女に生きろと言うのは酷だろう。

自殺とは逃げである。逃げであるが、それは罪ではない。

私や琴音、リリアちゃんが自殺してもサンドバッグの損失を嘆く者はいても私達みたいなのを責め立てる人間はきつと少数である。リンちゃんが自殺しても、それを悲しむ人は国中にいるだろうがそれを逃げだと罵る奴はきつといない。

逃げるが勝ち。これはきつと、自らの死を望む人のための言葉といえよう。

結論

きつと私はリンちゃんが自殺を望んでも止めないだろう。むしろ痛みなく死ぬるように協力するまでである。

でも、出来ればだけど、私はリンちゃんに生きてほしい。生きて生きて生き抜いて、幸せそうな顔で死んでいってほしい。

「という訳でどう？リンちゃん」

「ふえっ？いきなりどーしたの？まおーさま頭打った？」

いや、確かに屋根に頭から突き刺さったけども…

場所は魔王城三階、玉座があるだけの部屋。

そこに今回の件の当事者であるリンちゃんと私、ラストさんの3人が即席のテーブルと椅子を囲んでいた。

…あの玉座、そのうち片付けよう。

「リンちゃんはこれからどうしたい？住む家はこの城なり孤児院なり好きに選んでいいけど」

「私は…」

私は、強くなりたい！ヘルムートの人達を守る位に！」

「お、マジで？ちよつとクラークにリンちゃんを鍛えるように言ってくるよ」

「しかし魔王様、大きな問題が一つございます」

「ん？」

「ヘルムートには他国のような騎士団や軍隊が一切ございません。

リンちゃんがいくら強くても、それは魔王様が二人になるようなもの。人手が足りないのです」

「あつ…」

「それに、そのようなものが必要ない位にこの国の大人は強いのです。

今回のような事はかなりのイレギュラーですから」

「いれぎゆらー？つて何？」

「特別という事です。認めたくはありませんが、リンちゃんの家族を殺した奴は〈勇者〉です。魔王を倒す存在とされています」

ん？ちよつとまっつて…

「ねえラストさん、魔王になる人達つて皆〈最強〉なんだよね？」

「？…はい。そうですが」

「勇者は魔王を倒すんだよね？」

「ええ」

「じゃあ魔王が倒されたことはあるの？」

「そのような事実はあまりございません」

「あまりつてことはちよつとはあるの？」

「はい。ですがそれはチェスで負けた。や、賭けに負けた等のステータスが絡まない戦いにおいてのみです。

そのような勝負ならどの世代の魔王様方も負けておられます」

「つまり、ガチバトルでは負けな什つてことでもいいの？」

「はい。その通りです」

「…まおーさま、それがどうしたの？」

「いや、勇者が魔王より強くなるならこの国を守るために色々なきやなつて思つたからさ」

「そもそも今代の勇者がおかしいのです。これまでの勇者全約五十名

の勇者達は基本的にこの国を見てからは魔族に対し友好的で魔王様の友となることも結構ございます。

実は善良な魔族の方が勇者に殺されるなんて事は初でございます。これは一体…」

ここで私は初めてこの世界に来た時に聞いた話を思い出す。

「…異世界から来てしまった私達は魔王を倒さなければ帰ることはできません」

「まおーさま、それなに？」

「私が来た時に王様っぽい人に言われたこと。まあ多分嘘だと思うけど」

「ちなみに魔王様は帰る方法をご存知で？」

「いや全然。帰ろうと思ったこともないし」

「なんで？まおーさまは家族大事じゃないの？」

「私の家族は琴音だけなの。友達も出来たのはこっちに来てからだしね」

「向こうにはいなかったの？」

「うん。向こうにはね、あの勇者みたいな奴がたつくさん居たの。

そんな奴が当たり前に正義の裁きを弱者にガトリング。とてもじゃないけど生きてはいられないようなところだった」

「魔王様、それどんな世紀末ですか」

「むしろ21世紀が始まって少しくらいだった気が…」

「まおーさま、それ多分意味違う」

さてさて、話が脱線してきたけどこれからすべきことはヘルムートの国民を守るための組織を作ること。ってことでいいはず。

「ねえラストさん、ヘルムートに飛び抜けて強い人って誰がいる？」

「そうですね…」

まずは魔王、希依様に前魔王クラーク様、鬼神と人間のハーフで理解者でもあられるマフィ様、自動人形の私。

それから魔法店『ラツキー・マジシャン』の店長ロット様、ヘルムート国立学校校長兼理事長の熱々おでん様、食事処『卵王』の店長の愛

子様、玩具屋『和玩具』の店長の源次郎様

…とりあえずLvMAXの方はこのくらいでしょうか。

琴音様はレベルはMAXですが筋力等が獣人のLv50相当なのでどちらかと言うと指揮官ポジですね」

「んんーちよつとまって？もしかしてその人達って元魔王だったりする？そして熱々おでんって名前？」

「おや、もしかしてもうお会いになられていましたか？」

「いや、多分誰とも会ってないと思うけど」

「いやだって皆名前が日本人だし…いや熱々おでんは日本人か？」

「おや、そうでしたか。」

ロット様は四代目、熱々おでん様は七代目、愛子様は十一代目、源次郎様は六代目の魔王様にあられました。それぞれ引退なさった後は各々のやりたい事をして暮らしております。お会いになられますか？」

「いや、今日はもう疲れたからいい…いや、卵王に行こう。お腹空いた」

「…今はお昼前、行くなら今のうちですね」

だいたい11時頃。

魔族地区の比較的魔王城の近くに位置する卵料理専門の定食屋、『卵黄』はまだ昼前にもかかわらず店内は賑わっていた。

「いらっしやーい。3名ね、奥があいてるよ」

私とリンちゃん、ラストが店内に入ると割烹着を身につけ、首にマフラーを巻いた黒髪ロングの女性が出迎えた。

「お久しぶりです。愛子様」

店員さんをラストは『愛子様』と呼んだ。ということは…

「ん？……ああラスちゃんか、おひさだね」

「ご紹介します希依様。こちら十一代目魔王の無刀 愛子様です」

「ん。ん？ってことはこの子が新しい魔王の子？」

「ええ。こちら十四代目の魔王、希依様です」

「へえ」

ラストが元魔王、愛子に私を紹介すると愛子は私を品定めする様にぐるりと移動しながら眺める。

「えと、なにか？」

「ん？ああ、いや、ゴメンゴメン。ラスちゃんが言ったけど私は元魔王で今はこの店の料理長をしている愛子だ。種族はこの通り」

そう言うとき愛子は両手で頭を掴み持ち上げると、なんと彼女には首が無く、頭部は持ち上がり浮遊し、希依の目の前で停止する。

「…デユラハン？」

「あつははく。おいしい、私は『ろくろ首』という妖怪だ」

あれ？ろくろ首ってたしか……

「ろくろ首って首が伸びるんじゃないかなかったつけ？」

「あまり知られてないことだけだね、ろくろ首には首が伸びる奴と首が無い奴の二種類がいるんだよ。

ちなみにクラ坊とは同期だ。こっちに来たタイミングに何千年だかの差があつて私の方が大分年上だけだねー」

「へー」。

私は見ての通り人間。…死んだら神になるらしいけど」

「ほう？そりや面白い。

さて、注文はなんだ？今日の私は機嫌がいいのでな、奢ってやる」

「私は目玉焼きと卵サンドをお願いします」

ラストはthe朝食な物を注文。昼だぞ？

「私はオムライス！」

リンちゃんはオムライス。可愛い

さて、私はどうしよう…か…あれ？

「あの、メニューは？」

「ん？ああ、いらんいらん。卵料理なら好きなもん注文していいぞ」

「そう？じゃあ卵焼き、甘めで」

「りようかーい。すぐ出来るからちとまっとれよー」

そう言って愛子は厨房に向かって行く。

「：なんて言うか、軽い人だね」

「ええ。というか魔王様方は皆さん揃ってあんな感じですよ」

「子供には人気ありそうだね。リンちゃんから見てもどうなの？」

「カッコイイと思うよ？」

「ふーん。」

ねえ、あの人はどんな我儘を通したの？」

「愛子様はですね、この国の食文化を急激に発展させてくださいました。

愛様が魔王に就任なさる前のヘルムートの食事は基本的に野良の魔物を焼いたりサラダにしたりが基本でしたから」

なんとも野性的だ。

「おまたせー。ラスちゃんは卵サンドに目玉焼き、リンちゃんはオムライス、希依ちゃんは卵焼きだったかな？」

愛子が厨房に戻って一分程度。右手に卵サンドと目玉焼き、左手にオムライス、胸元辺りで浮かぶ頭の上に卵焼きを乗せてやってきた。

いや、速すぎるでしょ。

「速っ!？」

これが普通なのかと思ったがリンちゃんが驚いてるのを見るにやはり速いのだろう。

「愛子様、少々衰えましたか？」

「これより速かったの？」

「いや、違うから。私だってちゃんと卵を使えばこれくらいはかかるから」

愛子のセリフを聞いて私はある技能を思い出す。

「あのおもしろ手品？」

「あつはー。私があみだしたレシピを手品と言うか」

愛子は苦笑い浮かべながら呟く。

「いや、あれをレシピというのもどうかと思うけど…」

「ほらほら、暖かいうちに食べて食べて」

あ、ごまかした。

とはいえ私は卵焼きを一切れ口に運ぶ。

なにこれうま！

程よく焼けた表面を噛み破ると内側はトロトロでほんのり甘じよっぱい醤油の味が口の中に広がる。

もつと早くここに来ればよかった。

横を見るとラストとリンちゃんも幸せそうな顔で料理を食べていた。

「で、君らは何をしにうちに来たんだい？まさか、魔王がメイドと子供を連れてご飯を食べに来た。ってわけじゃないんだろう？」

一体何があったの？」

私とラストさんとリンちゃんが座っている席の向かいに愛子は座り、私に尋ねる。

私は今日あったことを愛子さんに話した。

リンちゃんの家族が勇者に殺されたこと。

勇者の目的は魔王を倒し元の世界に帰ること。

リンちゃんは守るために強くなりたいこと。

「ふーん、そう。で、どうしたいの？」

リンちゃんの家族の仇を打つなら、私は協力しよう。

ヘルムートの国民の危険を退けたいなら人間を滅ぼすために歴代魔王に声をかけるくらいはしてあげる。

あなたは、どうしたい？魔王様」

「別にどうもしないけど？」

今日ここに来たのはお腹空いたからだし。

あ、でもモーゼスだけは滅ぼしたい」

「そっか。うん、そうだよ。私も、私たち魔王も揃って皆そう言うらしいんだ。あの街は初代魔王の代から既に腐っている。

…でも、ここ数万年あの街は腐り切ったままで現存している。なぜだか分かる？」

まさかモーゼスが古くからある街だとは思わなかった。

けど、大抵こういう国や街がなかなか滅ばないのは大きくわけて2パターンだと、私は思う。

「人質をとって脅すか、奴隷を薬物や魔法で強化して戦わせるか。

…違う？」

「そ。

でも、それだけじゃない。

それはね、あの街には領主が居ないんだよ。

国を追われたならず者や

親も金も家もないなるべくしてなつてしまった犯罪者、

人魚やエルフの美しさや幼い獣人の可愛さに取り憑かれた元貴族

や元王族の金持ち。

他にも治安の悪さを気に入った喧嘩好きなんかが集まって出来た街。

何度か滅ぶ寸前まで追い詰められることはあったけれど、数年で人口は元に戻ってしまう。

そんな不死身とも言えるような街を、人間は滅ぼさずに、希依ちゃんに滅ぼせるかな？」

「負けないキングと見えないキング。勝つのがどちらか、分かるでしょう？」

「なるほどね。ただ、かなりの長期戦になるよ」

「不死身もどきを殺すコツは死ぬまで殺し続けること。無くなるまで殲滅し続ける」

「面倒くさそうだね、それ。

出来るの?」

「出来るよ。だって私はやればできる子だもん」

「むしろやっちゃダメな子って感じだけどね」

「まあ否定はしないよ。愛子さんも一緒にどう?」

「いや、遠慮しておくよ。私はこのお店だけで精一杯だからね」

「そっか。」

じゃ、そろそろ帰ろっか。ラストさん、リンちゃ…ん?」

私を挟んで隣に座っていたはずの二人はいつの間にか居なくなっていた。

「二人ならデザートを食べて帰ったよ?」

希依ちゃんもプリンどう?」

「…食べる。」

第10話

ハロハロー。久しぶりな気がする琴音ちゃんだよー♪
…キラじゃないことした気がする。

さて、ここ最近の私の趣味を紹介しようかな。
私の趣味に名前をつけるとしたらそうだね……

歴史発掘？歴史探索？

……まあそんな感じだね。

理解者の能力で偏見や伝承みたいな異物のない黒く正しい歴史を学んでる感じかな。それをベツトで横になりながら夢で見てる感じ。元の世界では歴史の授業は嫌い…嫌い？そんなに授業に出なかつたからわかんないや。

でもまあ何が言いたいのかと言うとね、

自分で一から調べて学ぶ歴史ってめちゃくちゃ楽しいの。

例えるならあれだね、夜の八時とか九時くらいにたまにやつてる古代エジプト特集みたいなものって見てて楽しいじゃん？あれだよ。

え？誰に話してるかだって？あなただよあなた。だいたい全てを知る琴音ちゃんは私達が小説のキャラだってことくらい、分かっているだもんね！

さてさて、今日は紹介も兼ねるってことだし復習もかねてかろうじてまだ図書館とかに行けば分かる程度、初代魔王と初代勇者の年代を軽く解説しよつかな。

初代勇者、チュロスⅡトリオン

出身はこの世界とはまた違うハイ・ファンタジー世界のとある国。王族の息子でこの世界には不仲でありながらも許嫁であるラミレスⅡジャンナと共に私達を呼んだ国王の祖先である当時の王に召喚されたみたい。

初代魔王、エルヴィーデボラ

出身はこの世界、後のヘルムートとなる土地で一体の魔物として発
生。種族は今の国にはなく、記録にも残っていないことから恐らく一
人一種族のタイプなんだと思う。

見た目は普通に美人の黒髪女性の背中あたりから人の腕のような
ものが二対の羽のように生えている。

エルヴィの理解者はなんと初代勇者、チュロスと共に来てしまった
ラミレスで、喧嘩別れして国を出たはいいもの行くあてもなく、さ
まよっていたところ、エルヴィが住処にしていた洞窟にたまたま行き
着き、彼女から食事を受け取る代わりに言語や文化を教えてあげたそ
う。ちなみに名付け親もラミレスさん。

彼女等が出会って数年が経過した頃、すっかり意気投合した二人は
旅に出たの。

当時は国と呼べるものは一つしかなく、今ほど発達していなかつ
た。ちなみにあのド腐れ街、モーゼスができ始めるのもちょうどこの
頃。それについてはまた別の機会かな。

彼女等にはあてもなく、ただ暇を潰すように様々な種族の集落を
転々とめぐる。

その頃勇者は何をしているかと言うと邪なる存在を倒して欲しい
という王の頼みを受け、様々な種族の集落を転々とめぐり、その種族
を絶滅させていった。

そう、後の魔王達と勇者チュロスの動き方は同じなの。

そんな三人が出会うのはそう遠くなく、というかすぐでサキュバ
ス、インキュバスの集落があるエルヴィの生まれた地であった。

元々不仲であったラミレスと見た目が完全に異形なエルヴィをみ
たチュロスは即座に剣を抜く。

対するエルヴィは純粋な魔力で構成された剣を無数の腕一つ一つ
に装備していく。

この戦いの結末はみんな分かるよね？

この戦いは文字通り三日三晩どころか三年三月かかり、最終的にエルヴィの剣がチュロスを貫き、戦いは集結した。

戦いは終わったけれど、その地にできた傷跡は大きく、地面はめくれ木々は飛び、空はひび割れ海は川となった。

うん、意味わかんないよね。

でも魔王が本気で戦うと大抵こうなっちゃうんだ。それは歴史が物語ってる。

そしてそれからは三人の戦いを見に来た後に魔族と呼ばれる人達の祖先がそこに村を作り、街となり国となり、そして何やかんやで国となりましたとき。

え？ラストが雑すぎるって？いや、戦いの描写は彼らの為にも黙っておくべきってくらいには愉快だし国になるまでの工程はこの後何十年もかかるからさすがに私もまだ理解しきってはいないんだ。ゴメンね。

さてさて、今回のところはここまでにしよっか。

今日みたいなのは私達の作者がネタを思いついたら気まぐれでこの世界の歴史を紐解く回を設けるみたいだよ。

じゃあこの話での私の一人称視点は終了！

こっからは三人称視点だよー

時刻は夕方。琴音は意識を現実に戻すと体を締め付けられるような違和感を感じる

目を覚ますと視界には最愛の姉にして恋人である希依が琴音を抱きしめるようにして眠っていた。よく見ると目元が軽くであるが赤

く腫れている。

「…おねー、ちゃん？」

「んう……ことねえ……？」

琴音が軽く声をかけると希依は目を覚めますが琴音を抱きしめるのはやめない。むしろちよつとキツくなる。

「…おねーちゃん、何かあった？」

「うん……」

「そっか。…いいよ、まだ寝てて。一緒にいてあげる」

「うん……」

琴音は理解者の能力で希依に今日何があったのかをすぐに理解した。

リンという妖狐の少女の家族を救えなかったこと。

元々大つ嫌いだった勇者野郎に出会ったこと。

卵料理を極めた元魔王と話したこと。

本当は希依の口から聞きたいのだが琴音は聞かず、今は傷心の姉をできる限り癒すことに徹する。

普段は琴音から甘えに行くのに今日は姉が甘えに来てくれたのが嬉しいからなんてことはあんまりない。うん、あんまりない。

「おやすみ、おねーちゃん」

「んう……」

第11話

リンちゃんの件から数週間が経過した。

リンちゃんは以前の宣言通り目標魔王クラス程に強くなるために琴音やマフィさんの理解者の力を利用した古代の超魔法から近代の殲滅魔術を、実はかなり長生きなラストさんから戦術等を魔王城に住み込みで教わっている。

さて、私は今とんでもなくやばい問題を抱えている。それは暇すぎるという事だ。

平和なのはいい。リンちゃんみたいな事は無い方がいいのだがここまで事件がないと暇すぎて死にたくなる。琴音は理解者のあれであと数百年は暇つぶし出来るだろうしリリアちゃんはマフィさんの特訓が終わるまで孤児院でお留守番。

私も何か趣味を見つけなきゃなのだけど…

暇つぶしなら既に大体をやり尽くしている。

前の世界での趣味だった読書は去年国中の本を読み尽くしたしそもそも数が少ないし。

なにか…なにか…

よし、モーゼス壊そう」

「魔王様、いきなりどうされました？」

「あれ、声にでてた？」

私に声をかけたのは魔導書を3冊ほど抱えたラストさんだった。

「魔王様、モーゼス殲滅の計画はまだ話し合ってませんよね？」

「いや、まだそこまではしないよ。今日はただの暇つぶし」

「もうちよつと健全な暇つぶしはないのですか？読書とか」

「もう読み尽くした」

「料理はどうでしょう？」

「いまそんなお腹すいてない」

「ボードゲームなんかどうですか？」

「アホスベック機械ラストさん相手に勝てるわけないし」

「…モーゼス行きますか」

「うっし(？・・・)??」

「ただし、私も行きます」

「うん、じゃあ琴音とクツクちゃんにも声かけてきてよ。ここにいらってことは今日の分のリンちゃんの勉強終わったんでしょ？」

「はい。『200倍速』 タタタタタタタタタタ」

ラストは自身の動きの速度を普段2倍速で人並み、つまり200倍だと人間基準で100倍の速さで琴音の元へかけて行く。

さ、私も準備しないと。

まあそんな必要なものも無いんだけど。

約十分後、魔王城の門の前に動きやすい格好に着替えた私に両腕を翼、ハーピーのものに変形させたラストさん、前の世界の一軒家が2つは入りそうな超大型の籠の持ち手にあたる部分を足で掴んで翼をはためかすクツクちゃんとその上に腰掛ける琴音が集まった。

「さ、行くっか」

「うん！／はい／ガウツ！」

籠を持ち琴音を乗せたクツクちゃんとラストさんは空をはばたき、

『ロストステータス失われた数値MAX 摩擦』『ステータスMAX 筋力』

私は摩擦を極限まで上げた足で空気を蹴り進む。

モーゼスは無法者が無法地帯に集まってできた街である。

乱雑に立地など考えずに作ったような入り組んだ住宅街に商店街、そしてそれらの中心に位置する大きな舞台。

舞台ではほぼ毎日多くの人間や亜人のオークションが開かれてい

る。

私達はその舞台中央に着陸した。

「おねーちゃんは北側！ラストさんは南！クックちゃんは私と一緒に捕まった人達の救助！」

着陸してすぐ、オークションの進行役や観客が啞然としている中琴音は街の状況を即座に理解して私達に指示を出す。

ラストさんは指示を聞いてすぐに両手を刃状に変形させてモーゼスの住人達を無差別に切り殺しながら駆けて行く。

「琴音！北つてどっち!?!」

「ラストさんの反対側！」

私は北かどうかは分からないがラストさんとは反対側に向かって走り出した。

琴音 side

おねーちゃんとラストさんが向かった方向からは悲鳴や爆発音が響き渡る。

「さ、私も早くしないと全部終わっちゃうからね」

「ああ!?!何いきなり飛んできてゴチャゴチャぬかしてんだ糞ガキ！」

オークションの主催者を筆頭に生き残った小悪党達が剣やナイフを構えて襲いかかってくる。

「おおうらあ!!」

「―求自業自得絶対防御

―救済弱者空間転移箱

―襲超高音白炎焼却劇」

琴音に触れた武器は方向を変え持ち主を突き刺し、オークションの商品となっていた人間から亜人、魔族まで全員をクックちゃんの持ってきた籠に転移させ、モーゼスの住民だけとなったその場を凄まじい高温を放つ白い炎が人を、地面を、舞台を、全てを焼き尽くす。

「…ちよつとやりすぎたかな？ま、いつか」

希依 side

北に向かつて走る私は奴隷の象徴である金属製の首輪を付けた人達から首輪と鎖を引きちぎり、クツクちゃんの籠に目掛けて投げ飛ばしながら住民の首を殴り飛ばす。

奴隷の扱いが雑なようだが平気。籠の中には超が4つくらい着くようなクツションがあるから。超超超超クツション（私命名）があるから。

…名前が変？そう思ったあなたは超超ジュラルミンにホツトプレートの上で土下座しなさい。あんなに頭悪くてカツコイイ名前私大好き。

※A7075という強度の高いアルミニウムです。

ラストside

不思議です。南側は大体回り切ったのですが未だ誰一人奴隷がいません。これは一体…っ!?

住民をあらかた殺し終えたラストは建物と建物の間などを探しながら歩いてると背後からボロボロな剣がラストの頭部目掛けて突き出るが、ラストはさほど慌てることなく回避し振り返る。

そこには2人の子供、否、2人の少年、少女のそれぞれ右手、左手が完全に繋がった一つの異形が剣を捨てて立っていた。

「っ!?!…初めましてですね。お姉様、お兄様、でよろしいのですかね？自動人形2号、3号」

その異形をよく見ると首から肩にかけて大型の歯車の一部が露出していることから自動人形だと分かる。

「なんの事かな？私／僕 はただの人間だよ」

「いやいや無理がありますから！せめて腕と肩のそれをどうにかしてから言ってください！」

「そんなことより」

「あなたは即刻、」

「ここっから排除する」 ギギギギギギ…

交互に話す2人はそれぞれ繋がっていない方の腕で頭を掴み、肩の歯車を差し込み、ゼンマイを回すように首を倒す。

「どうやら種族仲良くとは行かないようですね」

「全てはマスター達のため」

「全てはぶっ殺すため!!」

少女の方は静かに、少年の方は怒りを撒き散らすように、二人四脚でラストに襲いかかる。

「…自動人形の一号機の目的は人間に変わる研究、開発の継続のため。二号機は人間の感情の再現のため。しかし失敗しその感情は激しすぎた。三号機は二号機の感情のストッパーとして作られた感情が薄い人形。

…決して戦闘向きではありませんよ」

ラストは2人の腕を掴み、完全に静止させてしまう

「離せえ!!」

「離して。あと二、うっさい」

「黙れ三!!」

「…(うるさい)」

「…なんでしょう、可愛く見えてきました」

「…ありがとう」

「いいから離せ!!」

そんなこんなグダグダしていると…

「いつけー!三ちゃん!」

「二いちゃん気張れ!」

そこらじゅうから目の前の自動人形より背の低い、お世辞にも綺麗とはいえない服装の子供達が集まってきた。

「…なんでしょうこのアウェイ感。飛び蹴りで爆発四散しなければ行けない気がしてきました」

「マスター達には手を出させない」

「なるほど、あなた達のマスターとはあの子達のことでしたか。」

：大丈夫ですよ。私達は奴隷を救出しに来ただけです。わざわざ子供達を殺したりしませんよ」

「信じられるか！」

「信じらんない」

「別に信じて貰う必要はないのですが…おや、もう終わりでしたか」

唐突にラストは手を離すと腕を翼に変形させて空に飛び立つ。

そこには二段ジャンプの要領で空を飛ぶ魔王少女と大型の籠を持つキメラ、その上に座る少女が乗っていた。

「ラストさん、あの子達はいいの？」

希依がラストに尋ねる。

「ええ。あの子達には2人が着いていますから」

「そっか」

「そうなんです。」

「どうでしたか魔王様、暇は潰せましたか？」

「ううん、あんまり。琴音、なんかいいの無い？」

「んんー、あ、歴代の魔王さん達に聞きに行ってみたら？」

「…：…ありかも」

「その前に皆さんを送り届けてからですよ」

「…：分かってる」

「ならいいのですが…」

その日、モーゼスから連れ去った商品達を家族が現存する人は家族の元へ。捨てられた子、殺された子、親のいない子はヘルムートの孤児院に送り届けられた。

第12話

暇つぶしのつもりがあまり暇つぶしにならなかった日から数日が経過し、琴音の協力のもとヘルムートに居ない魔王の一人の居場所が判明した。

見つかったのは9代目魔王、魔法王ドヌーヴという吸血鬼だった。今はヘルムートから北西に約30000km進んだところにあるさほど大きくない山の麓にある民家に住んでいるらしい。

さすがに毎日暇なのは私だけなので私だけで行くのだが……
たどり着ける気がしない。

「というわけで琴音、連れてって」

「ちよつと待っておねーちゃん。ちよつとどころじゃないや、もつと待て。」

3万キロってどんだけかかると思ってたの?」

「音速移動で一分少し」

「いや死ぬから。おねーちゃんはともかく私が死ぬ」

「そしたら世界殴らなきやだね。空間転移の魔法ってないの?ル○ラ的なやつ」

「ル○は空間転移じゃなくて空飛ぶやつだから」

「でも最新作では洞窟の中でも使えたよ?」

「リレ○ト涙目だね。」

…いやそうじゃなくてね?そもそも私もあんまり暇じゃないの。

リンちゃんに魔法教えたりとか」

「とか?」

「……魔法教えたりとか!」

「それだけじゃん!」

じゃあそしたらリンちゃんも連れていこうしようしようんそれがいいさあ琴音40秒で支度し『爆流塵』ーギャン!」

口調がだんだん早くなる希依を琴音は爆竹程度の爆発を希依の耳元で起こして強引に止めた。

※危険ですので絶対に真似しないでください

「リンちゃんを連れていくのは私も賛成だけども、どうやって行く気なの?」

「うう…鼓膜が、鼓膜が、」

「もう、『陽良療』」

「こま…あ、痛くない」

「ギヤグパートだからってグダグダしすぎだよ」

「琴音、メタいよ」

「こういうキャラでやっていこうと思ってる」

「程々にね」

「うん。で、どうやって行くの?」

「音速「却下」立ち幅跳び「同じ」…槍投げ「投げる気!」…フルマラ

ソン「42、195キロ!」

「…どうしたらいいの?」

「おねーちゃんが考えてよ。暇なのはおねーちゃんだけなんだから」

「んー……」

あ、身体強化系の魔法ってない?」

「……ある」

「お願い!頼れるのは琴音だけなの!なんでもするから!」

「え?今なんでもって「するから!」う、うんわかった。じゃあリンちゃん呼んでくるね」

「私も行く」

「ん。」

リンちゃんの部屋は魔王城の一階にある。大きさ、内装は私や琴音とさほど変わらず。机の上には数冊の魔導書と万年筆、ノートがある。事から琴音、ラストさんの授業以外にも勉強していることが分かる。

「りーんーちゃん、あーそーぼ!」

「…まおー様、私の部屋の中で何してるの?」

平均より小柄な希依よりさらに頭一つ低いリンが上目遣いで希依に話しかける。

「…？友達を遊びに誘う時はこう言うんじゃないの？」

「おねーちゃん、それは部屋とか家の外から言うんだよ？」

「ごめんね、友達が居ないばかりに……」

希依はガチで凹んだ……風を装う。

「あわわわわっ、ゴメンなさいまおー様！私が友達になってあげますからー！」

「ん、ごめん冗談」

「…おねーちゃん友達いたっけ？」

「…いなかったけど、…さすがにあーそーぼを家の外から言うのは知ってる。……なんかの漫画で見た」

琴音の言葉に今度はガチでいじける希依であった。

「おねーちゃん」

「…なに？」

琴音に呼ばれて顔を上げ、

「今日のおねーちゃん、めんどくさいね」

慰めるかと思いきや全力でトドメを刺しにいった琴音ちゃんであった。

「ううう…めんどくさいおねーちゃんでごめんね……」

「琴様、鬼畜」

「…ねえリンちゃん？鬼畜なんて言葉、誰から聞いたの？」

「ラスト様」

「また微妙にツツコミにくい人を…」

「と一緒に遊んでたまおー様」

「…おねーちゃん、また挑んだんだね。ボードゲームで勝ち目がないのは分かってるでしょうに」

「…勝てる気がしちやっただもん。私悪くない」

「まおー様、一緒に遊ぼ」

「いーよー」

「…出かけなくていいの？」

「リンちゃんと遊ぶ方が優先度高いじゃん」

「…ロリコン」

琴音は希依を蔑むように睨む。

「それにシスコンも追加しといて〜」

希依はリンちゃんを肩車して部屋を出ていく。

「もう…おねーちゃんつたら、勝手なんだから」

文句を言いながらも口元を緩ませながら後を追う琴音。果たして2人は何をして遊ぶか決めているのだろうか…

「『老成ゲ〜ム!』」

「なんでよりにもよってそれを選んだのかな!?!」

〜老成ゲーム〜

ゴールのない双六で老人の寿命を10面ダイスで決め、残り少ない寿命をできる限り減らないように祈りながら最後まで生き残ったプレイヤーが勝利する誰得なのか分からないバカゲーである。(ユラさん考案)

「なんでよりにもよってこれ?もっと他にあったでしょ」

「琴音、食べず嫌いはダメって言わなかった?」

「言われてないし。」

皿に豚の尻尾を盛り付けて今日のおやつよーって言われておねーちゃんは食べる?」

「ホイップクリームといちごで飾り付けて差し出した人に食べさせる」

「まおー様、好き嫌いはめっ!だよ」

「ごめんリンちゃん、限度がある。いくら私でも豚の尻尾とカレーライスには食べたくない」

「カレー?美味しいと思うけど」

「いいリンちゃん?おねーちゃんはカレーが大っ嫌いなの。だからお

ねーちゃんにいじわるされたらラストさんに今日の夕ご飯はカレーがいいって言うんだよ？」

「ダメだよリンちゃん！そんな悪魔の囁きに耳を傾けないで！」

「元をたどればおねーちゃんが自爆したただけだけどね」

「老成ゲくム！」

「あ、誤魔化した」

まず三人はそれぞれ10面ダイスを振ってキャラの寿命を決める。最長でも10年、最短だと1年である。

「失われた数値 運「夕飯カレーライス」うう」

「まおー様、ズルは良くない」

「ズルくないもん」

「うわっ、絶対カオスになるよこれ」

希依 10年

琴音 10年

リン 8年

自身の運勢を極限まで上昇させた希依、魔法で所謂コピペを行った琴音は当然のように最大値を出し、リンは混じりつけ無しの運で最高値まで行かないものの高い数値を出した。

ここから先魔法、技能の使用は禁止というルールが加わった。

「琴音、それはズルくない？」

「おねーちゃんこそ。リンちゃんを見習って自分の運だけでやってよね」

「どっちもどっちだと思うよ」

「うぐぐ…」

1ターン目

希依

「私からね」

カラコロ

7

『お気に入りの杖が寿命を迎えた。1減らし、今後出た目に――1する』

10年↓9年

「普通に宜しくないやつだ…」

「――1で済んでるあたりこの人杖いらなかったよね」

「おねーちゃんがおばーちゃんになったと考えれば…いや、ならないか」

琴音

「次は私だよー」

カラコロ

10

『イケメンの不良に絡まれた。±0』

10年↓10年

「このビッチが」

「琴音じゃないね、このばーさん」

「ことねえ口悪い」

「私がこれにあつたら合計3は減ってるもん」

「……」

リン

「空気が…」

カラコロ

4

『階段から転げ落ちて入院。2減らして3回休み』

「さすがリンちゃん、普通だ」

「ダメーじ受けたけど3回休めるからお得、かな？」

「てか大丈夫なの？ジジイだかババアだか知らないけど」

「入院したからいいんじゃない？」

2ターン目

希依

「1が出れば0…1が出れば0…」

カラコロ

3—1||2

『友人とあつた。』

「えっ、それだけ？」

「おねーちゃん、それはないよ」

「実質一回休みだね」

琴音

「ビッチババアは死すべし」

「琴音、自爆は出来ないよ？」

カラコロ

10

『3進む』

3…

『2進む』

2…

『4進む』

4…

『疲れた。2減らす』

10—2||8

「進みすぎだつてのババア」

「歩いただけで寿命を減らすババアの極み」

「もう2人の中ではことねえのキャラはババアで決定なんですわね」

リン

『3回休み』残り2回

3ターン目

希依

カラコロ

6

『馬車に轆かれた。死亡』

「即死!？」

「おねーちゃんの運勢MAXは何処へ…」

「運がいいの最初だったね」

琴音

「大丈夫かな…」

カラコロ

10

『狼と遭遇。サイコロを振って偶数なら死亡、奇数なら逃走成功、――』

「詰んだ…」

カラコロ

10

死亡

勝者リン

「「ええ〜…」」

「このゲームってこんなにすぐ終わるやつだっけ？」

希依の疑問に琴音が発見する。

「あ、このゲームのタイトルの隅に『辛口な人生』って書いてる」

「そんな世界をジジババ共はどうやって生き残ったのさ」

「引きこもりだったんじゃない?」

「なるほど」

リンちゃんの言葉に2人は納得させられた。

第13話

「なんか嫌な予感がする」

「…え、いきなりどーしたのおねーちゃん？電波系にでも転職したの？」

日時は予定を変更して3人でゲームをしただけの日の翌日早朝。

食堂という名の大型のテーブルと沢山の椅子が並ぶだけの大部屋で城の住人全員で朝食を食べ終え、それぞれ持ち場に移動し魔王希依とその理解者琴音の2人だけになった時に希依は何かを直感した。

「いや、転職した覚えは無い。てかこのファンタジー世界じゃ大体の人は電波だよ」

『電波』とは何か、話し合おうか？おねーちゃん」

「やめよつか琴音。それやってたら終わらないから」

『萌え』とは何か！」

「だからしないってば」

「…で、嫌な予感ってどんな？」

「ん〜…面倒事というか厄介事というか厄災事というか」

「もうちよい具体的には？」

「リンちゃんの時みたいなのが起こりかねないって感じ？」

「…ヤバくね？」

「…超ヤバイ♡」

「行くよおねーちゃん！まずは50メートルの壁に常識と非常識を分ける結界と争いを禁ずる十の盟約とそれからそれから…」

「中の1年が外の1日の部屋と天空からの大規模殺戮が出来る空飛ぶお城と内装が溶岩湖と動く壁と動く天井のお城とかそれから」

「赤い帽子の配管工とか攫われるのが仕事の桃姫とかピンクの悪魔とか自称神のゲームクリエイターとかもいた方がいいよね！」

「あと美食四天王とかだらしな系銀髪テンパとか地球育ちのサイヤ人とか平等なだけの人外とか裸エプロン先輩とかも必要なんじゃないかな！」

「それからそれから……」——まったく・何をそんなに・慌てている・
今代の魔王よ」……誰?」

慌ててかなり危ないラインを反復横跳びする2人に聞き覚えのない
声がかかる。

そちらに目を向けるとそこには『アホなの?』と日本語で書かれた
Tシャツに短パンで病的なまでに色白肌の青年がいた。

左手には日傘、右手は30センチほどの金髪ワンピースの少女の人
形を抱えていた。よく手入れされている。

「来ると占いにあつたから・歓迎の準備をしてやった・というのに・来
ないから来てやった・という訳だ」

「……ないわー」

「な・に・が・だ!?!」

「まず服装がダサイ。いい歳してTシャツ短パンで」
「ウグツ」

希依の口撃に服装のダサイ青年は狼狽える。

「それに人形遊びって、いや否定する気はないよ?でもね、さすがに人
形を本気でそんな可愛い感じに仕上げるだけならともかくそれを持
ち歩くのはちよつとあれかなって思うんだ私は。いやほんと個人の
趣味だからね?それを悪くいう気は無いんだよ。ほら私も可愛い人
形とかぬいぐるみとか好きだしでも男の人がそれを可愛がつてそ
の上持ち歩くのはどうかなって思うな〜」

「……なんだおまえら……口撃力MAXかよ・それとこいつは・人形だけ
ど人形じゃねえ」

「そーだそーだ!確かにご主人は服装ダサイしヘタレでコミュ障でチ
キンだけどお人形さんで遊んでたのは18歳までなんだからね!」

人形だと思っていた少女が妙に高くて甘ったるい声で青年をフォ
ロー?……する。

「ちよつと!……黙ってる!」

「痛い遺体板井射たいイタイ!ご主人の話し方くらいイタイ!」

まだバレていない青年の性質を暴露した人形少女を青年は指二本
で小さい頭を握る。

「…ねえ琴音、こういうのってどこに通報したらいいのかな」

「そんなことよりやばいよおねーちゃん。この2人、ラストさん並にキャラが濃い」

「聞こえてる！…からな！」

「そろそろ自己紹介してくれる？なんとなく今日くらいに面倒なやつがくる予感があるから」

「…俺は・九代目魔王・ドヌーヴ」

吸血鬼・魔法使い・呪術使い・だ」

「私はご主人がお人形遊びの為に「呪術使いの仕事として」作られた呪いの館の集合体、エリー、よろしくね！」

「ん、よろしく。私は十四代目魔王の喜多希依。そしてこつちが」

「おねーちゃんの恋人で理解者の喜多琴音。よろしくね」

「姉妹・恋人・女同士…変態か」

「でも素敵だと思うなく。偏見とか血縁とか性別とか色んなハードルを踏み均す関係ってことでしょ？それって最高に素敵！」

「わっ、おねーちゃんこの子すごいいい子だよ。踏み均す関係って言い方がもう最っ高！」

「それに比べてこの吸血鬼ったら…」

「それに比べて…とか・言うな！」

自己紹介がある程度済み、会話が盛り上がってきたところに水を差すものが一人。

「魔王さま！ゆ…ドヌーヴくん？」

「む・ラストか・ひさしいな」

「…そのキャラ作りまだ続いていたんですね」

水を差したのは代々魔王に仕えてきたメイド、ラストだった。

「「キャラ作りだったんだ」」

あとなんでくん付けなのかはつつこんでいいのかな

「エリー・キイ・コトネ・黙れ」

「きゃーこわーい（棒）」

…じゃなかった。ラストさん、どつたの？」

「勇者です！もう城内に侵入してきてリンちゃんと所用で来ていた

マーフィー様、リリアちゃんが応戦してます！」

「マジで!?場所は!？」

「1階の広間です！」

……ここは3階、一直線に走ってもいいけど確実に城が壊れるしリリアちゃん辺りは死んじやいかねないし一体どうすれば——

「俺が・送ってやる。」

『動け小娘終わりは寸前・始まりはその場・終わり迎えるは愚かさ故に・転移』

希依の足元に直径3メートル程の大型の魔法陣が展開される。

「ちよっ、その詠唱イタ——

魔法陣が一瞬輝きその場の全員が目を伏せるとそこには魔法陣も希依も居なかった。

リンちゃん達 side

ここは魔王城1階。

用事ついでにたまたま会った3人で立ち話に興じていたところに勇者が水を差してきた。水、というか剣だが。

「喜多さんを！取り戻すんだー！」

「…なんのこど？てかどうやってここまで…あなるほどね」

勇者、織田はマーフィーに剣を振り下ろすも素手で捕まれ振りほどけないでいた。

「…マフィさん、何がなるほどなの？」

リリアはマーフィーに問いかけるとマーフィーは答える。

「リリアちゃん、勇者の首飾り見てみ？」

よく見るとその首飾りはうすぼんやりと青く光っていて魔法陣のような模様が刻まれていた。

「あれは魔装具。千年ちよっ以前の技術で1つの魔法を封入して使うことが出来るの。詠唱が要らないっていう長所があるけどそれ以上に燃費が悪い。」

そしてあれは『転移』の魔法が封入されてる」

「ふうーん」

「パパとママ、リヨウの仇……、ねえマフィさん、リリアさん、こいつ、私に任せてくれないかなあ？」

リンの家族の仇である勇者が目の前にいて、当時より力をつけたりんは我慢を出来る訳もなく2人に頼む。

「…いいよ。危なくなったら、分かっているね？」

「リン、がんばら」

「がんばる！『炎爪劇』」

リンは妖狐特有の青い火、狐火を伸ばした爪に纏わせ勇者に襲いかかる。

「うわっ!?いきなり何するんだ！卑怯だぞ！」

「うっさい！いいから黙って百回死ね！」

剣を諦めて手を離してから転移を多用してリンの攻撃を勇者は回避する。

「なんで邪魔をするんだ！『炎よ、敵を倒せ』！」

『魔操装爪創造劇』『魔法よ我が糧となれ』！」

勇者が放った大型の炎の弾をリンは爪に纏わせ、赤と青を混ぜた色、紫色の炎を爪に纏わせ勇者に振るう。

「なに!?どうなっているんだ！『氷よ我が剣となって現れろ』！」

氷の剣を二本、二刀流でリンを攻撃する。

炎を纏う爪と氷の剣が鏝迫り合い勇者がだんだんと押していく。

攻撃力とは基本的に重さ×速さ

速さはリンの方が勝るものの勇者の剣は重さと遠心力という点において圧倒的に勝っている。

「ううう…『凶爪極…太古版』」

…うあああああ!!!」

リンの爪から炎が消え、代わりに『闇』や『死』、どう表現したらいいのか分からない不気味で不吉な瘴気を纏い正気を半ば失ったリンが襲いかかる。

「死ね死ね死ね！お前が！お前みたいのが！お前みたいなのがいたか

ら！パパが！ママが！リョウが！」

「さつきからっ、なんの事だかつ、分からないっ、なあ！ウグツ…」
「わかんない!?ふざけるな！ふざけるなふざけるなふざけるな!!謝っ
ても許さない殺しても許さない死んでも許さない！ここで殺してあ
の世で殺してその先でさらに殺してやる！」

「意味が分からないなあ！俺が！お前に何をしたって言うんだ！」

リンの攻撃を剣でいなし、転移で躲し、バックステップで躲す。

「あああああああああああああああ!!!」

「邪魔を、するなあ！『柔しき防壁をここに』！」

リンの攻撃を転がるように回避し、地面に魔法陣を展開する。

すると地面のカーペットが盛りあがり、リンの攻撃を防ぐようにそ
そり立つ。

リンはお構いなく壁を砕こうとするも砕けず、その柔らかい壁に爪
が突き刺さってしまう。

「う、ううう、はあ、はあ、

んっ、抜けない?…『変化 九尾』」

「ちよつとそれは危ない！」

完全に攻撃を防がれて正気を取り戻したリンは妖狐の上位個体、九
尾の狐に変化する。

マーフィーはそれを見てリンに近づこうとするも超高濃度の魔力
にリンが包まれて近づけずにいる。

「…『魔装 狐火』」

リンは九本に増えた尻尾の先に青い炎を灯し、その尾で目の前の爪
の刺さった壁を容易く砕く。

「…ぶっ殺す♡」

「なんだよ…それ…」

第14話

「……どういう状況？」

食堂からドヌーヴに転移してもらって視界に入るのは焼け砕けた床と壁、氷で出来た剣を二本構えるクズ勇者、そして九本の尻尾を生やして小柄な身体がより小さく見えるようになったリンちゃんだった。

そこから離れた位置にリリアちゃんとマフィさんも居たので二人に聞く。

「えっと、あれが来てリンちゃんがブチ切れてとち狂って何やかんやで今に至る、かな」

「ありがとリリアちゃん。…マフィさんどしたの？」

マフィーは青ざめながら慌てている。

「リンちゃんのアレ、かなりヤバいの」

「もうちょい具体的に」

「ほっとくと勇者に勝てるだろうけどリンちゃんの魔力が文字通り空になっちゃおう…かもしれない」

「最悪どうなる？」

「死ぬ。良くて苦しまずに即死、最悪苦しんだ後だんだん粉末状になる」

「めっちゃマズいじゃん!?止めないとー」でも、リンちゃんの魔力が濃すぎて近づけない」……。あっ！私なら行けるじゃん！」

「きー、リンちゃんを助けてあげて」

「ん、任せて。『対魔力 敏捷 MAX』」

私は必要なものを揃え拳を振るう。

…勇者に。

「ウグアッ!?!」

「殺ったか!?!」

「それ、フラグ」

マフィさんとリリアちゃんにつっこまれた。解せぬ。

…あれ、リンちゃんはつっこんでくれない？

「ちよつと魔王さまあ、邪魔しないで欲しいかなあ？」

「リンちゃんに邪魔って言われた!?!」

「気のせい気のせい♪」

リンちゃんは青々と燃え盛る尾を勇者に振るう。

両親に特技を披露するように、友人に手品を披露するように、嬉嬉として攻撃する。

…これ、サポートの方が良さそうかな？魔法は苦手というか、使うより使われない方なんけど。

『魔法 5000』『魔力付与へリン＜10%』

リンに希依の魔力の10%付与する魔法を即席で作り、発動する。

「よくわかんないけどお、これはあれだね、力が湧いてきた!『始まりの炎、終焉の炎、つべこべ言わずに手伝いたまえ!』」

「ちよつ、リンちゃん!?!」

リンちゃんは恐らくオリジナルであろう魔法(琴音もラストさんもあんな雑な詠唱教えないと思う)を発動し、さらに火力を上げた尾と爪で勇者に絶え間なき連撃を振るい続ける。

…数分後。

「…ごめんなさい」

「いや、私はまったく怒ってないよ…むしろあれをぬつ殺してくれて

ラッキーって感じかな」

途中で勇者が絶命した事にリンは気づき完全に正気に戻ると真っ先に希依の前に駆けてきていかにも申し訳なさそうに、今にも泣きだしそうな様子で謝った。

九本の尻尾は無くなるなんてことは無く、リンのテンションに合わせてなのかへんによりと床に伏せていた。

「でもでもっ、お城めちやくちやにしちやったし。人、殺しちやったし。…あとあと、ダメって言われてたのに九尾つかちやったし、「リンちゃん」魔王様のこと邪魔って、言っちゃったし「リンちゃん！」っ！…?」

私に対して懺悔を始めたリンちゃんを私は止めた。

「お城はいいよ。…私もたまに壊すし。」

九尾は仕方ないよ。どれだけ危険でも、それはリンちゃんの手でリンちゃんのものだもん。

私に邪魔って言ったのも許す。謝ってくれたからね。

殺したのは…そうだね、後で一緒に謝りに行こっか。リンちゃんのお父さんとお母さんに、ね？」

「…うん。」

「でもリンちゃん」

「…?」

「許すけど、邪魔って言われて傷ついた私を癒して」

「えっ…ええ?ええ!」

私はリンちゃんを押し倒すように抱き締める。

…あ、いい匂い

「おねーちゃん、浮気?」

「…違うの。これはリンちゃんを愛でてるだけ」

私はリンちゃんを押し倒し、マフィさん達は片付けのためにクラークを呼びに行った頃に琴音達が降りてきた。

「浮気する人は皆そういうんだよ?…私も混ぜて」

「んみゃー!?!」

琴音はリンちゃんの尻尾の山に飛び込んだ。

「こいつら・やはり・変態か・それともラストよ・今どきの女子は・皆これか?」

「いえ、希依様と琴音様が特殊でございます。変態かどうかは分かりませんが。…エリー様、混ざってきたらいかがですか?」

「うん!」

「あ・おい!」

「うにゃ♡…うにゅ!?!」

小柄の更に上を行く小型なエリーはリンの頭部、もっふもふの狐耳に飛びかかる。

「女三人寄れば姦しいとはいいますが四人ともなると…」

「気色悪い・だろ」

「むしろ微笑ましい、ではありませんか?」

「ラスト・やはり貴様とは・気が合わんな」

「何を今更。魔王一のボツチを誇る貴方と気が合う方などそうそういけませんよ」

「黙れ。さもなくば・黙らずぞ」

「こわいこわい(棒)」

「どー言う状況だよこれ」

女の子四人が九尾の妖狐に引っ付き、その光景をメイドとダサイ青年が険悪な雰囲気で眺めていた。

そこに『ねもい』と日本語で書かれたTシャツにジーパンの色黒美形、釣竿とバケツをもったクラークがりんご飴に苦闘しているリリア、わたあめを頬張るマーフィーを引き連れてやってきた。

「む・クラークか」

「…おおドヌじゃねえか。相変わらず服装だせーな」

「今の貴様・だけには・言われたくない!」

「オマケに喋り方までだせえじゃねえか!クツハハハ」

「お義父さん、あれ誰?」

「ん？ああ、リリはあつたことないんだっけか。あいつは九代目魔王でボツチでロリコンのドヌーヴだ。近寄るなよ」

「人聞きの！・悪いことを・言うな！」

「大体あつてるだろーが！」

「ロリコンを悪いことみたいに言うな！」

「うおっ!?!いきなり何しやがる希依！」

希依がクラークに殴りかかるが躲されてしまう。

「ロリコンに悪人はいない！…あんまり」

「いや、自信なくすなよ」

「そういえばリリアちゃんとマフィさん、なんでそんなTheeお祭り、なものを食べてるの？今日なんかあつたっけ？あとそのバケツ何？」

「知らんのか？今日勇者が倒されたからその祭りだ。『勇者討伐記念祭』」

このバケツはな、さっきまで釣りしてたんだよ。ラスト、後で天ぷらにでもしてくれ」

「了解です！下ごしらえだけ先にしてきますね」

そう言つてラストはクラークからバケツを受け取つて厨房に向かう。

「…いや情報早くない!?!」

「ツツコミ遅くないか!?!」

「リンちゃん、クラークがいじめる」

そう言いながら希依はリンのもとへ戻っていく。

「…いや、先に片付けろよ」

その後、結局クラークが一人でほとんどの瓦礫の片付けをし、最後にドヌーヴが内装を元通りにしましたとき。

第15話

「なんだよこのおつかない面子は。あと琴音はどーした？」

時刻は昼頃、場所は食堂。

今ここには魔王の希依、旧魔王のクラーク、ドヌーヴ、愛子。そして理解者のマーフィ、希依の膝の上に乗せられたリン、クラークの膝の上に乗せられたリリア、リンの狐耳を堪能するエリー。計八名が集っていた。

今いないのは天ぷらを作っているラストといつの間にか居なくなっていた琴音である。

「あつはー。まあまあクラ坊や、落ち着いてこのオムレツでも食べなよ」

「やだよ！つかなんでここに居るんだよクソババア！ついでにそのオムレツの原材料言ってみろやー！」

「誰がクソババアだ、ああん!?友達の家遊びに来て悪いかこらあ！そこに落ちてたドアノブだよ！ケツ！」

「落ちてるもんで食いモン作ってんじゃねえよ！汚えだろうが！」

「「そこ!?!」」

「パパ、愛子さん、五月蠅い黙れ。」

リリ、こつちおいで」

「「……はい。」「はーい」

だんだんとヒートアップしていく愛子とクラークをマーフィが止め、クラークの大声をゼロ距離で喰らって耳を塞いでいたりリアを抱き抱えて頭と耳を優しく撫でる。

「…もしかしてこの場での最強ってマーフィさん？」

「…そんなことない。私でも希依さんと殴りあったら勝てない」

「いや、マーフィさんの毒舌に勝てる気がしない」

「ほら、私って覚の子だから。」

琴音ちゃんはどうしたの？」

雑談に花が咲きそうになるのを察したマーフィは流れを無理やりに変える。

「あ、私も気になる！」とエリー

「今代の理解者・何をしている？」とドヌーヴ。

「……」未だ回復仕切れてない妖怪魔王コンビは落ち込みながらも耳を傾ける。

「琴様なら魔法陣でどつかに飛んでつちやつてたよ？」真相をある程度知っていいそうなことを言うリン。

「琴音ね、我慢出来なかったみたい」

「…ねえ希依ちゃん、どういう事なのかな？」

ある程度復活した愛子が希依に問う。

「ん、私が自分で言うのはなんかアレなだけだし、琴音の優先順位って私が一番なんだよ。

で、リンちゃんの件と違って私を直接狙いに来た勇者とそれをけしかけたモーゼスを許せなかったみたい」

「これだから・変態は」

「おいおいドヌ、お前だって傍から見たら十分変質的だぜ？ダサイ服着てエリー抱き抱えてるとか」

「黙れ子煩悩・いい加減子離れしろ」

「パパ、ドヌーヴさん、ちよつと黙って。除草剤かけるよ？」

「なんでだ!?!」

「そんなことより希依さん、琴音ちゃんは大丈夫なの？」

「ん、大丈夫だと思う。ケンカなら私よりも琴音の方が強いんだよ？」

「おいおい、さすがにそれはねえだろ。いくら理解者つたつてステータスは亜人種LvMAX程度だろう？そんなケンカ慣れしてるようにも見えねえし」

「いや、そんなことないよ。間違いなく、この場にいる誰よりも、血気盛んだし手が早い。速いじゃなくて、早い」

「琴様、そんな風には見えなかったけど…」

「琴音は小さい頃から殴られたり殴ったり殴られたり殴られたりしながら育ったらしいからね。私と出会う前日なんて両親に熱湯をぶつ掛けたって言ってたくらいだし」

「私はその琴音って子、ほとんど知らないんだけどさあ。希依ちゃん
が考えるに、人類側の被害はどのくらいになりそうなの？」

愛子の問いに希依は少し考えた後に答えた。

「…良くてモーゼス消失。最悪だとヘルムート外の全生物が絶滅して
今後一切草一つ生えない土地の出来上がり」

「…おいドヌ、お前の魔法で人類絶滅させることは可能か？」

「不可能ではない・が・面倒だ。」

そんなことをするより・人類がいない世界に・転移したほうが・格
段に楽だ」

「おいおい希依よ、ほんとに人類滅んじゃまうのか？止めらんねえのか
？一応ダチとか居るんだが」

「あつはつは、それは残念だったね。無理無理。だって琴音、作っ
ちやっただもん」

「「？」」

その場の全員の疑問に希依は驚愕の答えを返す。

「魔王一の魔法使いであるドヌーヴさんが諦めた魔法、『無限シリ
ーズ』」

「なんだと!?!・あれは・どんな手を使っても・何処かしらに・バグが発
生するはずだ」

「きー、それどんな魔法なの？」

ずっと静かに悶えながら話を聞いていたリリアが希依とドヌーヴ
に問いかける。

「無限シリーズ・魔王のステータスであるMAX・のさらに上である・
∞まで上昇させる・身体強化系魔法の究極系」

「琴音のあれはまだ調整は出来ないけど大規模殲滅なら問題なく誰よ
りも出来る」

「マジで滅ぶじゃねえか。しかも俺らでも止められなさそうだし」
「だよねえ。…ちよつと様子見てくっ!?!——」

リンを降ろしてから希依が立ち上がろうとすると地面が軽く揺れ
る。

急いで窓に駆け寄り発生源に目を向けると、そこには魔法陣で構成

された大型魔法陣で構成された超大型魔法陣とそこから降り注ぐ赤熱した岩石がモーゼスを破壊していた。

「あ、思ったより酷くないかも？」

「おい希依、さっさと行ってきたらどうだ？」

「ん、そーする。」

ラストさん、マフィさん、ヘルムート全域を全力で警戒と防衛。魔王共は何かあったらどうにかして。リンちゃん、リリアちゃんはここでじっとしててね」

希依の心情を読んだクラークに促された希依は簡単な指示をだし、窓から飛び立つ。

希依が琴音の元へと辿り着き、まず目につくのは嫌でも視界に入るひたすら増え続ける魔法陣。そしてそれを構成する呪文を詠唱する琴音。

『永久不変壊滅崩壊寸前後悔塗装料理紅魔研磨具工小刀納屋倒壊因果
黒風白雨豪華絢爛荒唐無稽国士無双摩訶不思議粗粗非理法権天聖痕
比叡山菩提樹神通力天照大御神天沼矛逢魔時天孫降臨天地開闢八尺
瓊勾玉蠱毒頓珍漢出鱈目桃源郷猪口才紙一重絵空事天邪鬼十六夜晩
餐飛翔暴虐復習震源熾烈深淵贖罪至高地獄慈愛懺悔砂塵俗世間太平
樂手弱女走馬灯千里眼粉骨碎身不俱戴天受胎告知釈迦如来熾天使阿
闍梨餅黄泉比良坂殺生石異端審問徒手空拳二率配信脳要因装百花繚
乱天涯孤独天真爛漫独立独歩莊嚴華麗魑魅魍魎單離各種心象風景醉
眼朦朧生殺与奪清廉潔白疾風迅雷自己犠牲金剛不壞三千世界惡逆非
道一網打尽一騎当千翼廊黄泉個墓玲瓏宵闇薄氷奈落鶴殿流行語大賞
入賞目論見益荒男不夜城頓珍漢合法幼女戦記物語宿屋棹佳奈壙麻也
薬戸浦銅鑼鷲三納麻紗花渚弥乃破魔鱈鮪？鯖寿司脆羅笑侃爾釈迦如
来？蛸威嗽媳×夙火屋洞刀凶撮採綴×尾曾失費失敗可名哉蒼空紗蘭
砂羅那問彌霸王配信流出画像揭示板炎上商法典魔法陣転課全国大会
出場機会放棄怒号首輪犬猫猿比古惑星連邦議会選挙区桃太郎左衛門

金賞品質問者浦島太郎状態坂田金時豆知識人工知能素羅腐乱魚棚糞
儀武市手井伊歌菜駄目蚊文字数稼鬱陶陳々満面天使悪魔魔王共臘虎
邪魔者達虫歯発生源消滅都市剛力羅魔胃電電公社唐渡謙同棲生活保
護観察日記帳三人画像揭示板炎上商法典魔法陣転課全国大会出場機
会放棄怒号首輪犬同伴予定奴隷信仰告白実行委員会会長兼魔王愛好
家族議員連盟会長我々一同心象風景東映京都撮影所杣様砂多等籬羅
☒??蘿☒?☒??沭?☒☒亜婭翹両?抖宛?存句明唾痾猗射!!』
「長いわー!」

琴音が発動したある魔法陣は地面から溶岩が吹き出し、溢れ、立ち
上り、雲を超える巨大な火山を生み出す。またある魔方陣からは火山
に毒液を染み込ませ、またある魔方陣は火山周辺の地面から人間や動
物、魔物の下半身を生やす。垂れ流れる溶岩はゴーレムとなり火山を
登り、花を植える。

これら以外にも様々な異常現象が火山を中心に巻き起こり、元々
モーゼスだった一帯はゴーレムや肉体の一部分だけで活動する生物
?が暮らし、剣や鳥居が生え、木々が平然と歩き、謎のスライム状の
液体が降り注ぐ魔境へと変貌を遂げた。

到底人間が暮らせる場所ではない。

「うぷっ、気持ちわる…」

「あつ、琴音大丈夫!」

「……おねー、ちゃ?……ごめ、連れてっ、て——」

森の遥か上空からの光景を見て気分を悪くした琴音は気を失い、浮
遊魔法を放棄して落ちそうになるも希依が抱きとめる。

「はあ。頑張りすぎだよ、琴音」

私がやりたかった事を先に片付けてくれやがった最愛の女の子を
決して離さないように抱きしめ、私は私の国^家に帰る。

第16話

「うん！やっぱり狐口リツ娘には巫女服だよね！リンちゃんかわいい！」

「リンちゃんリンちゃん！次はメイド服なんかがでしよう！私のは少し大きいですが…いえ、それもきつとあります！」

…今は私が琴音の元に飛んで約2時間後。ゆつくり帰る途中には琴音は目を覚ましヘルムートの城下町でお祭りデートを軽くしてから城に戻って最初にしたのはリンちゃんのコスプレショーだった。

いや、分かるよ？元々可愛かったリンちゃんが九尾の狐に進化してより可愛くなったのは分かるんだよ？でもなんで巫女服なんて持ってるのさ。しかもサイズぴったりで尻尾を出す穴もあるやつ。

そしてラストさんや、あんたこの中でぶつちぎりの年長者でしょうが！いや、でも私も袖余りメイド服のリンちゃんは見たいかも。

「という訳でリンちゃん、メイド服も着て？」

「ふええ、まお様までえ…」

「リリアちゃんでもいい…なんでもう着てるの？」

リンちゃんがげんなりしてるからもう1人のロリかわ枠、アルビノの猫の獣人のリリアちゃんに着てもらおうかと思ったら既に来ていてマフィさんの膝の上だった。

「…きー、私、可愛い？」

「ちよー可愛い。妹に欲しい感じだね」

「おい待てこら！リリは俺の娘だ！」

「おねーちゃん！妹は私だけだよ！」

「リリアは私の。誰にもあげないから」

「…まお様、私は？私は？」

「リンちゃんは妹ってよりかは娘、かな？」

「リンちゃん、私のことママって呼んでくれてもいいんですよ？」

うーんカオス。

耐えきれなかったドヌーヴはエリーちゃんを連れてヘルムートに

住む知り合いに会いに行つたのでこの場にいない。そしてラストさん、あなたはママってよりかは御先祖様当たりじゃないかな。よくて親戚のお姉さん？

「…ま、ママ？」

「——クハッ」

「リンちゃんリンちゃん！次は私のことコトねえって呼んで？」

「琴様まで!?!…えと、コトねえ？」

「うひゃっー！リンちゃん可愛すぎ！」

「ねえリンちゃん」

「はい？」

「——ゴニヨゴニヨゴニヨニヨ」

「ふえっ!?!…えと、クラーク、おじさん？」

「くっ、おい希依！一瞬ありだと思つちまつたじゃねえか！」

「…いやパパ、それはちよつと」

「おーい、おやつのかきだよー…何この状況？」

カオスな空間にいつの間にかいなかった愛子さんがチョコケーキを2ホール両手に持つて戻ってきた。

いや、それ卵料理ってことでいいの？

「なんだい？希依ちゃん、食べないの？」

「食べる…ちよつと待って、材料何？」

「やだなあ、リンちゃんとリリアちゃんも食べるんだから普通の材料だけに決まってるじゃない」

「ならいいけど。みんなー、一旦休憩にしておやつにしよー！」

「遊んでただけな気が…」

「パパ、しっ」

ここから先は結局カオスを抜け出せずに神や民、幽霊なんかも招いて飲めや食えや喰らえやオラアン！のどんちゃん騒ぎ。

第17話

どんちゃん騒ぎの翌日。遊びに来たステラちゃんとリンちゃんママは向こうに帰り、国中のお祭りムードは夜明けとともに消え去って行った。

これで元通り、かと思いきや新たなる来訪者がやってきたのである。

「だからどういうことなの!?! 召喚? したのは私でしょうが! なんて召喚を行ったはずの私がどこかも分からない国に召喚されてるのよ!」

彼女は服装から察するにシスター、そして琴音が言うには新たなる勇者。名前はまだ聞けていない。

「ああもうるっさいなあ。今私は寝起きで機嫌も気分も最悪だったのに。で、だれなの? 喧嘩ならさっさと始めてちょうだい」

「なんで喧嘩っ早いなのよ。私はジュリエット・アリエル。れっきとしたシスターよ」

「それで? なに、勇者なの?」

「そうみたいよ。すてーたす? とやらにそう書いてたわ。いいからさっさと帰してちょうだい」

「いや、それがそう簡単には行かないんだよ。えと、ジュリエツ：長いからジュリちゃんね。今回の件はジュリちゃんが召喚しようとして出来た不完全なゲートとこっちでおねーちゃんの奇跡的な寝相が生み出したゲートがたまたま繋がって召喚出来たの。」

つまり、貴女を帰すにはジュリちゃんが居た世界とかこっちの同時にゲートを開く必要があるの。分かった?」

「で、結局帰れるの?」

「あんた話聞いてたの?」

「しょ、しょうがないじゃない。長い話は苦手なのよ」

「琴音、どうなの?」

「いま私説明したよね? 帰れないよ」

「琴音の理解者で分かんないの?」

「残念、基本的にこの世界と私たちが元いた世界にしか通用しないよ」
「…私、これからどうしたらいいの？」

ジュリエットは何もかもに絶望したように打ちひしがれる。

「まあ、とりあえず人間の国に連れて行ってもいいんだけど…」

「人間の国？…ここは違うの？あと、ここじゃダメなの？」

希依の言葉に疑問を持ったジュリエットは希依に問う。

「ここは主に魔族や魔物の住まう国、魔国ヘルムート。普通の人間なんて両手があれば数え切れる程度しか住んでない」

「魔族、ですって？まさか貴女も！」

「残念、私は魔王様。つまり人間からしたら私は天敵ってわけ」

「そう。…つまり、敵ってことね！『聖拳』！」

ジュリエットは右手に光を灯しながら希依に振るう。

「は？」

『左腕変形 機械仕掛け』…魔王様に、何をされているのですか？」

何処からか飛び出してきたラストが左腕をパイプや配線、球体関節に変形させて握り拳を受け止める。

「なっ、自動人形オートマトンごときが！離さないよ！」

「攻撃なさらないのでしたら構わないのですが。…申し遅れました、私は自動人形オートマトン 最終人形ラストドール。この城のメイドでございます」

「私には、私がいた所の勇者にはね、魔王を倒す使命があるの。こんな所で諦めてなんかいられない！『聖蹴』！」

ジュリエットはラストを蹴り離す。

「このっ、」

「いいよ、ラストさん。私が直々にこの世界の魔王というものを叩きつけてあげる。魔法もいい加減使ってみたいしね」

「…かしこまりました。お気をつけて」

「女の子だからって、手加減して貰えるとも思ったら大間違いだからね」

「可愛くても勇者だからね、加減全カして戦ってあげるよ」

『『聖光撃』！』

「わおっ、ビームかな？『えと、求めるは防壁、もたらすは不変、生み出すは鉄壁』！」

ジュリエットの放つ光線はキ希依の雑な詠唱で生み出された壁によって完璧に防がれる。

「今更だけどほんとに聖職者？」

「ほっときなさい！はあ！たあつ、らあ！」

ジュリエットは両手両足に光を灯しながら希依にラツシュをかける。

「今は近接戦闘の気分じゃないつてのに、『敏捷、筋力それなりに強め、破壊力皆無』」

ジュリエットや城に無駄なダメージを与えないように全攻撃をいなす。

「いいかげんに——『ノックバック鬼神並』吹っ飛ば！」ちよっ

希依の裏拳がジュリエットを、先程生み出した壁に上半身が貫通するようにぶっ飛ばす。

『創り出すは最強の剣、出来ることは万物切断、：使うことはきつと無い』

ほら、さっさと負けを認めて」

希依は魔法でシンプルな見た目の剣を創り、ジュリエットの眉間に突きつける。

「くっ、こんな所で諦めるわけにはいかないっ」

「てか、そもそもなんでそんなマジになって魔王を殺そうとしてる訳？」

「魔王は最悪の天災で人類の敵、殺さなきゃ、人類は滅んでしまう！だから、殺さなきゃいけない！」

「そんなどこの世界かも分からないような所の都合を持ってこられてもねえ」

「うるさいー！」

ジュリエットは壁を思いっきり殴るとまるで砂のように粉々に砕け散る。

「キャッ!？」

「琴音！今！」

「おつけえ！『転移行先孤児院』！」

希依の合図に琴音は自作の転移魔法を発動し、ヘルムートの孤児院に飛ばす。

「はっ?!何処(どこ)?!」

場所は希依の我儘によって出来た、虐待を受ける等してきた哀れな子供たちの住まう孤児院。そこに希依と琴音、ジュリエットは転移してきた。まだ朝早いので誰も起きてきてはいない。

「ちよっ、なんのつもり?!」

「ここは私の代で出来た孤児院！今日からここで働いてね！じゃー！」

「おねーちゃんのごことはここにいる子達に聞けばどういう人かわかるからよろしくね」

「ちよっ、ええ?!」

「じゃ、任せたからね！」

『転移私愛人行先魔王城』またね、ジュリちゃん！」

「はあ?!…つてもういないし、何をさせたいのよう」

「おねーちゃん、あれでよかったの?」

「だって仮にも聖職者でしょ?あの子達を見捨てられるような子には見えなかったし」

「勇者拗らせて子供達を皆殺しとかしなきゃいいけど」

「…まあ、天使と人間のハーフの子とかもいるし平気ですよ」

「そういえば聞いた?あの龍の血を輸血されちゃったメイちゃん、羽根生やして飛べるようになったらしいよ」

「えっ、マジで？私もしてみよっかな」

「いや、大抵死ぬからね？メイちゃんは奇跡的に生き残っただけなんだから」

「うえー、…他には？なんかめでたいニュースないの？」

「めでたい、ね…ああ、あの悪魔の子のロイクくん、お母さんがたまたま発見されて今は親子二人で暮らしてるみたい」

「へー。他には？」

「あれ、今のはあんまりだった？」

「確かにめでたいけど、なんというか、厨二心をくすぐられるようなのが欲しい」

「んー、あ、あの右半身がダイヤモンドになってた子なんだけどさあ、ダイヤモンドの部位をコントロールして戦闘に使えるようになってしまったんだったって」

「なんか私の『究極の加減』にちよつと似てるね」

「そういえばあれ、おねーちゃんの『加減^全して戦^力ってあげる』ってやつ、あれなに？決めゼリフ的な？」

「的な。どうだった？」

「いやまあ、いいんじゃない？他の人と被ったりしてないと思うしちやんと技能を使って戦ってあげますよ的な感じが読んてる人には分かるよね。」

直に言われた人は煽ってるようにしか聞こえないだろうけど」

「琴音はなんかないの？決めゼリフ的なやつ」

「ないよ。そもそもガチバトルするタイプじゃないし」

「じゃあ私が考えてしんぜよう」

「いや、いらなから」

「えっと、理解者だから…『理解者の魔法劇、あなたは理解できるかしら』…ごっつよっ」

「いや、無いわ。キャラじゃないし」

第18話

「魔王様、お仕事の時間です」

その一言で、私の脳は一気に現実まで引き返された。

…時刻は12時頃。

「ラストさん、明日じゃだめ？私、今日三時間しか寝てないみたいなんだけど」

「三個のうち二つはそれで構いませんが、一件はすぐにでも向かってもらいます」

「ええ〜。…どこよう？」

「学校です。七代目魔王、熱々おでん様から希依様とリンちゃんがお呼び出しされています」

「やだ、行きたくない」

「はあ、

そう言つて断つて何ヶ月目ですか？そんなことしていると、次元規模の喧嘩になつて諸共消し飛びますよ？」

行きたくない理由なんて、当然である。なんせ私は学校という設備にいい思いが全くと言つていいほどない。

琴音との出会い？それ学校外の話だから。

「だって、学校つてあれでしょ？生徒を教師が思うがままに、やりたいようにステ振りと性格設定する洗脳設備でしょ？」

やだよ。しかもリンちゃんを連れてこいなんて、なに？そのおでんはロリコンなの？それともケモノナー？どっちでもいいけどそんな危険区域にリンちゃんを連れていきたくないし私も行きたくない」

「いやまあ、確かにあながち間違いではないのですが、熱々おでん様は歴代の魔王様方の中では比較的人間的な方ですよ？」

それと、今回来なかつた場合、勇者を引き込んだことを人間にバラスと言われています」

「ええ…」

もう、分かつた分かつた、行くよ。

着替えるから部屋から出てちょうだい」

「あ、お手伝いしますよ?。」

「もう一生あんな十二単みたいなドレス着ないから。」

「パーカーにジーンズだから手伝いもいらない!」

私の言葉にラストさんはあきれ返ったような表情をする。

「魔王様がそのような格好では威厳がありませんよ!」

「私、威厳とかカリスマとかは見えた目よりも態度と行動で示すタイプだから!」

「ま、まあそんなこと言わずに、ゴスロリなんて可愛らしくて良いではありませんか?。」

「ゴスロリに威厳なんて微塵もなくていい?あと多分私には似合わないし!」

「ではスーツなんていかがでしょう!」

「私、正装アレルギーだから!」

「魔王様、それは社会不適合者というものなのでは?。」

「それ言ったの琴音でしょ?違うから。社会が間違ってるのであって私は何も悪くないから!」

「それでも正装はマナーです!」

「ここでは私がマナー。スーツや制服を着るやつは全員髪の毛と眉毛を入れ替える刑に処す!」

「地味にえげつない刑を思いつきましたね。あ、私のメイド服はあくまでコスプレなので正装ではありませんからね?。」

「うん、それは知ってる。たまにナスさんとか婦警さんのコスプレとかしてるしね。」

あ、最近リンちゃんが巫女服を着るようになったのはラストさんのせい?。」

「ええ。私が布地から作り上げた自慢の逸品です!」

「あれを見て私思ったことがあるんだよね!」

「...?なんででしょう!」

「つるぺたストーンな幼女には露出度が少ない巫女服の方がいいと思うんだよね。」

あと、脇丸出しとかありきたりすぎる!」

「そ、そうだったのですか!?!…近いうちに作り直しておきます」
「でも、あえて紅白じゃなくて白黒にしたのは正解だと思う。リンちゃんの金髪が映えていい感じ」

「ですよね! 私もいざ完成して来てもらった時には私のセンスをつい褒め讃えてしまう程でした!」

「うん、それはちよつと気持ち悪いかな?」

「うう、魔王様も巫女服いかがですか? 白黒以外にも青白とかもありますよ?」

「それ完全にバイトじゃん。神社で巫女さんのアルバイトするJ Dじゃん。年齢的にも見た目的にも」

「いえ、身長的にどちらかと言うと職業体験じゃないですか?」

「まあ、低身長は自覚してるけども」

「まあ、そう——つてあ! 魔王様、そろそろお時間です! 急いで着替えてください!」

「はいはい。…そう言えばリンちゃんにはもう伝えてあるの?」

「はい。魔王様が寝てる間に」

「悪かったね、生活リズムがズタボロで」

着替えを終えた私はリンちゃんを連れて魔族地区にある『人外戦教
育学園』、通称学校に二人で向かった。

昼過ぎなので生徒達は授業か昼休みか、のはずなのだが校門に子供
が一人立っていた。

「…なにやってんの? サボリ?」

「ま、魔王様? この人があの熱々おでん様だよ?」

少年の容姿は青髪糸目にシンプル柄の着物。

「よう、あんさんらが魔王とその子供で間違いないな? まあ、ついてき
んさい。お茶くらいは出したる」

おでんは胡散臭い口調で、有無を言わずに校舎へと歩き出す。

場所はこの学校の校長室。

棚や窓際には無数のガラス細工のようなフィギュア？が全て部屋の中心を見つめている。

「…その口調デフォ？見た目と合っていないからやめた方がいいよ？」

「はっ、そっちこそ、なんやその服装？舐めとんのか？おどれ」

「あんたこそ、そのバカみたいに雑な名前なんなの？ちゃんと親から愛されてた？」

「知らんがな。まあ、…名前のせいで苦労したとだけは、言っておく」
「そ。」

要件はなんなの？今すつごい眠いからさっさと帰って寝たいんだけど」

「ああ、そうやったそうやった。」

おい、リンとやら、おどれ、学校に通う気は無いか？」

「はい？…えっと、なんでですか？」

「聞いたところによるとおどれ、城に住んで鍛えてるんやろ？それじゃあ友達とか、親友とか、ライバルとか出来ひんとちやうんか？ずっと一人なんとちやうんか？」

「友達とかって学校に行けばできるの？私は十年弱通って、出来たことないけど」

おでんの言い分に、私は口を挟まずには居られなかった。

「一人じゃ、ないです。琴様とかラスト様とかが教えてくれるし、魔王様とかリリアちゃんと一緒に遊んだりもするから。だから、私には学校に行く必要は無いかな、って」

「そもそもなんでリンちゃんを学校に通わせようなんて言い出したの？仕事が増えるだけでしょ」

「別に大したことじゃあらへん。この国の子供は8〜9歳頃になると学校に通うのがここ数百年で普通になってきとる。リンもその一人ってだけのことよ」

「ふーん。さ、リンちゃん帰るよ」

「あ、はい」

私達が帰ろうとするとおでんは私達を引き止める。

「まだ帰るなつての。おい、現魔王、おどれに頼みたいことがある」

「…一応聞いてくよ。なに？」

「学校の生徒達に一度講演会をしてもらいたい」

「はあ？」

「魔王が新しくなって数年は魔王になりてえ、つう物好きながキが増えんだ。そこで、おどれが、どうしたら魔王になれるのかとか、魔王とはなにかとか、色々話してもらおうっちゅーわけや」

「わけや、とか言われてもねえ。あんたがやればいいじゃん」

「おどれ、十年だか学校に通ってたんなら知つとんのやろ？『校長の長話と昔語り』」

「……？」

「あぁ、なるほどね」

リンちゃんはわからない様子だが私はかなり経験がある。なにせよく校長室と職員室には呼び出されてたからね。

「つてわけで、やってくれんか？」

「やだ。めんどい」

「ガキか、おどれは」

「あんたと比べたら赤ん坊どころか末裔とか来世とかそのレベルで歳下だわ」

「ちっ」

わっーたよ。ほら、もう帰ってえーぞ」

「うーい。」

んじや、もう呼ばないでね？えっと、冷凍パスタくん？」

「熱々おでんだ！」

「あ、あははは…」

帰りの道中

「あ、魔王様

私、ドーナツが食べたいです」

「お、いいねえ。私あれ、コロコロモチモチしたやつが食べたい」
「なんですか？それ」

「いや、名前出しているのかよくわかんないし」

「でしたら私はふんわりサクサクしたやつがいいです」

「大体のドーナツはそうじゃない？」

「あっ」

「みんなのおやつと私の朝ごはんにどら焼きでも買いに行こっか」

「はい！…あれ？どら焼きですか？」

「嫌ならたい焼きでもいいけど」

「別にいいですけど。…魔王様、たまにいじわるです」

「あはは、これはあれだよ。好きな子にイタズラしたくなるってやつ」

「…琴様に浮気してるって言っちゃいますよ？」

「別にしてないもん。確かにリンちゃんには親愛とか友愛とか幼女愛

とかはあるけど恋愛は琴音だけだから。

だから、浮気じゃないもん」

「浮気してる人はみんなそう言うんです」

「少なくとも私は聞いたことないかな」

「パパが言っていました」

「…ちなみにそれを言われたお母さんは？」

「包丁を研ぎ始めました。」

あの時は怒った魔王様よりも怖かったです」

「…私ってそんなに怒ると怖いってタイプじゃないと思うんだけど」

「無意識に殺気とか威圧感とかを増加させてるんじゃないですか？」

「なるほど、そりゃ怖いわ。」

あれ、それより怖いリンちゃんのお母さんって何者？」

「さ、さあ？」

「もしかしてあのクソ勇者、意外と強かった？」

「勇者の戦闘能力は魔族の平均とほぼ同等だと言われてますから、並

の勇者よりは強かったんじゃないですか？」

「ふーん。…なんで人間の国はそんな勇者に頼りつきりなんだろ。5

0人とか100人とかで攻めてくれば勇者よりもダメージデカいで

しょうに」

「まあ、魔族に傷を付けられる人間は希少ですから。」

あ、おじさん！ドーナツコンプリートセットDXを三箱ください」
「はいよー！DX三箱！」

いつの間にかお店に着いていたようでリンちゃんが凄いでかいのを三箱注文する。

ちなみにドーナツコンプリートセットDXは全種類のドーナツを10個ずつ入ったセットでダンボールに入れて渡される。

「なるほどねえ。」

ちよ、そんなの買って食べ切れるの？」

「お城のみんなで食べるんです！」

「にしても多くない？ただでさえ少食が多いうえにドヌーヴとエリーちゃん帰っちゃったんだから」

「…二箱は孤児院に持っていきましようか」

「それだとちよつと足りないかもね。すいませーん！DX追加で二個お願いしまーす！」

「はいよー！」

「つてことがあつたんだよ」

「長い！そしてそのバカでかい肉塊は何!?!」

「ああ、これはクツクちゃんのおやつで金色豚の肉塊」

場所は孤児院。子供達にドーナツ、クツクちゃんには肉塊をあげに来たら一応勇者で今は孤児院で世話をしてくれるジュリエットに絡まれてる。

「そういうのはせめて前日には伝えなさい！みんながビックリするじゃないのよ。」

いきなりバーベキュー大会をドーナツ大会に変更だなんて意味がわからないわ」

「だってリンちゃんがドーナツ食べたって言うから。」

さすがの私も幼女のことばには弱いわ」

「弱すぎるでしょうが！」

「あと大量のドーナツ持って商店街を歩きたくなかった」

「…確実にそっちが本音よね？」

「そう言えばリンって子を学校に通わせなくて良かったのかしら？」

「孤児院ウチの子達も何人か通ってるみたいだけど」

「リンちゃんみたいなのは確実にいじめに遭っちゃうからいいの。出た頭は撃たれるって言葉を知らないの？」

「そんな物騒な言葉は私の故郷にはなかったわね」

「ふーん。平和だったんだね」

「…バリバリ戦争中だったわよ。防戦一方だったけど。」

「今頃滅んでるんじゃないかしらね」

「…勇者は呼べなかったわけだし」

「それってジュリエットちゃんがここに居るから？」

「そうよ。…悪い？」

「いや別に。逃げるは大正義、追うは糞外道が私の故郷で学んだことだから」

「女の子が糞とか言うんじゃないわよ。」

「待って、なにそのあからさまに糞みたいな世界。あんた大丈夫だったの？」

「勇者が糞とか言うなよ。」

「大丈夫じゃなかったからここに居るの。」

「そもそも私と琴音は勇者召喚の時に巻き込まれてここに来たわけだし」

「え？あんた魔神の娘とかじゃなかったの？」

「いやそんなコミックス化しそうなラノベ主人公みたいな産まれ方してないし」

「よく分からないわよ」

「私は人の子ってこと。」

「ねえ、いい加減帰らせてくんない？凄いいんだけけど」

「そんなになるまで何してたのよ」

「財政管理とか国民の要望に対応したりとか…どったの？」

ジュリエットは私をありえないものを見るような目で見つめてくる。

「あ、あんたって仕事とか出来たのね」

「拳と声でしか解決できない聖女様とは違うの。」

所であれ、止めなくていいの?」

私が指さす方向にはドーナツを揚げる為の大きい鍋から火柱が天へと立ち上っていた。

「ちよっー!?!あんた達今すぐ離れなさい!」

ジュリエットは子供たちの方へ駆けていく。

怪我人はいなさそうだし私は帰ろう。リンちゃんもいるしなんとかなるでしょ。

第19話

学校に行った翌日のこと。

夕飯を食べている時、ふとリンちゃんが私に聞いてきた。

「魔王様、なんであんなに学校が嫌いなんですか？」

「んー、あれ、話してなかったっけ？」

「可愛かったり、恵まれてたからいじめに遭ったっていうのはいつか聞きましたけど、具体的な内容はあんまり」

「そっか。まあ、別に話して困ることでもないか。でもまあ食べながら話せる内容じゃないからみんなが食べ終わってからね。」

「琴音とラストさんも聞きたい？」

「ええ、そうですね。ちよつと気になるかもです」

「おねーちゃんが話すなら私も話そっかな？」

「…琴音、あんまりエグくなり過ぎないようにね？おぞましきなら琴音の方が酷いんだから」

「まあ、うん」

「じゃ、話そっかな」

二歳か三歳位の頃

気がついたら両親はいなかった。もう顔も声も覚えてないし、名前も知らない。愛されていたかは分からない。

テーブルの上にはノートパソコンと通販の使い方が私にもわかるように書かれたメモが置いてあった。

そのメモはいつの間にか無くなっていたし、何故かろうじてひらがなが読める程度の私に理解出来たかは未だに謎。

どっかの誰かから超過剰な資金援助を受けていたけれど、それが誰かもわからない。

ちなみに、この資金援助は今でも続いてたりする。毎月初め頃に大量の金貨が部屋のどこかに置かれている。

この頃はまだいじめらしいいじめはなかった。というか、家から一歩も出なかった。

小学生

この頃から私のいじめられっ子人生は始まった。

最初はただの無視だった。それがだんだんと意味を持たない暴言へと変わり、終盤には同級生は見えないところに向けがを負わせるということを覚えた。

中学生

半数は別の中学に通うとはいえ、半数はまた同じところに通うこととなる。

暴力を覚えた同級生達はついに刃物を持ち出した。カッターや鉛筆、画鋏など。

とある男子が私の頬に切り傷を付けた。さすがに隠しきれないと焦る彼等だったが杞憂に終わる。幸か不幸か、私は傷の治りが良かったのだ。

それから私への攻撃はより過激になった。

手の甲に鉛筆を刺される、リコーダーを男子トイレの便器に放置される、椅子に画鋏を貼り付ける、給食に折ったカッターの刃を混ぜる
e t c :

え、傷が全く無い？そんなことないよ。背中とかお腹、太もも辺りは酷いから見せてあげる。だから一緒に風呂に入る？

え、怖い？大丈夫だよ。別に血が出るとかは無いから。

話を戻そっか。

刃物に飽きた彼等が次に振るうのはインターネットやSNS。

奴らは私の顔や裸体をインターネットにあげやがった。インターネットっていうのはまあ、世界中の何億人が見る掲示板みたいなものだよ。

そして、写真の次にこう書かれていた。

『○○中学校二年A組 喜多希依』『殴つてよし』『サンドバッグ希望』『0円やり放題』『やりマンです』『ビッチです』『どれだけヤツても合法ロリ』

とまあ、こんな感じで色んな人に認知されちゃったわけ。

…どれだけヤツても合法ロリはちよっと語呂が良いなって関心す

らしたけど。

とまあ、こんなことになったらもう大騒ぎ。

学校には汚っさんやら鬼いさんやら集まるし、学校でも上級生、下級生、教師、関係なく私の前でオス猿共が性器を露出するわキスを迫るわローションをかけてくるわ。

何回か机に精液をかけられたこともあったかな。

女子？キヤーキヤーうるさいわ、私を変態扱いするわであればあれで面倒だった。

処女？ああ、それならちゃんと琴音にあげたよ。

ちよっ、リンちゃん？その目はどんな刃物よりも痛いからやめてくれる？

ん、ありがと。

ああ、琴音と会ったのは中学生になってそう経たない頃だったよ。

高校

高校受験の進路はまあ、大したことはしなかったよ。受験つてのは学校に入学するためのテストとかだよ。

あんまり言いたくないけど頭は全く良くなかったからね。国語はよくラノベとか読んでたからどうにかなったけど理科、社会、数学、英語はまあ悲惨だった。

おかげで所謂『バカ校』に通う私だったけど、まあ写真が流れちゃってるわけだしいじめは続いた。

最初は殴る蹴るから始まり、机や椅子なんかへの細工、成績を人質にとった教師の嫌がらせ、生徒会への勧誘、まあ中学校よりもっと色々々。

勧誘はいじめじゃない？そんなことないよ。

私の、見た目に惚れやがった生徒会長がよく勧誘に来てはそれのファン共が私に嫉妬の目を向けてくるし。

なんとか高校二年になって今までとちよっと変わったことがある。そう、琴音が私と同じ学校に通うことになったの。

小学校は家が遠くではなかったけど学区は違ったし、中学校は琴音

は通わなかったし。

琴音と一緒の学園生活、楽しみって思ったんだけど、まあそう上手くもいかなかった。

琴音もいじめに遭うわ、私に友達が出来たと思った女子からの嫌がらせが悪化するわ、琴音に惚れた男子が私に絡んでくるわ。

被害が二等分されるかと思いきやむしろ倍加した。だからって琴音を嫌いになんて微塵も思わなかったし、奴らの来ない授業中の図書室で二人で過ごすのは楽しかった。

そして、私を教室に引き戻そうとした私のクラスメイトと琴音のクラスメイトと一緒にこの世界に召喚された。

不遇まみれな少女の物語はここでおしまい。

それから先は喜劇的ではなくとも、幻想的で私向きな物語が始まった。

「魔王様、これからはもっと優しくして差し上げますね」

「が、学校って怖いんだね…」

「いやリンちゃん、おねーちゃんはかなり特殊な例だからね？」

「ほらほら、この後琴音のも聞くんですよ？」

「この程度でへばってちゃ、ショック死するよ？」

「ええ!？」

「琴様、なんで生きてるの？」

「リンちゃん、それはちよつと酷くない？」

「でも琴音、私も初めて聞いた時は、この子よく逃げ切れたなあ、って思ったよっ…」

「まあ、うん。じゃ、話していい？」

「あ、待ってください琴音様。先程話題にもあがりましてしお風呂に入りながらにしましょう」

「えっ…」

ラストさんの提案を聞いた琴音は手袋を軽く握り、顔が青ざめる。

私は琴音を抱きしめ、頭を撫でて落ち着かせる。

「琴音、私も、おねーちゃんも一緒だから。ちよつと頑張ろ？二人なら

きつと大丈夫だから。ね?」

「…うん」

「あの、もしかして私、不味い事言っちゃいました?」

ラストさんが心配そうに聞いてくる。

「うん。悪い事ではないけど、不味い事ではあったかな。」

琴音、肌を見られるのがトラウマなんだよ」

「だいじょうぶだよ、ラストさん。リンちゃんも。」

「ちゃんと、話すから。一人で、話せるから、さ」

「琴様、大丈夫?無理しなくても…」

「ううん、大丈夫。おねーちゃんにだけ話させて、私だけ話さないのはなんか、嫌だからね」

「ありがと琴様!大好き!」

「おねーちゃん、幼女ってすごいね」

「ん。じゃ、いこっか」

かぼーん

お風呂の場面に入る時の効果音ってなんでかぼーんなんだろうね。

「おねーちゃん、かなり前に私に教えてくれなかったっけ?」

桶が床に置かれたときの効果音だよ?」

「へー。琴様もそうだけど魔王様も物知りだったんだね」

「…なんで過去形?」

「魔王様が嘘ばかり教えるからでは?」

「嘘じゃないもん。リンちゃんに話してるのは社会の厳しさと間違いだよ」

「と言ってるけどリンちゃん、おねーちゃんが話したことが役に立ったことってある?」

「あんまり!」

「うっ、…リンちゃんさ、九尾になってから遠慮が無くなったよね」
「そうですか?」

「それはそうですよ。魔族、魔物は精神が肉体に引っ張られる種族ですから」

「まあいつか。琴音、さっさと話しちやいなよ。あんまりシリアルに流れるとシリアスに戻れなくなるよ」

「それ、おねーちゃんが言っっちゃうんだ。」

まあ、うん。じゃ、話しちやおっかな」

私はよく泣く子だったみたい。

最初のうちは可愛かったみたいだけど、幼稚園に通う頃には両親は限界を迎えた。

友達作りが下手くそだった私はよく一人で泣いていて、その度に親が迎えに来させられてた。

四歳か五歳の頃だった。

初めて、お父さんが泣いている私を殴ったの。

そのときだけは、なんでか私は泣き止んだ。それを気味悪く思ってお母さんも私を殴った。

そこからはタガが外れたのか私が泣くたびに、殴ったり蹴ったりした。

最初の一回以降は普通に、もつと泣いた。もつと泣いたからもつと殴られた。

泣いても泣かなくても殴られた。

この頃から、泣かない方が幾らか身体に楽つてことを学んだ。

小学生にあがってからは、両親は私と関係ないことですから理由にして私を攻撃した。

カッターで切りつけられた。

包丁で軽く刺された。

金槌で殴られた。

半田ごてで焼かれた。

よく分からない薬品で皮膚を焼かれた。

軽いものだとぎつとこんな感じかな。

え、重い？まだまだだよ。これらは肉体面だけだけど、他にも精神

的にきついこともいっぱいやられた。

この頃かな、傷跡が気持ち悪いって言われて、両親だけでなく学校でもいじめられるようになった。

そ。これが、私があんまり肌を見られたくない理由で、PTSD。所謂トラウマって奴。

もちろんやり返そうとしたよ。

普通に殴ったり、電源の入っていない半田ごてを突き刺したり、カッターやハサミで殴ったりもした。

薬品の入ってたビーカーを投げつけたりとか、服を燃やしたりとかね。

そして、小学校5年生、10歳かそこらの頃、灯油をかけられた。部屋中に撒き散らかされてるのを見て私は察した。：一家心中する気だ。

私は逃げた。

家が川沿いにあつたから、二階の窓から川に飛び下りて、振り向いた頃には家は燃えてた。

雨も降ってたから直ぐに鎮火したけど、無事かどうかは分からない。

行くところのない私はとりあえず雨風を防ごうと橋の下まで歩いて、そこで途方に暮れてた。

そんなときだったね、おねーちゃんと出会ったのは。

そういえばなんで声を掛けてきたの？なんとなくて目に付く場所じゃなかったと思うんだけど。

「ああ、それ？…買い物中にたまたま同じクラスの人と会っちゃってね、相手の親もまとめて揉めに揉めた。

その帰りになんとなーく川を眺めたくなくてね。

声をかけた理由は、：実は今でも分かんないんだ。

気づいたら話しかけてて、いつの間にか家に招いてた」

「ふーん。

まあ、ここまでが私とおねーちゃんの出会いまでの物語。

こっから先はおねーちゃんの時に軽く触れたけど、学校には通わな

かった。

高校はおねーちゃんと通えるってことで勉強頑張ったんだけど、結局はいじめに遭った」

なんか、無駄に厳しいっていうのはおねーちゃんから聞いてたんだけどさあ、まさかあれほどとは思わなかった。

体育の授業でさ、原則ジャージ、その他装飾品等は禁止だった。半袖短パンのおかげで私の手足はクラスのみんなに見られて、クラスに味方のいなかった私はまたサンドバッグになった。

……

「そして、ここに来た。ですか？」

空白を破ったのはラストさんだった。

「うん。案外、話してみると楽なものっ…」

リンちゃん？どどどったの？」

リンちゃんは立ち上がり、湯船に浸かっていた琴音を胸に抱きしめた。

「楽なんて、言わないでください。

琴様は、琴様と魔王様は、誰よりも頑張りました。二人とも、きつと、誰よりも…辛かったのに！」

リンちゃんは静かに涙を流す。

こんなの、始めてだ。私達のために泣いてくれる人なんて。

「琴音、よかったでしょ？」

「うん。居たんだね、こんな人」

琴音は、二人には今まで見せたことの無い傷だらけの手でリンちゃん頭の頭を優しく撫でる。

「あの、水を差すようで悪いのですが…」

ラストさんが気まずそうに、右手を軽く挙手して訊ねてくる。

「なに？なんか気になることでもあった？」

私が訊ねるとラストさんは素直をに聞いてきた。

「ヘルムートの魔法や薬なら、お二人の傷跡を完全に無くすことも可能だと思うのですが、それはしないのですか？」

その答えはヘルムートに来てすぐに決まっていた。

「しないよ」

「だって、」

「琴音が」

「おねーちゃんが」

「綺麗って言ってくれたからね！」

第20話

目が覚めたら、そこは何も無い荒野だった。

どこを見渡しても視界に入るのは雲ひとつない青空に草木ひとつない枯れた地面。

本当にこれだけで、私の腕も足も、胴もない。ないのだから、当然触れないので顔があるのかも分からない。

——あなたは今日、選ばなければならない。

頭に少女のような声が鳴り響く。

「はっ。」

肉体がないのに肉声は出た。私の声はしっかりと、この耳で聞き取れた。

「選ぶって、なにを？」

——あなたの最愛に危機が迫るとき、あなたは初めて犠牲を伴わせる。

「最愛、琴音のこと？」

まあ確かに、琴音を助けるためなら犠牲くらい……」

——あなたは選ばなければならない。究極の二択ではなく、苦渋の二択。

——どちらを選んでも、あなたは絶対に後悔する。

——二人ぼっちの生活に逆戻りするか、

——一人ぼっちの王様を続けるか。

——ほら起きて。残りの時間は少ない。がんばってね。」

最後の一言は聞き取れた。しっかりと、この身で。
大切を壊された、可哀想な女の子の声を。

「…夢オチ？」

辺りが霧に包まれたかと思ったら、気がついたらベッドの上で寝ていた。

「苦渋の二択ってなんの……え？」

ベッドから降りようと床に足を下ろしたら、それはそこに落ちていた。

それは、いつか私が琴音にあげた女性用の機械式腕時計。これは学校には持つて行ってなかったからこつちの世界にはないはずなのだけれど。

時刻は夜の11時40分を指している。

「とりあえず琴音に…って、どこにいるんだろ。一緒に寝たはず」

さて、何かおかしい。私は何時に寝た？

私の生活リズムは崩れ気味だけど深夜1時から3時頃に寝てお昼前頃に起きるはず。

それなのに目をまたぐ直前の時間に起きるはずがない。

「とりあえず、琴音を探さなきゃ『気配察知 MAX』」

国中の住民の気配が私に突き刺さるように伝わってくる。

そこに琴音の気配は、ない。ラストさんのもリンちゃんのものない。

「少なくとも国の外、森とかかな？」

この時、私は失念していた。

孤児院の子達のこと、全く頭になかったのだ。

元々無法地帯の街だったモーゼスは現状魔境と化していた。化していたというか、魔境そのものである。

溶岩と液体窒素を同時に流す火山

人や動物のような腕を生やして歩く植物

空間そのものに寄生したかのように地面や動植物のら生えてくる動物の手足や臓器

ひとりでに動き出す明らかに人工物な農具や武器

シンプルに強すぎて魔族も人間も敵わない魔物

そんな魔境が、未だに名前を覚えられない人間の国とヘルムートを直線で繋げさせないように位置する。

なんとなくだけど、琴音はここにいる気がする。

「こことねー？こことねー！…暗いかな。『えっと、求めるは視界、もたらすは光源』」

私の腰あたりに光の玉がふわふわと浮かぶ。

私はそれを抱きしめながらことねを探す。

時刻は、11時50分。

「こことねー。おねーちゃんが探しに来たよー

…っ!？」

不意に何かを踏んだかと思ったら、それは人間の腕だった。肘から先までしかなく、断面は刃物で切ったよう。

白い手袋をつけていて、外すと火傷跡や切り傷が無数に刻まれている。

「うそ、…これ、琴音のだ」

啞然としていると、背後から光り輝く拳が襲いかかってくる。

「速やかにくたばりなさい！魔王！」

それは間違いなくジュリエットの攻撃だった。

いつぞやのクズとはまるつきり違う、強力で強引な、そして優しさに満ちた女の子の拳。

「いったいなんの真似かな？みんな」

これはジュリエットの単独犯ではない。

どうやら孤児院の子供を五人、どうやってか連れてきたみたい。

「ごめんなさい魔王様。でも、魔王様が世界を滅ぼしちゃうって、ジュリエットちゃんが」

一人だけ出てきたのは、天使と人間のハーフの女の子、神綺ちゃん。私が名付けた子の一人だから、よく覚えてる。

「そう。で、琴音はどこ？」

彼女に尋ねると、もう一人が出てくる。

「こつちだよ！このクズ魔王！」

木の上から声を放つのは肉体をダイヤモンドに変化させることが出来る特異体質の持ち主、コウ君。

足元からロープが降りていて、その先には左腕がなく、右腕は縛られて吊るされてる琴音の姿があつた。

「琴音！」

私はすぐに飛びつき、ロープを引きちぎる。

「琴音！琴音！無事!?ちゃんと生きてる!?!」

「……ほへ、ひゃん。ふう、ひゃい」

幸い、琴音は辛うじて生きていた。片腕をなくし、喉も切られていた。辛うだが辛うじて、生きていた。

「バカ！なんでこんなところに一人で来んのさ！私にも声かけてよ！」

「ほええひゃん、うひ、ほ」

「っ！」

『聖光切』！

「そんなに殺したいっての!?!」

「ええ！死になさい！」

私は琴音に負担をかけないように最小限の動きでジュリエットちゃんの光をまとった手刀を躲し続ける。

正直、光っているのでこの暗い森の中だと見やすい。

「光束打！」

「筋力MAX！」

ジュリエットの光の速さで放たれる拳を、世界をも叩き割る拳で迎え撃つ。

木々は爆ぜ、地面は割れる。

地面の亀裂から溶岩と液体窒素が流れ出てきて、辺りは霧に包まれる。

希依のつぶやきからすぐのこと、霧が晴れて辺りは火山と砂漠に変わっていた。

「嘘!?何よこれ!何をしたの魔王!」

ジュリエットの周りには、さっきまで姿を現さなかった残り三人の子供達が気絶していた。コウと神綺は手折れる三人に駆け寄り息をたしかめ、ほっとする。

「何をしたのって、ただ腕を振っただけだよ。」

腕を振ったら、たまたまここが砂漠に変わっただけ。

腕を振ったら、たまたまその子供達がきぜつしただけ。

腕を振ったら、たまたま琴音の怪我が全治しただけ。

ほら、どうってことないでしょ?」

「あー、あー、

あ、ほんとだ。おねーちゃん!声ちゃんと出る!」

「ほんと?よかったー」

これでとりあえずはひと安心。出血多量とかで死ぬ危険は無くなった。

「それだけで…、それだけの事で!こんなことが起きるわけ無いじゃない!」

「起こるんだよ、ジュリエットちゃん。バタフライエフェクトって知ってる?蝶の羽ばたきが台風だか嵐だかを生み出すっていう、現象のようなものなんだけど」

「そんなこと、起こるわけが」

「そろそろ聞きたいんだけど、なんでそんなに私を、魔王を殺そうとしてんのさ。その子供から私の評判、聞いたんでしょ?」

「…世界を、殴り壊すんでしょ?聞いたわよ!あなたが孤児院を作ったって!子供達を保護したって!」

そして、世界を殴るって!」

あー、これ、もしかして私も結構な比率で悪い?

「おねーちゃん、ギルティ」

「ちよつ、琴音まで!?!」

「分かったのなら、いい加減に殺されなさい」

ジュリエットは右腕に、さっきの閃光撃以上の光を纏わせる。

「ジュリちゃん、その時は私が世界を破壊するよ? 徹底的に、塵一つ無くさずに」

琴音がジュリエットに言い放つ。

あれは完全に、怒ってる。

…でもね、琴音

「それよりも早く、貴女も殺すわ」

今回ばかりは、私の方が怒ってる。

キュイ、キュイ、ガチャ

「…へっ? なんですかこれ!?! いつからここは砂漠に!?! 森は!?! 魔物は!?!」

「「「「…」」」」

突如近くの地面から金属製の厚い扉を開けて出てきたのは城に居なかつたラストさんだった。

「ラスト様? 一体どうし…なんですかこれ!?! 砂漠!?! すごい星が綺麗です!?!」

続いて両手と九つの尻尾で大きなかごをもったリンちゃんが出てきてラストさんと同じようなリアクションをした。

リンちゃんのセリフを聞いて全員が空を見上げると、確かに星が綺麗に空を彩っていた。

「…ジュリエットちゃん、おしりペンペン百回」

「何がよ!?!」

「大丈夫、ちゃんと街の真ん中で、パンツまでしつかり下ろしてからやるから」

「せめてパンツは履かせなさい！あ、間違えた！やめてよ！嫌よそんなの！」

「琴音、どうする？」

「うーん、じゃあ、絆創膏までならいいよ？小さいヤツね」

「ちよつとそこの妹！さつきまでの邪神みたいな怒り顔はどうしたのよ！何よそのニヤケ面は！」

「あの、魔王様？」

「ラストさんとリンちゃんの話は後でね。ちゃんと話すし、しっかりと聞くから。」

あ、その五人を孤児院まで連れてつてくれる？」

「はあ!?おい待てよ魔王！逃げんのか!?!」

コウ君は私の言葉に噛み付いてくる。まだこの子は私に勝てると思ってるのかな。

「見逃してあげるの。ほら、逃げていいよ」

「クツッ!!」

倒れた三人はリンちゃんの尻尾に抱えられ、二人はラストさんに担がれてヘルムートへ戻る。

「…?ほら、早くしてよ」

「な、何がよ？」

「おねーちゃん、主語がないよ」

「シスター服のぬがし方って知らないからさ、自分で脱いでよ」

「まさかここで脱がす気!?最低よあんた！」

「人ふたり殺そうとしたんだよ?これくらいで済まそうってんだから感謝してよ。シクシク」

「腕とか切られた時痛かったなー。シクシク」

「シクシク」

「なぜか納得いかないわ!?!」

そういえば、結局『苦渋の選択』とかなんだっただらう？

時刻は、深夜の零時を指していた。

——よかったね、たまたま助かって

何処からか、優しい声が聞こえてきた。

「琴音、なんか言った？」

「さあ。気のせいじゃない？」

「パンツを返しなさい！」

深夜零時、少女達は砂漠を駆ける。

…約一名ノーパンで。

第21話

魔王城 食堂

今夜の件の当事者、希依に琴音、ジュリエットとたまたま居合わせたラストとリンがテーブルを囲んで事情聴取を始めた。：そんなに固いものでは無いが。

子供達は大した怪我もないので孤児院に寝かせてきた。彼らにはまた後日話を聞くことになっている。

「で、なんで今更こんなことしだしたのさ。しばらくは大人しかつたのに」

「…フンっ」

「琴音、ジュリエットちゃんのスリーサイズ」

「上から8」ちゃんと言うから黙りなさい！」：だつてさ、おねーちゃん」

「そう？じゃあほら、なんでやったの？」

希依の問いかけにジュリエットは気まずそうに口を開く。

「二週間くらい前からね、頭にずっと響くのよ」

——魔王は邪悪なもの

——魔を滅するは人の義務

——魔王を殺さねば世界は終わる

——魔とはいついかなる時も悪である

「最初は私だけだったんだけど、何時からか子供たちにも聞こえてきたみたいで、しかも声がだんだん重なつていって、私を含めてみんな頭痛に悩まされて、その…」

「気づいたら実行してたよ」

煮え切らない最後を琴音が締める。

「ま、そういうことよ。ほら、さっさとテキストに処しなさいよ」

「じゃ、三ヶ月給料一割引ね。引いた分は孤児院の生活費に回すからそのつもりでね。」

じゃ、次はラストさんだけど

「ちよつと待ちなさいよ！まさかそれだけで済ますわけじゃないわよ

ねえ！あんたを殺そうとしたのよ!?その妹も！腕を切り落としたのよ!」

「それが?」

答えたのは琴音だった。

「腕を切られたのは私の責任。油断してた私のせいだよ。確かに痛かったし喉をやられて魔法が使えなかったけど、どっちみち喉さえ治れば治せる程度の怪我だし。」

襲ったのもほかからの原因があったみたいだし。

怒ってないよ。：私はね」

「私は怒ってたけど、琴音はそうでもなかったみたいだし、恨みはある程度晴らしたしね」

民衆の前でパンツを脱がされ、おしりペンペン百回を受けたのは億の歴史があるヘルムートでも彼女くらいだろう。

「：そうだったわね。でもやっぱりあなたの性癖を疑うわ」

「疑うも何も単純。可愛い子が好き、鬱陶しい奴が嫌い。これだけ」

「あの、魔王様?まさかマジでやったのですか?おしりペンペン」

「そういうば、ラスト様はすぐに戻ってましたね。やってましたよ?

琴様にすぐに目を塞がれましたが」

「リンちゃんにはまだ早いからね」

「子供になんてもの見せてんですか。そういうのは誰もいないとこでやってくださいよ。助けを呼んでも誰も来ないような場所で」

「やられてたまるかっての!むしろヤラれるわ!」

「ジュリエットさん、よくその調子でシスターなんてやってられましたね」

「あなたにだけは言われたくないわよ、フリーダムオートマトン」

「だからオートマトンじゃなくてオートマタですって」

「ねえ琴音、ずっと気になってたんだけどオートマタとオートマトンって違うの?」

私は地味に結構気になってたことを聞いてみた。

「言葉の意味的にはほぼ同じだと思っていいよ。違い、わかり易いと

こならスペック、性能の違いだね。他にも形状とか。

ジュリちゃんのとこオートマトンは言わば意思の持たない召使いのようなもの。主人に言われたことをただひたすら実行するだけの存在。言わば人間の劣化版と言えないことも無い。

大してこの世界のオートマトンは最初こそ人間に劣るスペックだったけど、四号機で人間と同等、それ以降は人間を上回る性能を誇っている。

まあ、やっぱり世界の違いが一番大きいのかな？

魔族を人間だけで、魔法だけで滅ぼそうとしたジュリエットちゃんの世界と、

魔族を使えるもの全て、魔法に呪いに科学に他種族、その他色々を使つて滅ぼそうとしたこの世界とじゃ発達の仕方が違う。

そんなことより早くラストさん達が保護してきた子をお披露目したら？」

「ちよつとまって、人間そんなことしてたの？」

私とジュリエットちゃんの言葉が丸々被った。

「あれ、言つてなかったっけ？てかジュリちゃんも知らなかったの？」

「そりや教会から外に出たことなんてほとんどなかったし」

「ジュリエットちゃんつてめつちや箱入り娘なのね」

「まあまあそんなことより、ご紹介してもよろしいですか？」

「あ、やつとですか？もしかして今日はもうお休みになられてるのかと……」

「いえ、ずつつ、と扉の前でお待ち頂いてますよ？」

「二「なにやつてんの!?!」」

「さあ、もう入つていいですよー」

ラストは両開きの扉を精一杯開くと、それでもギリギリの肩幅の異形が姿を現す。

人間で言うところの右手、左手の肘が繋がり外側の肩から首にかけて大型の歯車が姿を除く二人の少年少女。

「こちら、自動人形の二号機、三号機です。男の子の方が二号機です。彼らの保護していた子供達からは『二いちちゃん』『三ちゃん』と呼ばれ

ていました」

「いや、どつから拾ってきたの?」

「モーゼスのスラム街です。魔境化したあとはお二人の作った地下シエルターで子供達と暮らしていましたが私とリンちゃんが偶然発見、援助していたのですが、

…現場を見られてしまったというわけですよ」

「死んだって聞いたような気がするけど…まいつか。よろしくね、二くん、三ちゃん」

「くん付けで呼ぶんじゃないやねえ!歳上だぞ!」

「二、うるさい」

「ほっとけ!」

「だからうるさいってば」

「このように、お兄様の感情を対消滅させるように造られたのがお姉様なのですが…この通りですよ」

「水と火じゃなくて火と油に造っちゃったってわけね」

「そういうわけですよ」

「おい!もう帰っていいか!」

「お腹空いた。ラスト、ご飯ちょうだい」

「おい三!お前なあ!」

「ねえオートマタ」

「なんででしょう?」

「なんだ!」

「何?」

「あー、三人ともそうだった。オートマタつてもしかして全員マイペースなのかしら?」

「そんなにですか?」

「んなことねえよ!」

「そんなこと、ない」

「ねえ琴音、二くんと三ちゃんの数え方って一人?二人?」

「ええ…、今聞くこと?」

「今聞かないと夜、眠れなくなるじゃん」

「はあ。二人だと思うよ、最初から繋がってたわけじゃないんだし」

「ふーん」

「ふーんて、眠れなくなるんじゃないから？」

「琴音、今夜は寝かささないから」

「えっ、明日じゃダメ？腕を切られたりとかして疲れたんだけど」

「色々心配させたんだから、もつとちゃんと琴音を感じさせて？」

「うう…もう…おねーちゃんったら」

「というか魔王様、琴音様？もう朝ですよ？」

ラストさんがカーテンを開けると強烈な朝日が私達を照らした。

「あっ…」

「はあ…、四時間ほど睡眠を取っていいですからすぐにお風呂に入ってお休みになられてください。ジュリエットも、今は帰りなさい。」

お昼までに子供達の事情聴取を終わらせますよ。

お兄様とお姉様は私が孤児院までお送りします」

「ん。じゃ琴音、行こっか」

「うん！」

「くれぐれも、速やかに終えてお体を休めて下さいね」

大浴場

さすがに睡眠時間を削ってまでことを成そうということにはならず、私達は素直に体をやすめることとした。

「ねえ琴音、ジュリエットちゃん達に響いてたって言う声、出处は分かかった？」

「うん。…安心していいよ、ヘルムートに裏切り者がいるとか、人間の作戦って訳じゃないから。」

多分だけど、ジュリエットちゃんの世界の勇者は100%後天的になるものなんだと思う。全人類が勇者になる可能性があるから全員産まれた時に脳に細工を施す。

何ヶ月か間が空いたのは平行世界を転移したからなのか、それとも元々そういう仕様、欠点なのかもね。

ジュリエットちゃん以外にも影響があったのは多分、『勇者パーティ』全員にどうにかして影響が出るようにしてたんじゃないかな？

パーティは無意識だろうけどね」

「つまり、仕返しする相手はジュリエットちゃんの世界そのものってわけね」

「どうする?」

「琴音はどうしたい? 一番被害にあったのは琴音なんだから」

「ぶっちゃけそんなにだよ? 腕切られるのはめっちゃ痛かったけど両親からやられた時と大差あるようには感じなかったし、その分はおねーちゃんがやってくれたし。」

「だからおねーちゃんがやりたくないって言うならやらなくていいし、やりたいなら殺ればいいよ」

「ならいいかな。面倒だし。」

あと思っただけどき、別にジュリエットちゃんたちに『琴音が死んだら世界を殴り壊す』って言ったのが知られたわけじゃなかったね」

「あ、気にしてたんだねそれ」

「琴音に有罪判定されたの、結構傷ついたんだからね?」

「いやまあそれはゴメンだけどき、重いよ? おねーちゃんの愛」

「そりゃ思いと想いを込めに込めまくってるからね」

「詰め込みすぎだよ」

「だから適度に発散しないとね」

「今日はしないからね?」

「分かってるってば」

「でも、一緒に寝てほしい、かな」

「もっちゃん。妹の頼みは断れないからね。」

あ、襲ったらゴメンね?」

「…がんばって睡姦の技術を身につけてね」

「琴音の妥協点そこでもいいの?」

「別に、おねーちゃんなら嫌じゃないし」

その後、お風呂から上がってすぐに眠りにつき、二人とラストさんは孤児院に向かった。

ジュリエットに協力した子供達に事情聴取をしたが、状況が変わるような情報は一切得られなかった。

第22話

「これより、十四代目魔王、キイの二つ名決定会議を始める」
「いや要らないから。しかもこんなに朝っぱらから何？」

場所は魔王城の地下、魔力地区。

超高濃度の魔力結晶で作られた円卓に三人が着いていた。

一人目は現魔王、希依。

二人目は妙に似合うアロハ服の先代魔王、クラーク。

三人目は無数の腕で構成された翼のようなものを生やした黒いワ
ンピース、黒髪、黒目の女性、初代魔王で今は亡霊のエヴォラ。

この三人が集まった。

「他の奴らはどうしたんだ？ババアとジジイと揚げたてコロツケはす
ぐ来れる距離だろうに」

「…断られた。そんな暇は無いつて」

身体が半透明の初代は目に見えて落ち込んでいた。

「クラーク、女の子泣かせちゃダメでしょ。マフィさんに言いつける
よ？」

「うっせえ！そもそもこいつ俺らの何千万倍も歳上だ！」

「正確には1億と23倍、クラークより上」

「そんなことよりもさ、なんなの？二つ名決定会議って」

今朝、希依は目が覚めたら体の自由が効かず、強制的にこの魔力地
区に連れてこられたのだ。

希依の疑問にはクラークが答えた。

「これはあれだ、ババアの子の『卵王』とか俺の『読心王』とか初代の『最
強の魔王』みたいなやつだ。」

初代の気が向いたときに開催される」

「ふーん。気が向かないから帰っていい？」

「キイ、泣かすよ？」

「諦める希依。こいつに喧嘩売って勝った魔王はババアだけだぞ」

「むしろなんで愛子さんは勝てたの？」

「あの子、この空間ごとオムレツにしようとした。わたしを美味しく

食べようとした。怖かった」

「話変わるけどさ、ジュリエットちゃん達の暴走のときの声ってエヴォラさん？」

「…違う。多分、それはニノンのしわざ」

「ニノンつつとと、二代目だったか」

「どんな人なの？」

「引きこもりの、お人好し。あなたとよく似ていた」

「…ねえクラーク、私ってそんなに引きこもりのイメージある？」

「魔王になった翌日に俺に仕事丸投げして二週間図書館にこもったお前に引きこもりのイメージがないとでも思ったか？」

「…ごめん」

「もう気にしてねえよ。んな事よりほら、さっさと決めちまおうぜ。希依の二つ名」

「いやそれはいらないうっての」

『因果包容、なんていいと思うよ』

突如空間に機械音声のような声が響き渡る。

「…ボイスゴーレム。ロペス？直接来てくれてもいいのに」

『いやだね。行ったらあんたは俺を使うだろ？』

「そんなこと、しない」

「クラーク、ロペスってだれ？」

「四代目の魔王だ。ゴーレム作りの天才で、初代と話してるのはロペス本人の声を素材に作ったゴーレムだ」

「魔王って引きこもり多いの？」

「いやほら、基本魔王って城で勇者を待ち受けるものだろ？」

「むしろ攻め込むべきでしょうに」

「なんでお前はそんなに好戦的なんだよ。仮にも一国の王だという自覚を持って」

「親バカに言われたくない」

「んだとシスコン」

「ロリコン」

「お前もだろうか」

「おつと」

『十四代目、俺のところにお前の客が来ている。3秒後に送るぞ。覚悟しろ』

「は？客？」

響き渡る声我突然そんなことを言い出す。初代に目を向けるもハテナを浮かべながら首を振る。

『3』

辺りが黒く、赤く、黄色く、白く、透明で光る霧に包まれる。

『2』

部屋を満たした霧が円卓の上に集まり、人型を成す。

『1』

人型から光が消え様々な色が黒に染まる。

『0』

霧がより高濃度になり、完全な人間の姿になる。

「やあ」

ローブ姿の老人が円卓の上に君臨した。

「君が」

一歩、私の方へと進むと、老人の姿と声はドレス姿の少女となる。

「私の」

次はスーツ姿の二十歳位の男性。

「愛娘で」

軍服姿のキリツとした女性。

「間違いないのかな？希依ちゃん」

私の前で立ち止まったのはごく当地ヒーローのようなマスクに赤いライダースーツの男性。

「いや、誰？顔も見えないし」

「え、まじ?…やつべ間違えた。もっかいやり直していい?」

「ダメでしょ。そんなイタイ登場しといてやり直すとか絶対すべると」

「あ、やっぱ?」

「…わりい、俺帰るわ。こいつは、駄目だ」

シリアスな空気が壊れたところでクラークが退場する。

そして数分後、クラークと入れ替わるように琴音がやってきた。

「クラークに言われて来たけどおねーちゃん、この赤い不審者誰?あとその幽霊っぽいのは初代さん?」

琴音の疑問に答えるのは赤い不審者だった。

「やあ琴音ちゃん、君にも会いたかったよ。その通り、彼女はヘルムートの初代魔王、エヴォラだ。」

そして私は『Nyarlathotep』、ニヤルラトテップでもナイアラトテップでもテキトーに呼んでくれたまえ」

「…何、おねーちゃん達はこんなのを召喚でもしてたの?暇なの?」

「まあ、初代が暇だったから開かれた会議ではあるけどこの邪神っぽいのは呼んでない」

「酷いなあ邪神っぽいとは。正真正銘邪神だよ。証明はしないけどね」

「んな事よりさ、私のことを娘とか言ってたけどそれは何?」

「えっ、おねーちゃんそんな中二設定持ってたの?」

「ごめん琴音、ちよつと黙ってくれる?さつき中二設定を付け足される所だったから」

「え、マジ?ごめんおねーちゃん」

「ん。」

はら、その自称私の親も早くゲロってよ。」

「全く冷たいなあ。まあしょうがないか。」

さて、何から聞きたい?って聞いてイラつかせるのが普段なんだけどそんなことしたら希依ちゃんに埋められそうだからね、サクツといくよ。

僕の種族はNyarlathotepで希依ちゃん、君の父親だ。

希依ちゃんが生まれた時の僕の名前は喜多 煌鬼^{こうき}。

ああ、安心していいよ。希依ちゃん、君の身体には一切 Nyarlathotep に関するものは含まれていない。100%人間だ。

聞きたいことは他にもいろいろあるのだろうけれど、何よりも先にこれを聞いてくれ。

済まなかった。他の神共から君に注目が行かないようにしていたとはいえ、君に父親らしいことが全く出来なかった。本当に、申し訳ないと思っっている」

邪神は手を付き膝を付き、頭を下げ、土下座の姿勢で謝罪する。

格好は変わらず赤いヒーローなのでとてつもなくシニールだ。

しかし私にそんなことを気にする余裕は無い。

「…父親？…あんたが？私に何があっても、助けてくれなかったのになんで今更？」

「忙しかったから。じゃあ君は許してはくれないだろうね。許してもらおうだなんて、凶々しいにも程がある。

がしかし、忙しかったからというのが一番正しい言い方でもある。希依ちゃん、君だって妙に思っただろう？あまりにも他の人と比べて不幸すぎる、幸運すぎる。幸も不幸も、全てがマイナスとして襲いかかる。

客観視したらこう思っただろう？

不遇すぎる、と。

その原因は勿論希依ちゃんには無いし私にも無い。理由は私にあるが。

これはなんというか、神共のエゴというか、八つ当たりというか、嫌がらせかな？

世界中の神々は怒ったんだよ。

たかが数名の人間が生み出した邪神ごときが人間の感性を手に入れた、愛情を知り、本来の性質から外れた僕が一人の人間を愛し、愛されたということに」

「えっと、つまり私のいじめられっ子体質は神々のリア充爆ぜろ的感覚で出来たってこと？」

「Yes.

これでも神々のなかでは結構強い方だね。僕に直接やるより周囲に仕掛けた方がいいと判断したんだろうよ。

僕はそれを、二度目を許さないために暗躍した。本来の性質的にも暗躍は得意分野だしね」

「二度目ってことは、一回目があるんだよね？それって…」
聞き入っていた琴音が聞く。

「琴音ちゃんが予想したとおり、希依ちゃんの母親だよ。そして僕の妻でもある。

ああ、勿論人間だとも。弱くて儂く、強く美しい人間だとも。

希依ちゃんの誕生に浮かれているすきに、体力を使い果たした彼女は、その夜誘拐された。

後々判明したことでけれど、彼女はカルト集団の雄共に散々犯された後に儀式の生贄として殺された。犯すのも儀式の一部だったのかもね。

しかも皮肉なことに、彼等は僕の信奉者だった。Nyarlath otepを信仰する邪教徒だった。

ああ、忘れていた。彼女、希依ちゃんの母親の名は『嘉村^{かむら} 桜春^{さくら}』、桜^{さくら}に春^{はる}でさくらだ」

「それで、あなたはなんで、今ここに来たの？」
ずっと喋らずにいた初代が口を開いた。

「さっき言った気がするけれど、あれ、言ったかな？まあいいや。

やることがやつと終わったからだよ。希依ちゃんが二歳位からだから、17年間、短いはずのとてつもなく長い17年かけてでもやるべき事がやつと終わったからさ」

「やるべき事って？」

「僕がしていたのは、希依ちゃんを神々の目から逸らすという、普通の人間からしてみれば迷惑極まりない行為だ。一柱、例外が居たがね」

「…星神、ステラ」

「その通り。もしかして希依ちゃん会ったことある？」

「少し前に、この城に遊びに来たことがある。あと、私が死んだらその

ステラちゃんになるらしいよ」

「えっ、マジ？ああ、そういうことか。あの子、立場的に上司の上司なんだよね。文字通り無知な上司の上には年下の上司でそれが自分の娘とか…」

話が逸れたね。えっと、なんの話しをしてたっけ？」

「17年間何をしてたかって話」

「ああ、そうそう。そうだったそうだった。」

僕は希依ちゃんがパソコンを使えるようにしてから居なくなった。そう、あのメモだね。あれは脳に直接書き込むという魔導書的な能力を持ったものだよ。

またまた話が逸れちゃったね。僕も希依ちゃん達に会えて柄にもなく舞い上がっちゃってるみたいだ。

えっと、そう。僕は陰ながら神共の希依ちゃんへの接触を全て断ち切っていた。断ち切った分は僕の『人間には身に余る物を与える』という特性を活かして莫大な金銭という形で送っていた。それでも運は送れなかったからね、その金銭すらもマイナスで働いた。それにはもちろん気づいていたさ。それでも、金銭を送らなかった場合は希依ちゃんに割と直ぐに死んでいた。だからといって僕が正しいとは言えないけど。

17年間経った今、何故終わったのかだけけどそれは君が3年前ここに来たことが事の解決に繋がった。

八百万の神が居なくなったこの時代には神が一柱、唯一神の『オージ』とかいう奴だけだ。あんな雑魚くらいなら僕でも余裕で殺せる。

今頃は他所の神共が奪い合ってるだろうね」

「ちよっと待って、『神が居なくなったこの時代』って言ったよね。何？ここは未来なの？私達がしたのは異世界トリップじゃなくてタイムスリップだったの？」

「…あれ、もしかして知らなかった？琴音ちゃん伝えなかったの？」

「…うん。だっておねーちゃん、異世界だーって喜んでたし」

「えっ、琴音…ああ、いいや。ありがとね」

「え？、うん」

「ふう、喧嘩にならなくて良かったよ。

じゃあせつかくだからこれも話しておくよ。

ここは希依ちゃん達が元々居た世界、時代と言うべきだけでもはや別世界みたいなものだしまあいつか。

ここは人類が五回滅んで六回目の人類が住まう地球だよ。ちなみにさっきのクラーク君とか十一代目魔王の愛子ちゃん、そして希依ちゃん達は二回目の時代の子達だよ。ラストちゃんを最後とする自働人形は五回目の生き残りだ。

まあそんなことはいいとして、あとは何を話したらいいのかな？時代背景を語るべきは琴音ちゃんであって僕じゃないし、

何か聞きたいことはあるかい？」

「別にないけど…琴音、これって全部マジ？」

「マジもマジ。大マジだよ。ニヤルラトテップがおねーちゃんの父親なのも、神々なリア充爆ぜろっておねーちゃんに意地悪するのも、おねーちゃんの母親が死んでるのも、おねーちゃんのことを本気で愛しているってのも、全部ゼーんぶ本当だよ」

「そっか、そっかあ」

希依は顔を隠すように机に突っ伏す。

「キイ？」

「あつはっはー。いや、私でも親から愛されてたりするんだなーって思ったらさ、めっちゃ泣きそう」

「良かったね、おねーちゃん」

琴音は希依の頭を優しく撫でる。

「うーん。いや、良かったのかな、親が邪神って」

「希依ちゃん、邪神を悪いみたいに言うけどさ」

「じゃあ悪くないの？」

「いや、めっちゃ悪い奴。人間の感性を持って分かったけど僕ほど厄介なやつも居たもんじゃない」

「自分の振りみて我が振りなおせってやつだね」

「言われなくても直せるところは直してるさ。とはいえ根本的なところは這いよる混沌だからね」

「くれぐれもクラークみたいな親バカにはならないでね」

「なぜ？娘を可愛がるのは当然の事じゃないのか？」

「あ、この邪神人間を理解仕切れてない」

「ええ!? 琴音ちゃん、マジかい？」

「えーつと、お父さん、でいいの？」

「うん、ありがとう。僕みたいなのを父と読んでくれて」

「ん。もうそういうのはいいから。お腹いっぱい。」

お父さんは孤児院で子供の相手をして思春期とか反抗期とかを身をもって経験してくること。

初代さん、私に二つ名とか要らないから。

はい、解散！私は寝る！」

「えっ、キイ？」

「解散！解散！たら解散！」

顔を俯かせて初代は虚空に消えていく。

第23話

「そうだ、ダンジョン行こう」

「えっ、おねーちゃんいきなりどうしたの」

自動人形二、三号機を筆頭に数名がヘルムートに住まうための書類やら何やらを片付けた希依が立ち上がる。

「琴音、私達は世のオタク共の憧れ、異世界トリップを果たしたんだよ？」

「う、うん。正確にはタイムスリップだけど、それがどうかしたの？」

琴音は何を言っているのか分からないと言わんばかりに首を掲げる。

「魔王に勇者、冒険者ギルドときたらあとはダンジョンでしょ！」

「ああ、そういうこと。行ってらっしゃい。お土産は無理に買ってこなくてもいいよ」

「…え、琴音来てくれないの？」

「冗談冗談。いいよ、一緒に行つてあげる。そもそも場所わかるの？」

「分かったところでたどり着ける気がしないね」

「だろうね。」

ダンジョンは『おねーちゃんが作った砂漠』を過ぎて、さらに私達が召喚された国、『アルバーン』をさらに過ぎて行ったところにある、荒くれ者の集う街、『アララ』の冒険者ギルドが管理してるよ」

アララ…

「なにその諦められたような名前」

「おねーちゃん、今そこにつっこむと話が長くなるよ？話というか、会話がだけど」

おっと、それはいけない。

「琴音、そこまで転移でとべる？」

「ごめん、行ったことないから無理。」

ちなみにめちやくちや遠いよ」

「…どのくらい？」

「日本列島12個分」

「ごめん、ぜんっぜんピンとこない。てかこの時代の大陸どうなってるの?」

「そりゃあもう、私達の頃よりさらに文明三回分年月が経ってるからね、全部くつついたよ?南極と北極以外。ってほら、もう会話が長引きそうだよ。」

方角はモーゼスがあつた方に真っ直ぐ飛べばつくからおねーちゃん連れてって」

「ま、私が言い出したことだしいいんだけどさ。」

前と後ろどつちがいい?」

「ん、今日は後ろからおつぱい揉みたい気分かな」

「揉めるほどなくてごめんね。ほら、身体強化を忘れないでよ」

『身神強硬剛』と、琴音は肉体強度を極限まで上昇させる超古代魔法を唱えてから希依の背におぶさる。

通常のおんぶよりも手を前に出し、希依の胸あたりまで伸ばす。

希依は琴音の太ももを下から支えて落ちないようにする。

「…おねーちゃんのエッチ」

「琴音には負けるよ。」

ほら、どつちに飛べばいいの?」

「んーと、あつち!」

「おつけえ!」と言いながら、その方向にある窓を開け、亜音速を上回る速度で飛び立つ。

「おねーちゃん!壊れちゃう壊れちゃう!」

「あつやば。『破壊力 min』」

ヘルムートの希依による暇つぶしの被害は窓と窓枠、城壁の一部に留まった。

空を飛ぶこと数分、大した危険も無いまま砂漠を超えて国を超えて、男達が賑わうアララへと辿り着いた。

見渡す限り頑丈に組み上げられた木造建築、道具を使わずに畑を耕

す筋骨隆々な老人、馬すらも正面から一刀両断しそうな大きな剣を肩に担ぐ筋肉の塊のような冒険者。

まるで隕石でも落下してきたような着地音を響かせた希依達に注目が集まる。

砂煙はすぐに晴れ、希依達の姿が頭になると男達はすぐに目の色を変えて寄ってくる。

「おねーちゃんに、そんな目を向けるな変態ども！『衝風』」

希依達に性的な欲求を隠さずに近寄る男達に琴音は、触れると軽々と人を吹き飛ばす衝撃を放つ風を、薙ぎ払うように放つ。

希依は、全身を震わせながら琴音に縋り付く。琴音は希依を抱きしめ、頭を撫でながら吹き飛ばした男達を睨みつける。

「おねーちゃん、大丈夫？」

「だ、だだだっ、だいじょうつ…」

希依は今にも泣き出しそうな表情で必死に答えようとするが、なかなか上手く言葉が発せない。

希依はかつて、複数の男達からレイプされそうになった経験が多数ある。

そのいずれも偶然に救われ、裸体の写真や動画をネットにあげられただけで処女を失うことにはならなかったのだが、それでも当時小学生、中学生だった希依には多大なトラウマを残した。

今思うと、恐らくその偶然も希依の父親によるものなのだろう。

「おねーちゃん、大丈夫、大丈夫だから。私がおねーちゃんを守るから」

そう言いながら琴音は希依の涙や鼻水をハンカチで拭い、また抱きしめる。

数分、そんなことをしていると希依は何とか気を落ち着かせて立ち上がると、タイミングを見計らったかのように希依達に男が声をかける。

「なんの騒ぎだ、お前ら。事情を聞くからギルドまで来てもらおうか。拒否権はないぞ」

男は鋭く、濁ったような目で希依達を睨みつける。

「おねーちゃん大丈夫？ちゃんと歩けそう？」

「うん。ごめんね、私から来たって言ったのに、こんなで」

琴音の左腕に抱き着く希依はとても弱々しく、今にも折れそうだ。

「おい、俺は来いと言ったぞ。さっさとついて来い」

「こいつっ…」

今にも殴りかかりそうな琴音だが希依がまずい状況な以上、希依から離れる訳にはいかない。

「フンっ」と、鼻を鳴らしながら男は歩く。

希依達がいた場所とは反対側に位置する冒険者ギルドに着くと、男はドアを開けて希依達に振り返る。

「俺はこのギルドマスター、カールハインツ・アルデンカルト。ギルドマスターであると同時にこの街の長だ。

さて、騒ぎを起こしてくれやがったお前らへの罰だが、まあこの男達の相手でいいだろ。この街はいつでも女が枯渇してるからな」

女が男の相手をする。つまりは、そういうことだろう。

「へえ…男、…ね。じゃあまず、あんたからね！」

道中に完全復活した希依はカールハインツを殴り飛ばす。

現在強制的に破壊力だけをminに設定している希依の一撃はカールハインツを壁まで飛ばすも、カールハインツにも壁にも一切のダメージが入らない。

「ちっ、おいお前ら！あのメスガキぶち犯せ！」

「ヒイツ!？」

カールハインツの言葉とギルド内にいた男達の視線に希依は腰を抜かし、体をガタガタと震わせる。

「だから、おねーちゃんにその目を向けるな！『無限・鬼身乱力』いま琴音が使った魔法は強化魔法、『無限シリーズ』の身体強化。ステータス的には魔王のMAXをも上回る。その凄まじい力で腕を振る、ギルドを血と瓦礫の海へと変貌させる。

数値の限界を超える魔法ということもあつてか魔力の消耗が激しいようで琴音はゼエゼエと息を荒らげ、顔色を若干悪くする。

「こ、琴音、大丈夫?」

再度トラウマをつつかれた希依もまた、体を震わせながらも琴音の心配をする。

「大丈夫だよ、おねーちゃん。この程度の、奴らに、負けたりなんかしない、から」

「じゃあ、なんでそんなのに無限なんて、使ったの?いつも通りでも勝てたでしょ?」

「すうう…はあー」と、深呼吸して呼吸を落ち着かせてから琴音は答えた。

「だつてき、私の大好きなおねーちゃんをそんなにしたんだもん、ちゃんと殺さないよ。」

ぶっ殺して、滅つ殺して、真つ殺さないよ」

かろうじて無事なソファを瓦礫から見つけた琴音は破片等をどかし、希依をそこに寝かせる。

「ことね?なにを…」

琴音はソファに座り、太腿に希依の頭を乗せて頭を撫でる。

「少しはこれでマシになった?」

「…うん。ありがとう」

普段とは逆の位置にいる希依は赤く染めた顔を隠すために琴音のお腹がある方に顔を向けてうずめる。

「ねえ、おねーちゃん」

「…なに?」

「この姿勢でよく耳かきしてくれるけどさ、やりずらくない?」

希依の右耳を触りながらふと気になったことを訊ねる。

「…今聞くこと?まあ、やりずらいけど。リンちゃんとかリリアちゃんみたいな獣人の子は縦に膝枕するとやりやすいよ」

「へー。おねーちゃん、そんなことしてたんだ。浮気?」

「浮気じゃないもん」

「そっか。」

「おねーちゃん、今日はもう帰ろ？ダンジョンはまた今度来ればいいよ」

「やだ。もう来ない」

「そう？私は別にいいけど」

「ダンジョンはヘルムートに作る」

「そっか。」

「その時は事前に相談してね？急にやると私まで怒られるんだから」

「ん、がんばる」

「がんばるって…」

「ま、おねーちゃんらしいか」

この後希依は眠ってしまい、琴音の魔力が回復してから希依をおんぶしてヘルムートまで転移して二人は帰っていった。